

5 4 3

11

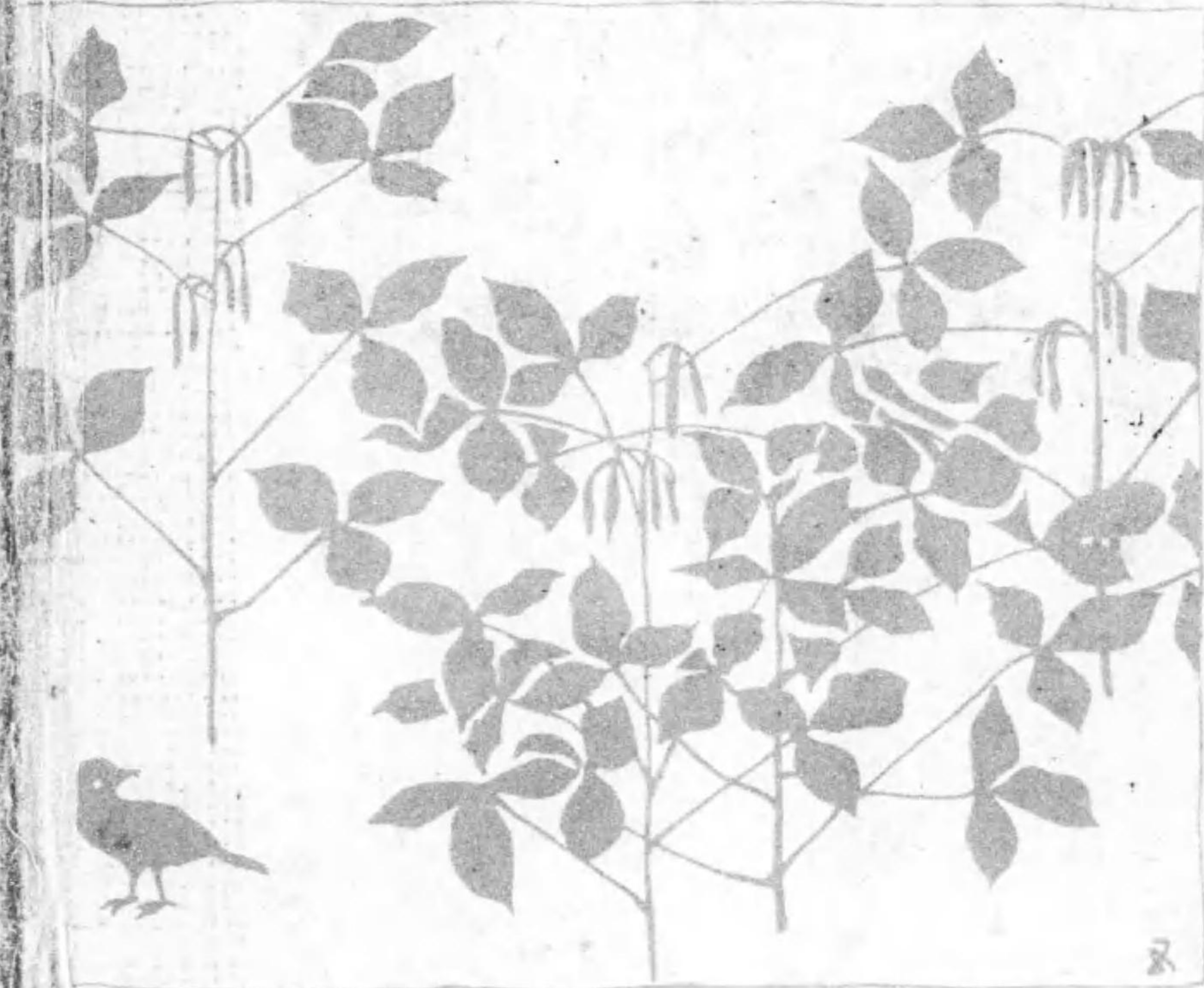
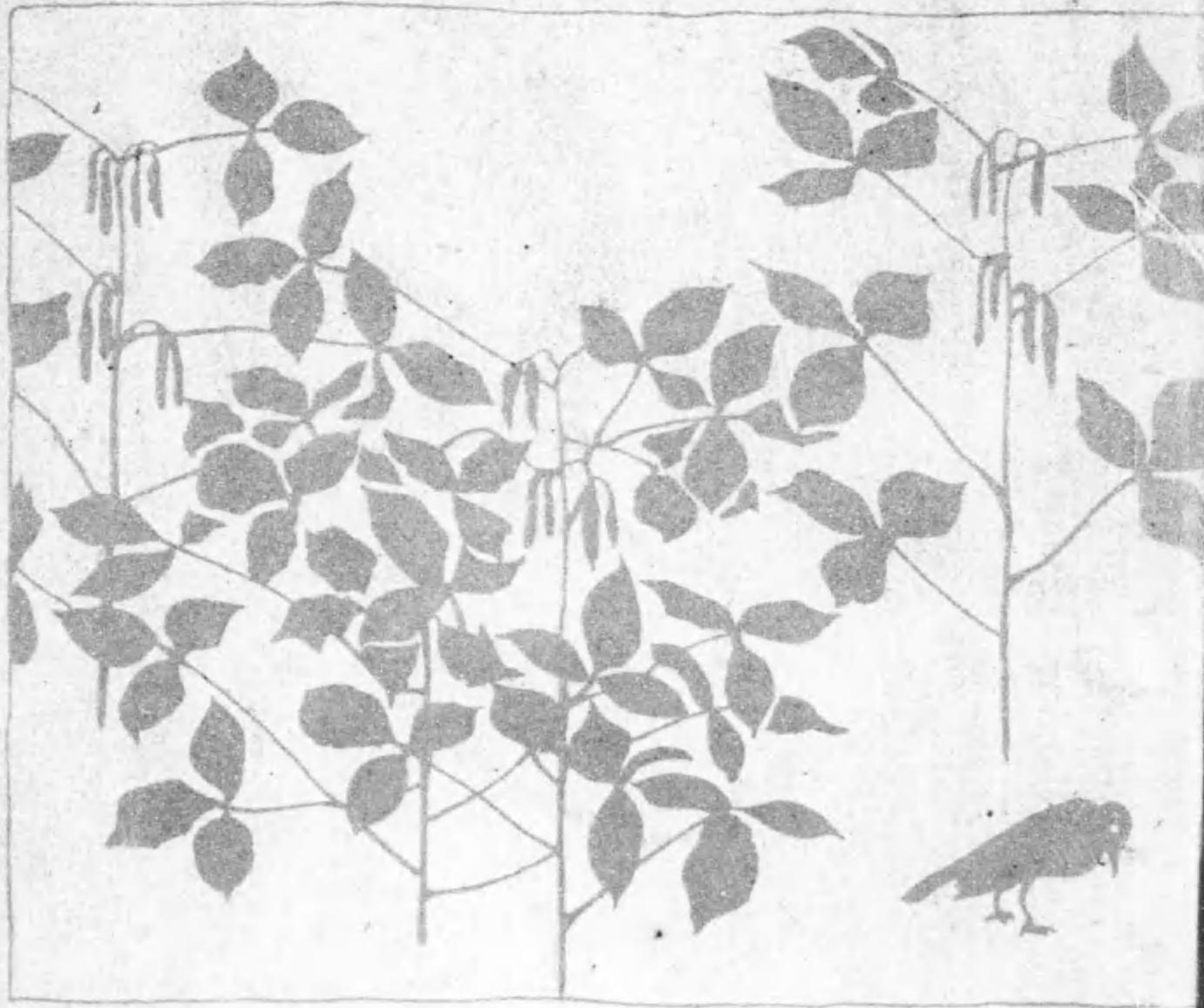


始



111







曲

集

正  
15. 6. 2  
交內

## 緒言

謠曲は猿樂の能に伴ふ章曲にして、室町幕府の世、能の發達と相俟つて形成せられたる一大文學也。而して、其能が古來幾多の舞樂の集大成せられたるものなるが如く、文亦各種の文學の綜合と見るべきものにして、上古、中古の古典に見ゆる傳説、歌物語等より、近古時代の戰記物に至るまで、凡そ有名なる文章と話篇とは、殆ど擧げて謠曲の材料に供せられたりと稱するも、敢て過言に非ず。而して、その行文の多くは歌語を根底とし、更に釋氏の説法を以て潤色せり。蓋し文學即歌、思想即佛に過ぎざりし時代精神の反映と稱すべし。

謠曲の結構は泰西の所謂戯曲ドラマに髣髴たるものありと雖も、而も尙頗る幼稚にして、全然叙事詩の痕跡を残せる物尠からず。その神事能といひ、幽靈能といひ、又は狂女物といふが如き、殆ど同巧異曲にして、甚だ變化に乏し。然りと雖も、能く古來の文學を綜合集成して、國民の文學上の聯想に愬へ、或は清婉羽衣の如き、艶麗松

風の如き、幽立大原御幸の如き、壯烈安宅の如き、幾多の名曲を成せる技量は、亦大いに見るべきものあり、殊にその影響を江戸文學に及ぼしたる効果に至りては、特に其偉大なるを認めずんばあらず。

本書の校訂上に採りたる方針大略次の如し。

- 一、觀世流改訂謄本を底本とし、その内外二百番を上下二冊に分ちて刊行す。
- 一、讀物として文章に重きを置くに努めたれど、次第、一聲、道行、歌、語等の文句の上の名目をも記し、サシ、クリ、ロンギ、クセ、ワカ、キリ等謠ひ方の上の名目をも掲げ、舞の箇所をも示せり。蓋し謠曲は詞と謠とを二大要素とすれば也

大正三年六月

校訂者 野村 八良

謠曲集上 目錄

|     |       |       |    |
|-----|-------|-------|----|
| 内 一 | 高砂    | ..... | 一  |
|     | 田村    | ..... | 七  |
|     | 江口    | ..... | 四  |
|     | 班女    | ..... | 二〇 |
|     | 鶉飼    | ..... | 二七 |
| 内 二 | 難波    | ..... | 三三 |
|     | 兼平    | ..... | 四一 |
|     | 千手    | ..... | 四八 |
|     | 卒都婆小町 | ..... | 五五 |

目錄

紅葉狩 ..... 三

内 三

|     |       |   |
|-----|-------|---|
| 老松  | ..... | 七 |
| 頼政  | ..... | 七 |
| 井筒  | ..... | 九 |
| 三井寺 | ..... | 八 |
| 天鼓  | ..... | 九 |

内 四

|     |       |     |
|-----|-------|-----|
| 白樂天 | ..... | 一〇一 |
| 實盛  | ..... | 一〇七 |
| 楊貴妃 | ..... | 一一五 |
| 玉葛  | ..... | 一二三 |
| 融   | ..... | 一二七 |

內五

○養老……………一三五  
 清經……………一四一  
 采女……………一四九  
 通小町……………一六六  
 小袖會我……………一六一

內六

竹生島……………一六九  
 朝長……………一七四  
 姨捨……………一八三  
 柏崎……………一八八  
 阿漕……………一九六

內七

志賀……………二〇三

鶴……………二〇九

大原御幸……………二一五

梅枝……………二二四

誓願寺……………二三〇

內八

蟻通……………二三七

忠度……………二四三

熊野……………二五〇

遊行柳……………二五八

藤戶……………二六四

內九

玉井……………二七一

○景清……………二七〇

杜若……………二八六

二人靜……………二九二

安達原……………二九八

內十

賀茂……………三〇五

松風……………三一七

西行櫻……………三二五

浮舟……………三三一

內十一

吳服……………三三七

八島……………三三三

鸚鵡小町……………三五三

葛城……………三五八

當麻……………三六四

內十二

海士……………三七二

鞍馬天狗……………三七九

定家……………三八六

咸陽宮……………三九三

○東岸居士……………三九九

內十三

龍田……………四〇三

夜討會我……………四〇九

夕顔……………五一七

隅田川……………四三  
雲林院……………四三

內十四

春日龍神……………四七  
船橋……………四三  
源氏供養……………四九  
花筐……………四五  
富士太鼓……………四六

內十五

皇帝……………四六  
通盛……………四七  
檜垣……………四八  
櫻川……………四六

山姥……………四九

內十六

冰室……………五〇  
善界……………五〇  
芭蕉……………五一  
百萬……………五二  
船辨……………五七

內十七

右近……………五五  
女郎花……………五一  
關寺小町……………五八  
自然居士……………五五  
大會……………五六

內十八

三輪……………五九  
安宅……………五四  
東北……………五五  
蟬丸……………五九  
猩猩……………五九

內十九

白髭……………六一  
盛久……………六七  
佛原……………六五  
善知鳥……………六〇  
小鹽……………六七

內二十

○邯鄲……………六三

殺生石……………六九

野宮……………六四

錦木……………六五

唐船……………六六

內二十一

○弓八幡……………六七  
鉢木……………七三  
羽衣……………六八  
道成寺……………六一  
龍虎……………六六

內二十二

芦刈……………七〇



|    |       |    |
|----|-------|----|
| 敦盛 | ..... | 七三 |
| 木賊 | ..... | 七九 |
| 葵上 | ..... | 七七 |
| 輪藏 | ..... | 七三 |

謠曲集

内一

高砂

概梗

古今集の序に、「高砂住の江の松も相生のやうにおぼえとあるに據りて、この名木の精を出して由來を語らしむるめでたき祝言能なり。(脇能)

前シテ 松の精(尉) 後シテ 住吉明神  
 シテツレ 松の精(姫) ワ キ 神 主

ワキ三人次第通「今を始の旅衣、今を始の旅衣、日も行く末ぞ久しき。ワキ詞「そもく是は九州肥後國、阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われいまだ都を見ず候程に、此度思立ち都に上り候。又よき次なれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候。三人道行謠「旅衣

内一「高砂

尾上—尾上寺

誰をかも—末句  
友ならなくに  
〔古今集〕

生の松—筑前の  
生の松原

末はるぐの都路を、末はるぐの都路を、今日思ひ立つ浦の波、舟路のどけき春風の、  
幾日来ぬらん跡末も、いさ白雲のはるぐと、さしも思ひし播磨灘、高砂の浦に著きに  
けり。高砂の浦に著きにけり。

シテ、ツレ二人一雙謡「高砂の、松の春風吹き暮れて、尾上の鐘もひどくなり。ツレ謡「波は霞の磯が  
くれ、二人謡「音こそしほの満干なれ。シテ、サシ謡「誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔の友  
ならで、二人謡「過ぎ來し世々はしら雪の、積りくくて老の鶴の、埒に残る有明の、春の  
霜夜の起居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と菅蓆の、思を述ぶるばかりなり。  
下歌おとづれば松にこと問ふ浦風の、葉落衣の袖をへて、木陰の塵を搔かうよ。木陰の塵  
を搔かうよ。上歌所は高砂の、所は高砂の、尾上の松も年ふりて、老の波もよりくるや、  
木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久き名所かな  
それも久き名所かな。

ワキ詞「里人を相待つ處に、老人夫婦來れり いかには是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞「こ

古今集—醍醐の  
御宇紀貫之等勅  
を奉じて撰ぶ

なたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「高砂の松とはいづれの木を申し候ぞ。シテ詞「唯今  
木陰を清め候こそ高砂の松にて候へ。ワキ詞「高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉  
とは國を隔てたるに、なにとて相生の松とは申し候ぞ。シテ詞「仰のごとく古今の序に、高  
砂住の江の松も、相生のやうに覺えとありさりながら、この尉は津の國住吉の者、これ  
なる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申させ給へ。ワキ謡「ふしぎや見れば老人の、夫  
婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國を隔てよ住むと、云ふはいかなる事や  
らん。ツレ謡「うたての仰せ候や、山川萬里を隔つれども、互に通ふ心遣の、妹背の道  
は遠からず。シテ詞「まづ案じても御覽ぜよ。シテ、ツレ二人謡「高砂住の江の、松は非情のもの  
だにも相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴  
れたる尉と姥は、松もろともに此年まで、相生の夫婦となるものを。ワキ謡「謂れを聞けば  
面白や。さてくさきに聞えつる。相生の松の物語を、所に言ひ置く謂れはなきか。  
シテ詞「昔の人の申しよは、是はめでたき世のためしなり。ツレ謡「高砂といふは上代の、

時つ風云々一主  
充論術に「太平  
之世五日一風十  
日一雨風不鳴  
條雨不破塊」

萬葉集の古の義、シテ詞「住吉と申すは、今此御代に住み給ふ延喜の御事、ツレ謡「松とは  
盡ぬ言の葉の、シテ詞「榮えは古今相同じと、シテ、ツレ二人謡「御代をあがむる喩なり。ワキ謡「よ  
くよく聞けばありがたや。今こそ不審春の日の、シテ謡「光和らぐ西の海の、ワキ謡「かしこは  
住の江、シテ謡「こよは高砂、ワキ謡「松も色そひ、シテ謡「春も、ワキ謡「長閑に、上歌「四海波靜にて、  
國も治る時つ風、枝を鳴さぬ御代なれや。逢ひに相生の、松こそめでたかりけれ。けに  
や仰ぎても言もおろかや斯る世に、住める民とて豊なる、君の恵ぞありがたき。君の恵  
ぞありがたき。

ワキ詞「猶々高砂の松のめでたき謂れ、委く御物語り候へ。ツレ地謡「それ草木心なしとは申せ  
ども、花實の時をたがへず、陽春の徳を具て、南枝花始て開く。シテサシ謡「然れども此  
松は、其氣色長へにして、花葉時を分ず、地謡「四つの時至ても、一千年の色雪の内  
深く、又は松花の色十返りとも云へり。シテ謡「かよるたよりを松が枝の、地謡「言の葉草の露  
の玉、心を磨く種となりて、シテ謡「生きとし生けるもの毎に、地謡「敷島の陰によるとかや。

長能一藤原氏一  
條天皇の頃の歌  
八今一ちやらの  
うと謡へり  
十八公一松の字  
吳丁固の故事  
始皇云々一秦始皇  
皇帝泰山に封禪  
して雨を松下に  
避け其樹を封じ  
て五太夫とす  
松の葉の散りう  
せずして云々一  
古今集序の詞

クセ然るに長能が言葉にも、有情非情のその聲、みな歌に漏るゝ事なし。草木土砂風聲  
水音迄、萬物の籠る心あり。春の林の東風に動き、秋の虫の北露に鳴くも、皆和歌の姿  
ならずや。中にも此松は、萬木に優て、十八公の粧ひ、千秋の縁を爲して、古今の色を  
見ず、始皇の御爵に、あづかる程の木なりとて、異國にも本朝にも、萬民之を賞翫す。  
シテ謡「高砂の尾上の鐘の音すなり。地謡「曉かけて、霜はおけども松が枝の、葉色は同じ  
深緑、立ち寄る蔭の朝夕に、かけども落葉の盡きせぬは、眞なり松の葉の、散り失せず  
して色は猶、正木の蔓長き世の、譬なりける常磐木の、中にも名は高砂の、末代のため  
しにも、相生の松ぞめでたき。ロンギけに名を得たる松が枝の、けに名を得たる松が枝の、  
老木の昔現して、其名を名乗給へや。シテ、ツレ二人謡「今は何をか包べき。是は高砂住の江の、  
相生の松の精、夫婦と現じ來りたり。地謡「ふしぎやさては名所の、松の奇特を現して、  
シテ、ツレ二人謡「草木心なければども、地謡「畏き代とて、シテ、ツレ二人謡「土も木も、地謡「吾大君の  
國なれば、いつまでも君が代に、住吉にまづ行きて、あれにて待ち申さんと、夕波の汀

われ見ても一伊勢物語の歌  
 睦ましと一末句「久しき世よりいはひそめてき」伊勢物語の歌住吉明神、前の歌に對へたりといふ  
 西の海一「西の海や楳が原の波間よりあらはれ出し住吉の神」  
 檀古今集の歌  
 あはきが原一今「あをきが原」と謡ふ  
 青海波、還城樂、千秋樂、萬歳一共に樂名

なる、海人の小舟に打ち乗りて 追風にまかせつと、沖の方に  
 出にけりや、沖の方に  
 出にけり。ワキ上歌謡「高砂や、此浦舟に帆をあけて、此浦舟に帆をあけて、月もろともに出  
 で汐の、波の淡路の島陰や、遠く鳴尾の沖過て、はや住の江に著きにけり。早や住の江に  
 著きにけり。後シテ謡「われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松幾世經ぬらん。睦まし  
 と君は知らずや瑞籬の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すどしめ給へ御  
 奴たち。地謡「西の海、あはきが原の波間より、シテ謡「現れ出でし神松の、春なれや。残  
 の雪の淺香湯、地謡「玉藻刈るなる岸陰の、シテ謡「松根に倚つて腰を摩れば、地謡「千年の  
 緑手に満てり。シテ謡「梅花を折つて頭に挿せば、地謡「二月の雪衣に落つ。  
 (神舞) ロンギ地謡「ありがたの影向や、ありがたの影向や。月住吉の神遊、御影ををがむあら  
 たさよ。シテ謡「けにさまざまの舞姫の、聲も澄むなり住の江の、松影も映るなる。青海波  
 とは是やらん。地謡「神と君との道すぐに、都の春にゆくべくは、シテ謡「それぞ還城樂の  
 舞。地謡「さて萬歳の、シテ謡「小忌衣、地謡「さす腕には惡魔を拂ひ、をさむる手には壽福を

抱き、千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風、颯々の聲ぞ樂む。颯々の  
 聲ぞ樂む。

田村

梗概

京都清水寺にて、田村丸の靈旅僧に觀世音の功德を述べ、かたがた東夷征伐の際鈴鹿の惡魔を鎮めし軍功を物語るめでたき曲なり。八島服と共に勝修羅三番の稱あり。勝修羅は勝軍を脚色せる能なり。(三番目)

シテ 田村丸(前は童子) ワキ 僧

ワキ三人次第誦「鄙の都路隔て來て、鄙の都路隔て來て、九重の春に急かん。ワキ詞是は東國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に、此春思立て候。ワキ三人道行誦「頃もはや、彌生なかばの春の空、彌生なかばの春の空、影も長閑にめぐる日の、霞む其方や音羽山、瀧の響も靜なる、清水寺に著きにけり。清水寺に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に是は都清水寺とかや申すけに候。是なる櫻の盛とみえて候。人を待ちて委く尋ねばやと思ひ候。シテ一雙誦「おのづから、春の手向となりにけり、地主権現の花ざかり。ヤシそれ

十惡一殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡、三十三身一觀音の身を三十三種に示現すること、五濁一劫濁、見濁、煩惱、衆生濁、命濁、

花の名所多しといへども、大悲の光色添ふゆゑか、この寺の地主の櫻に若くはなし。さればにや大慈大悲の春の花、十惡の里に芳く、三十三身の秋の月、五濁の水に影きよし。下歌「千早振神の御庭の雪なれや、上歌「白妙に、雲も霞もうづもれて、雲も霞もうづもれて、いづれ櫻の梢ぞと、見わたせば八重一重、けに九重の春の空、四方の山なみおのづから、時ぞと見ゆる氣色かな。時ぞと見ゆる氣色かな。

ワキ詞「いかに是なる人に尋ね申すべきことの候。シテ詞「こなたの事にて候か。何事にて候ぞ。ワキ詞「見申せばうつくしき玉簪を持ち、木蔭を清め給ひ候は、若し花守にて御入り候か。シテ詞「さん候。是は此地主権現に仕へ申す者なり。いつも花の頃は木蔭を清め候程に、花守とや申さん、又御奴とや申すべき。いづれに由ある者と御覽候へ。ワキ詞「けにく由ありけに見えて候。先々當寺の御來歴、くはしく語り給ふべし。

シテ詞「そもく當寺清水寺と申すは、大同二年の御草創、坂上の田村丸の御願なり。昔大和國子島寺といふ所に、賢心といへる沙門、正身の觀世音を拜まんと誓ひしに、ある

檀那—施主

安樂世界—極樂淨土

娑婆—現世

閑清寺—桓武天皇御宇紹繼法師之を開く

時木津川の川上より、金色の光さしよを、尋ね上つて見れば一人の老翁あり。かの翁語つていはく、我は是れ行寂居士といへり。汝一人の檀那を待ち大伽藍を建立すべしとて、東をさして飛び去りぬ。されば行寂居士といつば、これ観音薩埵の御再誕、謠又檀那を待てとありしは、是れ坂上の田村丸。上歌地謠今も其名に流れたる清水の、名に流れたる清水の、深き誓ひも數々に、千手の御手のとりぐ、さまざまの誓ひ普く、國土萬民を漏らさじの、大悲の影ぞありがたき。けにや安樂世界より。今この娑婆に示現して、我らが爲の觀世音、仰ぐも愚なるべしや。仰ぐも愚なるべしや。

ワキ詞「近頃おもしろき人に參り逢ひて候ものかな。又見え渡りたるは皆名所にてぞ候らん。御教へ候へ。シテ詞「さん 候 皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし。ワキ詞「まづ南に當つて塔婆の見えて候は、いかなる所にて候ぞ。シテ詞「あれこそ歌の中山清閑寺、今熊野まで見えて候へ。ワキ詞「また北に當て入相の聞え候は、いかなる御寺にて候ぞ。シテ詞「あれは上見ぬ鷲尾の寺。や、御覽候へ、音羽の山の嶺よりも、出でたる月のかよやきて、

たゞ頼め—新古今集の歌清水觀音の御歌と傳ふ但初句尙頼め  
枯れたる木云々—枯木開花は千手觀音弘誓の利生

この地主の櫻にうつる景色、まづこれこそ御覽じ事なれ。ワキ謠「けにくは是こそ暇惜しけれ。こと心なき春の一時。シテ謠「けに惜しむべし。ワキ謠「惜しむべしや。シテワキ二人謠「春宵一刻、價千金、花に清香、月に影。シテ謠「けに千金にもかへじとは、いま此時かや。地謠「あらあら面白の、地主の花の景色やな。櫻の木のままに漏る月の、雪もふる夜嵐のさそふ花とつれて、散るや心なるらん。クセさぞな名にしおふ、花の都の春の空、けに時めける粧ひ、青楊の影みどりにて、風のどかなる、音羽の瀧の白糸の、くり返しかへしても面白や、ありがたやな。地主権現の、花の色も異なり。シテ謠「只頼め、標茅原のさしも草、地謠「われ世の中に、あらんかぎりはの御誓願、にこらじ物を清水の、縁もさすや青柳の、けにも枯れたる木なりとも、花櫻木の粧ひ、いづくの春もおしなめて、長閑き影は有明の、天も花に酔へりや。面白の春べや。あら面白の春べや。

ロンギ地謠「けにやけしきを見るからに、只人ならぬ粧ひの、其名いかなる人やらん。シテ謠「いかにも、いさやその名も白雪の、跡を惜まば此寺に、歸る方を御覽ぜよ。地謠「歸るや

遠近の古今集の歌下句「覺東なくも呼子鳥かき」

いづく蘆垣の、間近きほどか遠近の、シテ謡「たづきも知らぬ山中に、地謡おほつかなくも思ひ給はど、わが行く方を見よとて、地主権現の御前より、下るかと見えしが、くだりはせで坂上の田村堂の軒もるや、月のむら戸を押しあけて、内に入らせ給ひけり。内陣に入らせ給ひけり。(中入)

ワキ上歌謡「夜もすがら、散るや櫻の蔭に居て、散るや櫻の蔭に居て、花も妙なる法の場、迷はぬ月の夜と共に、此御經を讀誦する。此御經を讀誦する。此御經を讀誦する。

後シテ一聲謡「あらありがたの御經やな。清水寺の瀧つ波、まこと一河の流を汲んで、他生の縁ある旅人に、言葉をかはず夜聲の讀誦、これぞすなはち大慈大悲の、觀音擁護の結縁たり。

ワキ謡「不思議やな花の光にかよやきて、男體の人の見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ謡「今は何をか包むべき。人皇五十一代、平城天皇の御宇にありし、坂上の田村丸、地謡「東夷を平け悪魔を鎮め、天下泰平の忠勤たりしも、すなはち當寺の佛力なり。サレしか

普天の下詩經に「普天之下莫非王土卒土之濱莫非王臣」かげらふの石山の枕詞  
土も木も「土も木も我大君の國なるにいくか鬼のすみかなるらん」天智の朝に叛臣千方あり鬼を使ふ紀友雄之を討つ時右の歌を送る諸鬼退散すといふ

るに君の宣旨には、勢州鈴鹿の悪魔を鎮め、都鄙安全になすべしとの、仰せによつて軍兵を調べ、既に赴く時節に至りて、此觀音の佛前に参り、祈念をいたし立願せしに、シテ謡「不思議の瑞驗あらたなれば、地謡「歡喜微笑の頼を含んで、急ぎ凶徒に、打つ立ちけり。クセ普天の下、卒土の中、いづく王地にあらざるや。やがて名にしおふ、關の戸さよで逢坂の、山を越ゆれば浦波の、粟津の森やかけるふの、石山寺を伏し拜み、是も清水の一佛と、頼みはあひに近江路や、勢田の長橋踏みならし駒も足並や勇むらん。シテ謡「既に伊勢路の山ちかく、地謡「弓馬の道もさきかけんと、勝色みせたる梅が枝の、花も紅葉も色めきて、猛き心はあらかねの、土も木もわが大君の神國に、もとより觀音の御誓ひ、佛力といひ神力も、猶數々に大丈夫が、待つとは知らでさを鹿の、鈴鹿の禊せし世々までも、思へば佳例なるべし。  
地謡「さる程に山河を動かす鬼神の聲、天に響き地に満ちて、満目青山動搖せり。シテ謡「いかに鬼神もたしかに聞け、昔もさる例あり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も、王意を背く

咒咀諸毒藥念彼  
云々—法華經普  
門品の語

天罰にて、千方を捨つれば忽ち亡び失せしぞかし。謠ましてや間近き鈴鹿山、地誦、ふりさ  
け見れば伊勢海、ふりさけ見れば伊勢海、阿濃松原むらだち來つて、鬼神は黒雲鐵火を  
ふらしつと、數千騎に身を變じて、山の如くに見えたる所に、シテ誦、あれを見よ不思議や  
な。地誦、あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の、光を放つて虚空に  
飛行し、千の御手毎に、大悲の弓には智慧の矢をはめて、一度放せば千の矢先、雨霞と  
ふりかよつて、鬼神の上に亂れおつれば、ことごとく矢先にかよつて、鬼神は残らず討  
たれにけり。ありがたしありがたしや。眞に咒咀、諸毒藥念彼、觀音の力を合せて、す  
なはち還著於本人、すなはち還著於本人の、敵は亡びにけり。これ觀音の佛力なり。

江口

梗

概

江口の君の幽靈西行法師と歌詠み交したる昔語をなす事  
を脚色す。この故事、法師の作といはるゝ撰集抄に見ゆ。  
末段普賢菩薩と現はるゝことは、書寫の性空土人が生身の  
菩薩を拜せむと祈り、室の遊女の家に行きて奇瑞に會ふ事  
を加味せるなり。此故事亦同書及び古事談に見ゆ。(靈物)

シテ 江口の君(前は里女) ツレ 遊女

ワキ僧

ワキ次第論「月は昔の友ならば、月は昔の友ならば、世の外いづくならまし。詞これは諸  
國一見の僧にて候。我未だ津の國天王寺に參らず候程に、此度思立ち天王寺に參らばや  
と思ひ候。道行謠都をば、まだ夜深きに旅立ちて、まだ夜深きに旅立ちて、淀の川舟行末  
は、宇殿の蘆のほの見えし、松の煙の浪よする 江口の里に著きにけり。江口の里に著  
きにけり。狂言しかく。ワキサシ謠」さてはこれなるは江口の君の舊跡かや。痛はしやその身

宇殿—津國島上  
郡、蘆の名所  
江口—同國江口  
の君は此里の遊  
女



其身は土中に  
白氏文集に「龍  
門原上土埋骨  
不埋名」

は土中に埋むといへども、名は留りて今までも、昔語りの舊跡を、今見る事のあはれさよ。詞實にや西行法師この所にて、一夜の宿を借りけるに、主の心なかりしかば、諸世の中を厭ふまでこそ難からめ、詞假の宿りを惜む君かなと詠じけんも、此所にての事なるべし。謡あら痛はしや候。

シテ詞「なうくあれなる御僧、今の歌をば何と思ひよりて口ずさみ給ひ候ぞ。ワキ詞「不思議やな人家も見えぬ方よりも、女性一人來りつと、今の詠歌の口ずさみを、如何にと問はせ給ふ事、そも何故に尋ね給ふぞ。シテ詞「忘れて年を経し物を、又思ひ染む言の葉の、諸草の蔭野の露の世を、厭ふまでこそ難からめ、かりの宿りを惜むとの、其言の葉も恥かしければ、さのみは惜み參らせざりし、其理をも申さん爲に、是まで現れ出でたるなり。ワキ詞「心得ず假の宿りを惜む君かなと、西行法師が詠ぜし跡を、たど何となく弔ふ所に、さのみは惜まざりにしと、ことわり給ふ御身はさて、詠如何なる人にてましますぞ。シテ詞「いやさればこそ惜まぬよしの御返事を、申しと歌をば何とてか詠じもせさせ給はざる

色好みの古今  
集序に色好の家  
に埋木の人知れ  
ぬ事となりて

らん。ワキ詞「けに其返歌の言の葉は、世を厭ふ、シテ詞「人とし聞けば假の宿に、詞心留むなと思ふばかりぞ。心とむなと捨人を、諫め申せば女の宿りに、とめ參らせぬも理ならずや。ワキ詞「けに理なり西行も、假の宿りを捨人といひ、シテ詞「此方も名におふ色好の、家にはさしも埋木の、人知れぬ事のみ多き宿に、ワキ詞「心とむなと詠じ給ふは、シテ詞「捨人を思ふ心なるを、ワキ詞「唯惜むとの、シテ詞「言の葉は、上歌地謡「惜むこそ、惜まぬ假の宿なるを、惜まぬ假の宿なるを、などや惜むと夕波の、かへらぬ古は今とても、捨人の世語りに、心な留め給ひそ。

ロンギ地謡「けにや浮世の物語、聞けば姿も黄昏に、かゆるふ人は如何ならん。シテ詞「黄昏にたよむ影はほのぐと、見え隠なる川隈に、江口の流れの君とや見えん恥かしや。地謡「さては疑ひ荒磯の、波と消えにし跡なれや。シテ詞「假に住み來し我宿の、地謡「梅の立枝や見えつらん。シテ詞「思の外に、地謡「君が來ませるや、一樹の蔭にや宿りけん。又は一河の流の水、汲みても知し召されよや。江口の君の幽靈ぞと、聲ばかりして失せにけり。

我宿の一拾遺集  
の歌  
一樹の蔭云々  
他生の縁あるを  
らよ

佐用姫―其の夫  
大伴狹手彦任那  
に遣はされし時  
別を惜しむ  
橋姫―此神は女  
神にて之に通ふ  
男神ありとの傳  
説あり  
川道遙―船遊び  
のこと  
秋の水―秋水瀧  
來船去速(和漢  
朗詠集)

聲ばかりして失せにけり。(中入)  
ワキ詞「さては江口の君の幽靈假に現れ、我に言葉をかはしけるぞや。誦いざ吊ひて浮めん  
と、言ひもあへねば不思議やな。言ひもあへねば不思議やな。月澄み渡る河水に、遊女  
のうたふ舟遊び、月に見えたる不思議さよ。月に見えたる不思議さよ。  
上歌一聲地謡「河船を、とめて逢瀬の波枕、とめて逢瀬の波枕。浮世の夢を見習はしの、驚  
かぬ身のはかなさよ。佐用姫が松浦瀧、かたしく袖の涙の、唐舟の名残なり。また宇  
治の橋姫も、訪はんとせぬ人を待つも、身の上とあはれなり。よしや吉野の、よしや  
吉野の花も雪も雲も波も、あはれ世にあはれどや。  
ワキ詞「不思議やな月澄み渡る水の面に、遊女のあまたうたふ誦、色めきあへる人影は、そ  
も誰人の舟やらん。シテ謡「何此舟を誰が舟とは、恥しながら古の、江口の君の川道遙  
の、月の夜舟を御覽ぜよ。ワキ詞「そもや江口の遊女とは、それは去りにし古の、シテ詞「い  
や古とは、御覽ぜよ、月は昔にかはらめや。シテ、ツレ二人謡「我等もかやうに見え来るを、

十二因縁―無明  
行、誦、名色、六入  
觸、受、愛、取、有  
生、老死  
三途―火途、血  
途、刀途の三惡  
道  
八難―地獄、餓  
鬼、畜生、越北餓  
單、長壽天、佛後  
佛前、盲雙瘡、啞  
世智辯聰

いにしへ人とは現なや。シテ詞「よし／＼何かと宣ふとも、シテ、ツレ二人謡「言はじや聞かじ。  
シテ謡「むつかしや。シテ、ツレ三人謡「秋の水、みなぎり落ちて去る船の、シテ謡「月もかけさす  
棹の歌、うたへやうたへうたかたの、あはれ昔の戀しさを、いまも遊女の船遊び、世を渡  
る一節を、歌ひて、いざや遊ばん。ツレ地謡「それ十二因縁の流轉は、車の庭に廻るが如し。  
シテ謡「鳥の林に遊ぶに似たり。地謡「前生又前生。シテ謡「曾て生々の前を知らず。地謡「來世  
なほ來世、更に世々の終をわきまふる事なし。シテサシ謡「或は人中天上の善果を受くといへ  
ども、地謡「顛倒迷妄して未だ解脱の種を植ゑず。シテ謡「或は三途八難の惡趣に墮して、  
地謡「患にさへられて、既に發心のなかだちを失ふ。シテ謡「然るに我等たまく受けがた  
き人身を受けたりといへども、地謡「罪業深き身と生れ、殊にためし少なき河竹の、流れ  
の女となる。前の世の報いまで、思ひやるこそ悲しけれ。ツレ「紅花の春の朝、紅錦繡の  
山、粧ひをなすと見えしも、夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黄纈纈の林、色を含むと  
いへども、朝の霜にうつろふ。松風蘿月に詞をかはす賓客も、去つて來る事なし、翠帳

紅閨に枕をならべし妹背も、いつの間にかは隔つらん。およそ心なき草木、情ある人倫、  
 いづれあはれを遁るべき。かくは思ひ知りながら、シテ謡ある時は色に染み、貪著の思  
 浅からず。又ある時は聲を聞き、愛執の心いと深き、心に思ひ口に言ふ、妄舌の縁  
 となる物を。實にや皆人は、六塵の境に迷ひ、六根の罪を作る事も、見る事聞く事に、  
 迷ふ心なるべし。

六塵一色聲香  
 味觸法  
 六根一眼耳鼻  
 舌身意  
 五塵一六塵の法  
 塵を除く  
 六欲一六根より  
 起る欲

ふるごと一古來  
 の詩歌

地謡「おもしろや、(序の舞) シテ謡「實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、地謡「隨  
 縁真如の波の、たよぬ日もなし。たよぬ日もなし。シテ謡「波の立居も何故ぞ、假なる宿  
 に心とむる故、地謡「心とめずは浮世もあらず、シテ謡「人をも慕はじ。地謡「待つ暮もなく、  
 シテ謡「別路も嵐吹く、地謡「花よ紅葉よ月雪のふることも、あらずしなや。シテ謡「思へば假の  
 宿、地謡「思へば假の宿に、心とむなと人をだに、諫めし我なり。是までなりや歸るとて、  
 すなはち背賢菩薩と現れ、船は白象となりつゝ、光とともに白妙の、白雲に打ち乗りて、  
 西の空に行き給ふ。有難くぞ覺ゆる、有難くこそは覺ゆれ。

班女

概 梗  
 吉田の少將と契をこめし花子といふ女、形見の扇を持ちて  
 少將を戀ひ慕ひ、遂に狂亂せしが、少將糺の社へ參詣して、花  
 子に巡り會ふよしを作る。戀の古歌と、扇の故事とを以て  
 文飾とす。曲名は班婕妤より來る。(狂女物)

シテ 花子 ワキ 吉田少將  
 トモ 従者 狂言 宿の長

上臈一女の美稱

狂言かやうに候ものは、美濃國野上の宿の長にて候。さてもわれ花子と申す上臈を持ち  
 參らせて候が、過ぎにし春の頃都より、吉田の少將殿とやらん申す人の、東へ御下り候  
 が、此宿に御泊り候ひて、かの花子と深き御契の候ひけるが、扇を取替へて御下り候ひ  
 しより、花子扇に詠め入り、閨より外にいづる事なく候程に、彼の人を呼び出し追ひ出  
 ださばやと思ひ候。いかに花子、今日よりしてこれには叶ひ候まじ。とくく何方へも

都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関(能因法師)

御出で候へ。シテ謡けにやもとよりの定めなき世といひながら、うきふししけき河竹の、流の身こそ悲しけれ。下歌分け迷ふ、行くへも知らず濡衣、上歌野上の里を立ち出でて、野上の里を立ち出でて、近江路なれど憂き人に、わかれしよりの袖の露、そのまよ消えぬ身ぞつらき。そのまよ消えぬ身ぞつらき。(中人)

ワキ三人次第謡歸るぞ名残富士の嶺の、歸るぞ名残富士の嶺の、ゆきて都に語らん。ワキ詞「是は吉田の少將とはわが事なり。扱もわれ過ぎにし春の頃東に下り、はや秋にもなり候へば、只今都に上り候。ワキ三人道行謡都をば、霞と共に立ちいでて、霞と共に立ちいでて、しばし程ふる秋風の、おと白河の關路より、又立ち歸る旅衣、浦山すぎて美濃國、野上の里に著きにけり。野上の里に著きにけり。ワキ詞「いかに誰かある。急ぐ間これははや美濃國野上の宿にて候。此所に花子といひし女に契りし事あり。未だ此所にあるか、尋ねて來り候へ。トモ詞「畏つて候。花子の事を尋ね申して候へば、長と不和なる事の候ひて、今は此所には御入りなきよし申し候。ワキ詞「さては定めなき事ながら、若其花子歸り來る

糺下賀茂

春日野の云々古今集の歌

夕暮の夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ天つ空なる人をこふとて(古今集)

戀すてふ云々壬生忠見の歌御手洗川に戀せじと戀せじと御手洗川にせし御祓神はうけぞなりけらし(古今集)

事あらば、都へついでの時申し上せ候へと、かたく申しつけ候へ。急ぐ間程なく都に著きて候。われ宿願の仔細あれば、是より直に糺へ参らうするにて候。皆々参り候へ後シテ一聲謡、春日野の雪間をわけて生ひ出でくる、草のはつかに見えし君かも。詞よしなき人に馴衣の、日を重ね月はゆけども、謠世を秋風のたよりならでは、ゆかりを知らする人もなし。詞「夕暮の雲の旗手に物を思ひ、謠うはの空にあくがれ出でて、詞身を徒になすことを神や佛も憐みて、謠思ふことをかなへ給へ。それ足柄箱根玉津島、貴船や三輪の明神は、夫婦男女のかたらひを、守らんと誓ひおはします。此神々に祈誓せば、などか驗のなかるべき。謹上再拜。戀ひすてふ、我名はまだき立ちにけり、地謡「人知れずこそ思ひそめしか。シテ謡「あら恨めしの人心や。ヤシけにや祈りつと、御手洗川に戀せじと、誰かいひけん虚言や。されば人心、眞すくなき濁江の、澄まで頼まば神とても、受け給はぬはことわりや。ともかくにも人知れぬ、思ひの露の、下歌地謡「置き所、いづくならまし身の行方。上歌心だに、誠の道にかなひなば、誠の道にかなひなば、祈らずとも神や

心だに云々一宵  
公の歌と言ひ傳  
ふ

守らん、われらまで、眞如の月は曇らじを、知らで程へし人心、衣の玉はありながら、恨ありやともすれば、猶同じ世と祈るなり。猶同じ世と祈るなり。

トモ詞「いかに狂女、何とて今日は狂はぬぞ。面白う狂ひ候へ。シテ詞「うたてやなあれ御覽せ

よ、今まではゆるがぬ梢と見えつれども、風のさそへば一葉も散なり。謠たましく心すぐ

なるを、狂へと仰せある人々こそ、風狂じたる秋の葉の、心もともに亂糺の、あら悲や

狂へとな仰せありさむらひそよ。トモ詞「さて例の班女の扇は候。シテ詞「うつよなや我名を班

女と呼び給ふぞや。よし／＼それも憂き人の、形見の扇手にふれて、うちおきがたき袖

の露、古事までも思ひぞ出づる。謠班女が閨のうちには秋の扇の色、楚王の臺の上には

夜の琴の聲、地謠「夏はつる、扇と秋の白露と、いづれか先に臥起の、床冷しや獨寢の

さみしき枕して、閨の月をながめん。

クリ地謠「月重山にかくれぬれば、扇を擧てこれを譬へ、シテ謠「花琴上に散りぬれば、地謠「雪

班女の扇一班嫌  
好の怨歌行に見  
班女が閨云々一  
朗詠集の詩句  
夏はつる一末句  
道かんとすらん  
新古今集の歌

比翼連理云々  
楊貴妃の故事

團雪の扇一本朝  
文粹江匡衡の詩  
序の句

月をかくして云  
云一白氏文集に  
「藏月入懷中  
とあり、月は扇  
の繪なり

半の鐘の音、雞籠の山に響きつよ、明けなんとして別れを催し、シテ謠「せめて閨もる月だ  
にも、地謠「しばし枕に残らずして、又獨寢に成りぬるぞや。クセ 翠帳紅閨に、枕ならぶ  
る床の上、なれし衾の夜すがらも、同穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の、命のみを  
さりともと、いつまで草の露の間も、比翼連理のかたらひ、其驪山宮の私言も、誰か聞き  
傳へて、今の世まで漏らすらん。さるにても我夫の、秋より前に必ずと、夕の数は重な  
れど、あだし言葉の人心、頼めて來ぬ夜は積れども、欄干に立ちつくして、そなたの空  
よとながむれば、夕暮の秋風嵐山嵐野分も、あの松をこそは音づるれ。我待つ人よりの、  
音づれをいつ聞かまし。シテ謠「せめてもの、形見の扇手にふれて、「風のたよりのと思へども、  
夏もはや杉の窓の、秋風冷かに吹き落ちて、團雪の扇も雪なれば、名を聞くもすさまじ  
くて、秋風怨あり。よしや思へば是もけに、逢ふは別れなるべし。其報いなければ今さら、  
世をも人をも恨むまじ。たどおもはれぬ身の程を、思ひつゞけて獨居の、班女が閨ぞさ  
みしき。地謠「繪にかける。(中の舞)シテ謠「月を隠して懷に、持たる扇、地謠「とる袖も三重が

あふぎとは一扇  
に逢ふを掛く

さは、シテ謡「其色衣いろぎぬの、地謡「夫つまのかねごと、シテ謡「かならずと夕暮ゆふぐれの、月日つきひもかさなり、地謡「秋風あきかぜは吹ふけども萩はぎの葉はの、シテ謡「そよとの便たよりも聞かで、地謡「鹿しかの音ね蟲むしの音ねも、かれがれの契ちぎり、あらよしなや、シテ謡「かたみの扇あふぎより、地謡「かたみの扇あふぎより、猶裏表なまうらおもてあるものは、人心ひまごころなりけるぞや。あふぎとはそらごとや。逢あはでぞ戀こひは添そふものを、逢あはでぞ戀こひは添そふものを。

形見こそ伊勢  
物語の歌

ワキ詞「いかに誰たれかある、あの狂女きやうぢよが持もちたる扇見あふぎみたきよし申し候へ。トモ詞「いかに狂女きやうぢよ、あの御輿おこしの内うちより、狂女きやうぢよのもちたる扇御覽あふぎごらんじたきとの御事おんことにて候。まるらせられ候へ。シテ謡「是こゝは人ひとのかたみなれば、身みを離はなさでもちたる扇あふぎなれども、謡形身かたみこそ今はあだなれ是こゝはなくは、忘わするゝ隙ひまもあらまし物ものをと、思おもへどもさすが又、添そふ心地こころちするをりくは、扇あふぎとる間まも惜をしきものを、人ひとに見みする事ことあらじ。

ロンギ地謡「こなたにも、忘わすれがたみの言ことの葉はを、磐手いはでの杜もりの下躑躅したつらじ、色いろに出いでずはそれごと、見みてこそ知らめこの扇あふぎ、シテ謡「見みてはさて、何なにの爲ためぞと夕暮ゆふぐれの、月つきをいませる扇あふぎの繪ゑ

黄昏たふしにはのほく  
みえし云々源  
氏物語夕顔ゆがはの巻  
の故事ことばを引く

の、かくばかり問とひ給たまふは、何なにの御爲おためなるらん。地謡「何なにともよしや白露しらつゆの、草くさの野上のがみの旅寝たびねせし、契ちぎりの秋あきは如何いかならん。シテ謡「野上のがみとは、野上のがみとは、東路あづまぢの、末すえの松山波まつやまなみこそて歸かへらざりし人ひとやらん。地謡「末すえの松山まつやまたつ波なみの、何なにか恨うらみん契ちぎりおく、シテ謡「形見かたみの扇あふぎそなたにも、地謡「身みにそへ持もちしこの扇あふぎ、シテ謡「輿こしのうちより、地謡「取とり出いせば、折節せりふしたせ黄昏たふしに、ほのほの見みれば夕顔ゆがはの、花はなをかきたる扇あふぎなり。此上このうへは惟光これみつに、紙燭しそくめして、ありつる扇あふぎ、御覽ごらんせよ、たがひにそれぞと知られ、白雪しらゆきの扇あふぎのつまのかたみこそ妹背いもせの中なかの情なさけなれ、妹背いもせの中なかの情なさけなれ。

# 鶉飼

## 梗概

甲斐國石和川は殺生禁斷の場所なるに、夜毎に忍びて鶉を使ふ漁夫あり。里人之を捕へて水に沈め畢んぬ。其の亡靈たましく、日蓮上人の回向を受け、成佛す。(五番目)

シテ 闇王前は鶉使の靈

ワキ 日蓮上人 ツレ 從僧

ワキ詞 是は安房の清澄より出でたる僧にて候。我未だ甲斐國を見ず候程に、此度甲斐國行脚と志して候。サシ謠行末いつと白波の、安房の清澄立ち出でて、六浦のわたり鎌倉山、ワキ二人上歌謠やつれはてぬる旅姿、やつれはてぬる旅姿、捨つる身なれば恥ぢられず。一夜假寐の草薙、鐘を枕の上に聞く、都留の郡の朝立つも、日たけて越ゆる山道を、過ぎて石和に著きにけり。過ぎて石和に著きにけり。シテ一聲謠 鶉舟にともす篝火の、のちの闇路を如何にせん。サシ實にや世の中を、憂と思は

清澄—清澄寺日蓮上人の師の房六浦—武藏金澤都留の郡—甲斐石和—甲斐山梨郡

遊子伯陽—夫を遊子といひ婦を伯陽といふ共に月を愛し偕老を契る後死して天星となる

ば捨つべきに、其心更に夏河に、鶉使ふ事の面白さに、殺生をするはかなさよ、詞傳八聞く遊子伯陽は、月に誓つて契をなし、夫婦二つの星となる。謠今の雲の上人も、月なき夜半をこそ悲み給ふに、我はそれには引きかへ、月の夜頃を厭ひ、闇になる夜を悦べば、下歌 鶉舟にともす篝火の、消えて闇こそ悲しけれ。上歌つたなかりける身の業と、つたなかりける身の業と、今は先非を悔ゆれども、かひも浪間に鶉舟漕ぐ、是程惜しめども叶はぬ命つがんとて、營む業の物憂さよ。營む業の物憂さよ。シテ詞「いつもの如く御堂に上り鶉を休めうするにて候。や、是は往來の人の御入り候よ。ワキ詞「さん候。往來の僧にて候が、里にて宿を借り候へば、禁制の由申し候程に、さて此御堂に泊りて候。シテ詞「實にくり里にて御宿參らせうする者は覺えず候。ワキ詞「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ。シテ詞「さん候。是は鶉使にて候が、いつも月の程は此御堂に休らひ、月入りて鶉を使ひ候。ワキ詞「さては苦しからぬ人にて候ぞや。見申せば早拔群に年長け給ひて候が、かよる殺生の業勿體なく候。あはれ此業を御とまりあつて、餘の業にて身

科の中の云々  
殺生は佛教にて  
は最も重き戒と  
す

一殺多生一を  
殺して多を助く  
る意

命を御つぎ候へかし。シテ詞「仰せ尤もにて候へども、若年より此業にて身命を扶かり候程に、今更止まつよべうもなく候。ワキツレ詞「如何に申し候。此人を見て思ひ出だしたる事の候。此二三箇年前に、此河下岩落と申す所を通り候ひしに、かやうの鶉使に行き逢ひ候程に、科の中の殺生の由を申して候へは、實にもとや思ひけん、我が家に連れて歸り。一夜けしからず攝して候ひしよ。シテ詞「さては其時の御僧にて渡り候か、ワキツレ詞「さん候其時の僧にて候。シテ詞「なうその鶉使こそ空しくなりて候へ。ワキツレ詞「それは何故空しくなりて候ぞ。シテ詞「恥しながら此業にて空しくなりて候。其時の有様語つて聞かせ申し候べし、跡を弔うて御やり候へ。ワキツレ詞「心得申し候。シテ詞「抑此石和河と申すは、上下三里が間は堅く殺生禁斷の所なり。今仰せ候岩落邊に鶉使は多し、夜なく此所に忍び上つて鶉を使ふ。悪き者のしわざかな、彼を見顯はさんと計みしに、それをば夢にも知らずして、又或る夜忍び上つて鶉を使ふ。狙ふ人々ばつと寄り、一殺多生の理にまかせ、彼を殺せと言ひあへり。謠其時左右の手を合せ、かよる殺生禁斷の所とも知らず候。向後の事をこ

そ心得候べけれとて、手をあはせ歎き悲しめども、助くる人も波の底に、霖にし給へば、叫べど聲が出でばこそ。詞其鶉使の亡者にて候。ワキツレ詞「言語道斷の事にて候。さらば罪障懺悔に、業力の鶉を使うて御見せ候へ。跡をば懇に弔ひ申し候べし。シテ詞「あら有難や候。さらば業力の鶉を使うて御目にかけて候べし。跡を弔うて給はり候へ。ワキツレ詞「心得申し候。

シテ詞「既に此夜も更け過ぎて、鶉使ふ頃にもなりしかば、いざ業力の鶉を使はん。ワキツレ詞「是は他國の物語、死したる人の業により、かく苦みの憂き業を、今見る事の不思議さよ。シテ詞「しめる松明ふり立てよ、ワキツレ詞「藤の衣の玉襷、シテ詞「鶉籠を開き取り出し、ワキツレ詞「鳥つ巢おろし荒鶉ども、シテ詞「此河波にばつと放せば、地誦「面白の有様や 底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひ廻し、かづき上げすくひあけ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報も後世も、忘れはてと面白や。下歌「漲る水の淀ならば、生簀の鯉やのほらん。玉島河にあらねども、小鮎さばしるせどらぎに、かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の、燃えても影の

玉島河―神功皇  
后肥前松浦玉島  
川に鮎を釣り給  
ふ故事あり

他國―拾葉抄に  
墮獄かと疑へり



妙なる法一妙法  
蓮華經のこと

鐵札云々一閑摩  
王宮にて重罪の  
者を鐵の札に記  
し善人を金の札  
に記すと云ふ  
無間一阿鼻地獄  
のこと  
群類一總ての生  
類

暗くなるは、思ひ出でたり、月になりぬる悲しさよ。鵜舟の箒影消えて、闇路に歸る此身の、名残惜しさを如何にせん。名残惜しさを如何にせん。(中入)

ワキ上歌謠、河瀬の石を拾ひ上げ、河瀬の石を拾ひ上げ、妙なる法の御經を、一石に一字書きつけて、波間に沈め弔はど、などかは浮まざるべき。などかは浮まざるべき。

後シテ謠、それ地獄遠きにあらず、眼前の境界、惡鬼外になし。抑彼者、若年の昔より、詞江河に漁つて其罪おびたよし。されば鐵札數を盡し、金紙をよごす事もなく、謠無間の

底に詞墮罪すべかつしを、一僧一宿の功力に引かれ、急ぎ佛所に送らんと、惡鬼心を和ら

けて、鵜舟を弘誓の船に爲し、謠法華の御法の助舟、箒火も浮むけしきかな。地謠「迷の多

き浮雲も、シテ謠實相の風あらく吹いて、地謠「千里が外も雲はれて、眞如の月や出でぬら

ん。

上ロンギ地謠「有難の御事や。奈落に沈む惡人を、佛所に送り給ふなる、其瑞相のあらたさよ。

シテ謠「法華は利益深き故、魔道に沈む群類を、救はん爲に來りたり。地謠「實に有難き誓か

往來利益一如來  
出世の利益

な。妙の一字はさて如何に。シテ謠「それは褒美の詞にて、妙なる法と説かれたり。地謠「經とはなどや名づくらん。シテ謠「それ聖教の都名にて、地謠「二つもなく、シテ謠「三つもなく、地謠「唯一乗の徳によりて、奈落に沈みはてよ、浮みがたき惡人の、佛果を得ん事は、此經の力ならずや。ヤッこれを見彼を聞く時は、是を見彼を聞く時は、たとひ惡人なりとても、慈悲の心を先として、僧會を供養するならば、其結縁に引かれつよ、佛果菩提に至るべし。實に往來利益こそ、他を助くべき力なれ。他を助くべき力なれ。

内二

難波

梗 概

古今集の序に和歌の六義を説く。曰く「そもく歌のさま六つなり。唐のうたにもかくぞあるべき。その六くさの一つにはそへ歌、大ききぎの御門をそへたてまつれる歌。難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花」とあるによりて作る。そへ歌は詩の六義の諷に當る。この花は梅なり。即ちこの歌王仁の詠めるなりと傳ふるに、より王仁を出し、この花の歌よりして、開耶姫をも出す。かくて御代をことほぐ意をあらはす。祝言能なり。(脇能)

シテ 王仁(前は老翁) ツレ 男 ツレ 木華開耶姫  
ワキ 臣下

ワキ三人道行誦「山も霞みて浦の春、山も霞みて浦の春。波風静なりけり。ワキ詞、抑是は當今

風莫の濱一紀伊  
吹上の濱一同國  
紀路の關一雄の  
山にありたりと  
言ふ

長柄の橋一云々  
古今集の序にお  
る詞

春日野に云々  
下句祝ふ心は神  
ぞしるらん古今  
集の歌

に仕へ奉る臣下なり。我三熊野を信じ、毎年年籠仕り候。此度は所願成就し、年  
歸る春にも成り候へば、唯今都に下向仕り候。ワキ三人道行誦「春立つや、實にも長閑けき風  
莫の、實にも長閑けき風莫の、濱の眞砂も吹上の、浦傳ひして行く程に、早くも紀路の  
關越えて、是も都か津の國の、難波の里に著きにけり。難波の里に著きにけり。

シテ、ツレ一「整誦」君が代の、長柄の橋も造るなり。難波の春も幾久し。ツレ誦「雪にも梅の冬籠  
シテ、ツレ誦「今は春へのけしきかな。シテ、サシ誦「それ天長く地久くして、神代の風長閑に傳は  
り、シテ、ツレ誦「皇の賢き御代の道廣く、國を恵み民を撫でて、四方に治まる八洲の波、静に  
照す日の本の、影ゆたかなる時とかや。下歌「春日野に、若菜摘みつと萬代を、上歌「祝ふ  
なる、心ぞしるき曇りなき、心ぞしるき曇りなき、天つ日嗣の御調物、運ぶ蒼や都路の  
直なる御代を仰がんと、關の戸さよで千里まで、普く照らす日影かな。普く照らす日影  
かな。

ワキ詞「如何に是なる老人に尋ねべき事の候。シテ詞「こなたの事にて候か何事にて候ぞ。

ワキ詞「不思議やな諸木こそ多き中に、是なる梅の木蔭を立ち去らずして、蔭を清め賞翫し給ふ事不審なり。若し此梅は名木にて候か。シテ詞御姿を見奉れば、都の人にて御座候が、此難波の浦に於て、色異なる梅花を御覽じて、名木かとの御尋ねは、御心なきやうにこそ候へ。ツレ謡「それ大方春の花、木々の盛は多けれども、花の中にも始めなれば、梅花を花の兄ともいへり。シテ詞「其上梅の名所々々、國々所は多けれども、六義の始のそへ歌にも、難波の梅こそ詠まれたれ。ツレ謡「御代も開けし榮花といひ、シテ詞「あまねき花の嘉例と云ひ、シテ、ツレ謡「ともかくにも津の國の、こや都路の難波津に、名を得て咲くやこの花を、名木かとの御尋ねは、事新しき御説かな。ワキ詞「實にく、難波の梅の事、名木やらんと尋ねしは、愚なりける問事かな。然れば歌にも難波津に、咲くやこの花冬ごもり、今は春べと咲くやこの、花の春冬かけてよめる、謡歌の心は何如なるぞ。シテ詞「それこそ帝をそへ歌の、心詞は顯はれたれ。難波の御子は皇子ながら、未だ位に即き給はねば、冬咲く梅の花の如し。ワキ謡「御即位ありて難波の君の、位に備はり給ひし時は、シテ詞「今

難波の御子仁徳天皇

こそ時の花の如く、ワキ謡「天下の春を知ろしめせば、シテ謡「今は春べと咲くやこの、ワキ謡「花の盛は大鷓鴣の、シテ謡「帝を花にそへ歌の、ワキ謡「風も治まり、シテ謡「立つ波も、上歌地謡「難波津に、咲くやこの花冬ごもり、咲くやこの花冬ごもり、今は春べに匂ひ来て、吹けども梅の風、枝を鳴らさぬ御代とかや、實にや津の國の、なにはの事に至るまで、豊かなる世の例こそ、實に道廣き治めなれ。實に道廣き治めなれ。クリ地謡「抑、難波津の歌は帝の御はじめ、又淺香山の詞は、采女の土器とりく、なり。シテ、サシ謡「昔唐國の堯舜の御代にも越えつべし。地謡「萬機の政おだやかにして、慈悲の波四海に普く、治めざるに平なり。シテ謡「君君たれば臣も亦、地謡「水よく船を浮むとかや。クセ「高き屋に、登りて見れば煙立つ、民の竈は賑ひにけりと、歡慮にかけまくも、かたじけなくぞ聞えける。然れば此君の、代々にためしを引く事も、實に有難き詔、國々に普く、三年の御調ゆるされし、其年月も極まれば、濱の眞砂の数積りて、雪は豊年の御調物、ゆるす故にや中々、いやましに運ぶ御寶の、千秋萬歳の、千箱の玉を奉る。

難波津の歌は云云古今集序に言へり  
淺香山の詞「淺香山かげさへみゆる山の井の淺き心を我思はなくに」  
水よく船を浮む一荀子に「君者舟也庶人者水也水則載舟水則覆舟矣」  
高き屋に一此歌新古今集に仁徳

の御製として出  
然れば普き御心  
の此のわたり  
古今集序により  
て文句を續く

シテ謡「然れば普き御心の、地謡「いつくしみ深うして、八洲の外まで波もなく、廣き御惠、筑波山の蔭よりも、茂き御蔭は大君の、國なれば土も木も、榮え榮うる津の國の、難波の梅の名にしおふ、匂ひも四方に普く、一花ひらくれば天下皆、春なれや萬代の、なほ安全ぞめでたき。

鶯囀一變の名

ロンギ地謡「實に萬代の春の花、實に萬代の春の花、榮え久しき難波津の、昔語ぞ面白き。シテ謡「實に名にし負ふ難波津に、鳥の一聲をりしもに、鳴く鶯の春の曲、春鶯囀を奏せん。地謡「不思議や御身誰なれば、かく心ある花の曲、舞樂を奏し給ふべき。ツレ謡「我は知らずや此梅の、春年々の花の精、地謡「今一人の老人は、シテ謡「今ぞ顯はす難波津に、地謡「咲くやこの花と詠じつと、位をすとも申せし、百濟國の王仁なれや、今もこの花に戯れ、百囀の聲立て、春の鶯の舞の曲、夜もすがら慰め申すべしや。下臥して待ち給へ。花の下ふしに待ち給へ。(中入)  
ワキ三人上歌謡「見て暮す、花の下臥更くる夜の、花の下臥更くる夜の、月影ともに靜なる、

いひし卯月本  
いつしとあり

木花開耶姬一太  
山祇神の御女

梅が枝に云々  
下句「鳴けども  
未だ雪はふりつ  
く古今集の歌

諫鼓云々江相  
公詩「刑鞭浦朽  
蟹空去、諫鼓若  
深鳥不驚

けしきに染て音樂の、花に聞ゆる不思議さよ。花に聞ゆる不思議さよ。

後シテ謡「誰かいひし、春の色は、東より來るといへども、南枝花初めて開く。こよは所も西の海に、向ふ難波の春の夜の、月雪もすむ浦の波、よるの舞樂は面白や。夢ばし覺し給ふなよ。ツレ天女謡「是は難波の浦に年を経て、開くる代々の惠を受くる、木花開耶姬の神靈なり。シテ謡「我は又百濟國より此國に渡り、君をあがめ國を守る。王仁と云つし相人なり。地謡「むかし仁徳の御宇には、御代の鏡の影をうつし、シテ謡「治まる御代の榮花をなししも、地謡「この花の匂ひ、シテ謡「又は開くる言の葉の緑、地謡「難波の事か法ならぬ、遊び戯れいろくの舞樂面白や。(天女舞)ツレ天女謡「梅が枝に來居る鶯春かけて、シテ謡「鳴けども雪は、古き鼓の苔むして、打ち鳴らす、打ち鳴らす人もなければ君が代に、地謡「懸けし鼓も、シテ謡「時守の眠り、地謡「覺むるは難波の、シテ謡「鐘も響き、地謡「浦は潮の、シテ謡「波の聲々、地謡「入江の松風、シテ謡「村蘆の葉音、地謡「いづれを聞くも悦びの、諫鼓若むし、難波の鳥も、驚かぬ御代なり。有難や。(神舞)

秋風樂、萬歲樂、  
青海波、採桑老、  
拔頭、皆樂の名

ロンギ地謡、あらおもしろの音楽や、時の調子にかたどりて、春鶯囀の樂をば、シテ謠、春風と諸共に、花を散らしてどうと打つ。地謡、秋風樂は如何にや。シテ謠、秋の風もろ共に、波を響かしどうと打つ。地謡、萬歲樂は、シテ謠、よろづ打つ。地謡、青海波とは青海の、シテ謠、波立打つは採桑老。地謡、拔頭の曲は、シテ謠、かへり打つ。地謡、入日を招きかへす手に、入日を招きかへす手に、今の太鼓は波なれば、よりては打ち返りては打ち、此音楽に引かれつゝ、聖人御代に又出で、天下を守り治むる、天下を守り治むる、萬歲樂ぞめでたき。

兼平

梗 今井四郎兼平は木曾義仲の郎黨なり。武勇最も人に勝る。諸方の合戦に高名せずと云ふ事無し。壽永三年正月粟津の合戦に主君義仲討たれ、兼平亦殉ふ。事は平家物語にあり。この軍物語を材料としたるは本曲なり。初に舟人を出して湖上の景勝を語らしめ、後兼平の亡靈を出して、修羅の物語をなさしむ。(二番目)

シテ 兼平(前は舟人) ワキ 僧

ワキ次第 始めて旅を信濃路や、始めて旅を信濃路や、木曾の行方を尋ねん。詞是は木曾の山家より出でたる僧にて候。さても木曾殿は、江州粟津原にて果て給ひたる由承り及び候程に、彼の御跡を弔ひ申さばやと思ひ、唯今粟津原へと急ぎ候。行道謠、信濃路や、木曾の棧名にしおふ、木曾の棧名にしおふ、其跡とふや道のべの、草の蔭野の假枕、夜を重ねつゝ日を添へて、行けば程なく近江路や、矢橋の浦に著きにけり。矢橋の浦に著

山田一近江

如渡得船一法華  
經藥王品の文句

きにけり。  
 シテ一聲謡世の業の、憂きを身に積む柴舟や、焚かぬ前よりこがるらん。ワキ詞なうく其  
 船に便船申さうなう。シテ詞是は山田矢橋の渡舟にてもなし。御覽候へ柴積みたる舟にて  
 候程に、便船は叶ひ候まじ。ワキ詞此方も柴舟と見申して候へども、折節渡りに舟もなし、  
 出家の事にて候へば別の御利益に、謡舟を渡してたび給へ。シテ謡實にもく、出家の御身  
 なれば、詞餘の人にはかはり給ふべし。實に御經にも如渡得船、ワキ謡船待ち得たる旅  
 行の暮、シテ謡かよるをりにも近江の海の、シテ、ワキ謡「矢橋をわたる船ならば、それは  
 旅人の渡舟なり。上歌地謡是は又浮世を渡る柴舟の、浮世を渡る柴舟の、ほされぬ袖も水  
 剛棹の、見馴れぬ人なれど、法の人にてましますば、船をばいかで惜むべき。とくく  
 の召され候へ。とくく召され候へ。  
 ワキ詞「如何に船頭殿に申すべき事の候。見え渡りたる浦山は皆名所にてぞ候らん。御教  
 へ候へ。シテ詞「さん候皆名所にて候。御尋ね候へ、教へ申し候べし。ワキ詞まづ向ひに

山王二十一社一  
日吉神社は廿一  
社あり八王子は  
その一なり  
一佛乗の嶺一比  
叡山のこと大成  
佛得脱を專要と  
するより一佛乘  
といふ  
鷲の御山一天空  
鷲驚山  
我が立つ袖一傳  
教大師の歌に  
「阿耨多羅三藐  
三菩提の佛たち  
我立袖に冥加あ  
ちせ給へ」

遮那一 大日如來  
戒定惠一 戒律禪  
定智惠

當つて大山のを見て候は比叡山候ふか。シテ詞「さん候あれこそ比叡山にて候へ。麓に山  
 王二十一社、茂りたる峯は八王子、戸津坂本の人家まで残りなく見えて候。ワキ詞さて  
 あの比叡山は、王城より良に當つて候よなう。シテ詞中々の事それ我山は、王城の鬼  
 門を守り、惡魔を拂ふのみならず謡一佛乗の嶺と申すは、傳へ聞く鷲の御山を象れり、  
 又天台山と號するは、震旦の四明の洞をうつせり。詞傳教大師桓武天皇と御心を一つに  
 して、延暦年中の御草創、我が立つ袖と詠じ給ひし、謡根本中堂の山上まで、残りなく  
 見えて候。ワキ詞「さてく大宮の御在所波止土濃とやらんも、あの坂本の内にて候か。  
 シテ詞「さん候麓に當つて、少し木深き蔭のを見て候こそ、大宮の御在所波止土濃にて御  
 入り候へ。ワキ詞「有難や一切衆生悉有佛性如來と聞く時は、我等が身までも頼もしくこ  
 そ候へ。シテ詞「仰せの如く佛衆生通ずる身なれば、御僧も我も隔てはあらじ。謡一佛乗の、  
 ワキ謡「峰には遮那の梢を竝べ、シテ詞「麓に止觀の海を湛へ、ワキ謡「又戒定惠の三學を見せ、  
 シテ謡「三塔と名づけ、ワキ謡人は又、地謡「一念三千の機を現して、三千人の衆徒を置き、

三塔—東塔西塔  
横川  
七社—廿一社中  
の社

圓融えんじゆうの法のりも曇くもりなき、月つきの横川よかはも見えたりや。さて又ふも麓もとはさよ波なみや、志賀しが辛崎からさきの一つ松いちづまつ、  
 七社しちやの神輿しんよの、御幸みゆきの梢こぎすなるべし。さよ波なみの水馴みなれ棹ざう、こがれ行く程ほどに、遠とほかりし向むかひの  
 浦波うらなみの、粟津あはづの森もりは近ちかくなりて、跡あとは遠とほきさよ波なみの、昔むかしながらの山櫻やまざくらは青葉あをばにて、面影おもかげ  
 も夏山なつやまの、うつり行くや青海あそらみの、柴舟しばぶねのしばくも、暇いとまぞ惜をしきさよ波なみの、寄よせよく磯いそ  
 際ぎはの、粟津あはづに早はやく著つきにけり。粟津あはづに早はやく著つきにけり。(中入)  
 ワキ上歌謡つゆ露つゆを片敷かたしく草筵くさひら。露つゆを片敷かたしく草筵くさひら。日も暮くれ夜よにもなりしかば、粟津あはづの原はらのあ  
 はれ世よの、なきかけいざや弔さびらはん。なきかけいざや弔さびらはん。  
 後あとシテ一聲謡いっせいぎう「白刃骨はくじんほねを碎くだく苦くるみ、眼がん睛せいを破やぶり、紅波こうは楯たてを流ながす。粧よそほひ、胡籥こやくに殘花ざんくわを亂みだす。雲くも  
 水みづの、粟津原あはづのはらの朝風あさかぜに、地謡ぢぎう「関せきつくり添そふ聲こゑ々に、シテ謡ぎう「修羅しゆらの巷ちまたは騒さわがしや。  
 ワキ謡ふしぎ「不思議ふしぎやな粟津原あはづのはらの草枕くさまくらに、甲冑かちうを帶たいし見え給たまふは、如何いかなる人ひとにてましますぞ。  
 シテ謡おろか「愚おろかと尋たづね給たまふものかな。御身おんみ是いままで來きり給たまふも、我わがなき跡あとをとはん爲ための、御志おんこころざし  
 にてましますさずや。兼平かねひら是いままでまゐりたり。ワキ謡いま「今井四郎兼平いまのしいらかねひらは、今いまは此世このよに亡なき人ひと

御法の舟—佛カ  
にて悟を得しむ  
ることを譬ふ

なり。さては夢ゆめにて有あるやらん。シテ謡いや今いま見る夢ゆめのみか、現うつにも早水はやみ馴棹なれざうの、舟ふねに  
 て見みみえし物語ものがたり、早はやくも忘わすれたまへりや。ワキ謡そもや舟ふねにて見みみえしとは、矢橋やはせの浦うらの  
 渡守わたしもりの、シテ謡そのふなびこ「其舟人そのふなびここそ兼平かねひらが、現うつに見みみえし姿すがたなれ。ワキ謡さればこそ始はじめより、様やうある  
 人ひとと見えつるが、さては昨日きのふの舟人ふなびこは、シテ謡ふなびこ「舟人ふなびこにもあらず、ワキ謡ぎよふ「漁夫ぎよふにも、シテ謡あ  
 らぬ、上歌地謡ものふ「武士ぶしの、矢橋やはせの浦うらの渡守わたしもり、矢橋やはせの浦うらの渡守わたしもりと、見えしは我われぞかし。同おなじく  
 は此舟このふねを、御法みのりの舟ふねに引ひきかへて、我われを又また彼岸かのきしに、渡わたしてたばせ給たまへや  
 クリ地謡け「實じつにや有ある爲ため生死しやうじの巷ちまた、來きたつて去さる事こと早はやし、老少らうせうもつて前後ぜんご不同ふどう、夢幻むげん泡影はうやういづれ  
 ならん。シテ謡た「唯ただ是これ槿花きんくわ一日いちにちの榮えい、地謡きまは「弓馬きうばの家いへに澄すむ月つきの、僅わずかに残のこる兵つはものの、七騎しちき  
 となりて木會殿きそごは、此近江路あふみちに下くだり給たまふ。シテ謡かねひらせ「兼平かねひら瀬田せだより參まゐりあひて、地謡また「又また三百餘さんひやくよ  
 騎きになりぬ。シテ謡そののちが「其後合戦そののちがせんたひ度々たびたびにて、又また主從二騎しうじうきに討うちなさる。地謡いま「今いまは力ちからなし、あ  
 の松原まつはらに落おち行いきて、御腹おんはら召めされ候こうへと、兼平かねひら勸すすめ申まをせば、心細こころほそくも主從二騎しうじうき、粟津あはづの  
 松原まつはらさして落おち給たまふ。クセ兼平かねひら申まをすやう、後うしろより御敵おんかたき、大勢おほせにて追おつかけたり、防矢仕ふせぎやつかまつ

御腹召され一切  
腹のこと

吳織―あやしと  
いふ爲めの序  
吳：喜れ あや  
し：舞：怪し

らんとて、駒の手綱を返せば、木曾殿御説ありけるは、多くの敵を遁れしも、汝一所に  
ならばやの、所存ありつゝ故ぞとて、同く返し給へば、兼平又申すやう、こは口惜き御  
説かな、さすがに木曾殿の、人手にかより給はん事、末代の御恥辱、唯御自害有るべし  
今井もやがて参らんと、兼平に諫められ、又引つ返し落ち給ふ。さて其後に木曾殿は、  
心細くも只一騎、粟津原のあなたなる、松原さして落ち給ふ。シテ謡頃ころは正月の末つ方、  
地謡「春のきながらさえかへり、比叡の山風の、雲行く空も吳織、あやしや通路の、すゑ  
白雪の薄氷、深田に馬をかけ落し、引けども上らず、打てども行かぬ望月の、駒の頭も  
見えばこそ、こは何とならん身の果、せん方もなくあきれはて、此まよ自害せばやとて、  
刀に手を掛け給ひしが、さるにても兼平が、行方如何にと遠方の、跡を見かへり給へば、  
シテ謡「何處より来りけん、地謡「今ぞ命は槻弓の、矢一つ来つて、内兜うちかぶとにからりと射る。  
痛手にてましますば、たまりもあへず馬上より、遠近の土となる、處はこよぞ我よりも、  
主君の御跡を、まづ弔ひてたび給へ。 ロンギ實しんぎじつにいたはしき物語り、兼平の御最期は何

つなぬかれ―貫  
かれの意

とかならせ給ひける。シテ謡兼平はかくぞとも、知らで戦ふ其隙にも、御最期の御供を、  
心にかくるばかりなり。地謡さて其後に思はずも、敵の方に聲立てて、シテ謡木曾殿討た  
れ給ひぬと、地謡呼ばはる聲を聞きしより、シテ謡今は何をか期すべきと、地謡思ひ定め  
て兼平は、シテ謡是ぞ最期の廣言と、地謡登踏あぶらんばり、シテ謡大音上げ、木曾殿の御内に  
今井四郎、地謡兼平と名乗りかけて、大勢に割つて入れば、もとより一騎當千の、秘術  
を現し大勢を、粟津の汀に追つつめて、磯打つ波のまくり切り、蜘蛛手十文字に、撃ち  
破り驅け通つて、其後自害の手本よとて、太刀を銜はへつゝ、逆さまに落ちて、つなぬ  
かれ失せにけり。兼平が最期の仕儀、目を驚かす有様なり。目を驚かす有様なり、



千手

梗 三位中将重衡、一の谷にて捕はれ、鎌倉に下り、狩野介宗茂に預けらる。頼朝千手の前といふ女をして接伴せしむ。この事亦平家物語に基く。(鬘物)

シテ千手 ツレ重衡  
ワキ 宗茂

相國―太政大臣 清盛をさす  
手越―駿河  
ワキ詞「これは鎌倉殿の御内に、狩野介宗茂にて候。さても相國の御子重衡卿は、此度一谷の合戦に生捕られ給ひ候を、某預り申して候。朝敵の御事とは申しながら、頼朝いたはしく思し召され、よく勞はり申せとの御事にて、昨日も千手の前を遣はされて候。かの千手の前と申すは、手越の長が娘にて候が、優にやさしく候とて、御身ちかく召し使はれ候を遣され候ふ事、まことに有難き御志にて御座候。今日はまた雨中御つれづれ、酒を勧め申さばやと存じ候。

蘇武―漢の臣匈奴に使して囚はれ具に辛酸を嘗め後歸り來るやうり―廣利の訛ならん

シテ謡「琴の音そへて音づると、琴の音そへて音づると、これや東屋なるらん。ヤンそれ春の花の樹頭に榮え、秋の月の水底に沈むも、世のはかなさの有様を、見てもあはれや重衡の、その古は雲の上、かけても知らぬ身のゆくへ、波に漂ひ舟に浮き、さらばよるべのよそならで、有りしにかへる有様かな。下歌 都にだにも留めぬ、御涙なるを痛はしや。上歌 陸奥の、しのぶに堪へぬ雨の音、しのぶに堪へぬ雨の音、降りすさみたる折しもは、思ひの露もちりぐくに、心の花もしをくと、しをると袖の色までも、今日の夕のたぐひかな。今日の夕のたぐひかな。

シテ詞「いかに案内申し候はん。ワキ詞「誰にて渡り候ぞ。シテ詞「千手の前が参りたる由、それそれ御申し候へ。ワキ詞「暫く御待ち候へ。御機嫌を以て申さうするにて候。ツレ、サシ謡「身はこれ槿花一日の榮、命は蜉蝣のさだめなきに似たり。心は蘇武が胡國に囚はれ、岩窟の内に籠められて、君邊を忘れぬ志、それはやうりが謀にて、敵を亡ほし舊里に歸る。我はいつとなく敵陣に籠められて、縲紲の責を受くる、知らず今日もや限

ならん。あら定めなや候。

ワキ詞「いかに申し上げ候。千手の御参りにて候。ツレ詞「唯今は何のためにて候ぞ、よし何事にてもあれ。今日の對面は叶ふまじきと申し候へ。ワキ詞「畏つて候。いかに申し候。御参りの由申して候へば、何と思し召し候やらん。今日の御對面は叶ふまじき由仰せ出だされて候。シテ詞「これも私にあらす、頼朝よりの御説にて、琵琶琴持たせて参りたり、此由かさねて御申し候へ。ワキ詞「御説の趣申して候へば、これも私にあらす、頼朝よりの御説にて、琵琶琴持たせて参りたり、よし御憚はさる事なれども、謠ただこなたへと請すれば、シテ謠「その時千手立ちよりて、上歌地謠「妻戸をきりと押し開く、御簾の追風にほひ来る、花の都人に、恥ながら見みえん。けにや東の果しまで、人の心の奥深き、その情こそ都なれ。花の春紅葉の秋、たが思出となりぬらん。ツレ詞「いかに千手の前、昨日あからさまに申しつる、出家の御暇の事聞かまほしうこそ候へ。シテ詞「さん候其由申して候へば、朝敵の御事なるを、私として出家を許し申さ

佛像を亡ぼし云  
三重衛南都を  
攻め東大寺等を  
焼きしをいふ  
現當一現在當  
來、この世後の  
世

唐衣一きつくな  
れにしつましあ  
れば遙々きぬる  
旅をしぞ思ふ  
在原業平の歌  
八橋一三河國杜  
若の名所、伊勢  
物語に見ゆ

ん事、思も寄らずとこそ候ひつれ。謠わらはも御心の内おしはかり参らせて、いかほど細々と申して候へども、かひなき出家の御望み、痛はしうこそ候へ。ツレ詞「くちをしや我一谷にて如何にもなるべき身の生捕られ、今は東のはてまでも、かやうに面をさらす事、前世の報と云ひながら、謠又思はずも父命により、佛像を亡ぼし人壽を絶ちし、現當の罪を果すこと、前業よりなほ恥うこそ候へ。シテ謠「けにく、是は御理さりながら、かかる例は古今に、多き習ひと聞くものを、獨とな歎き給ひそとよ。ツレ謠「けによく慰めたまへども、たぐひはあらじ憂き身のはて、シテ謠「昨日は都の花と榮え、ツレ謠「今日は東の春に来て、シテ謠「移り變れる、ツレ謠「身の程を、上歌地謠「思へたど、世は空蟬の唐衣、世は空蟬の唐衣、きつよなれにしつましある、都の雲居を立ち離れ、はるく來ぬる旅をしぞ思ふ衰への、憂き身の果ぞ悲しき、水ゆく川の八橋や、蜘蛛手に物を思へとは、かけぬ情の中々に、馴るよや恨なるらん。馴るよや恨なるらん。ワキ謠「今日の雨中の夕の空、御つれぐを慰めんと、樽を抱きて参りつよ、既に酒宴を始

北野一管家

めんとす。シテ謡「千手も此よし見るよりも、御酌に立ちて重衡の、御前にこそ参りけれ。ツレ謡「今はいつしか憚の、心ならずには思はずも、手まつ遮る盃の、心一つに思ふ思ひ。ワキ謡「それくいか何にても、おん肴にと勸むれば、シテ謡「その時千手とりあへず、羅綺の重衣たる、情なき事を機婦に妬む、ワキ三人謡「唯今詠じたまふ朗詠は、忝なくも北野の御作、此詩を詠せば聞く人までも、守るべしとの御誓なり。ツレ謡「さりながら重衡は、今生の望なし。三人謡「たゞ來世の便こそ、聞かまほしけれと宣へば、シテ謡「わらは仰せを承り、十悪といふとも引攝すと、地謡「朗詠してぞ奏でける。

牡鹿の一角の縁により津の國の序とす

シテ謡「さてもかの重衡は、相國のするの御子とは申せども、地謡「兄弟にも勝れ一門にも越えて、父母の寵愛かぎりなし。シテサシ謡「されども時うつり、平家の運命ことごとく、月の夜すがら聲たてよ、なくや牡鹿の津の國の、生田の河に身を捨てよ、防ぎ戦ふと申せども、シテ謡「森の下風木の葉の露、地謡「落されけるこそあはれなれ。クセ「いまは梓弓、よし力なし重衡も、引かんとするにいつかたも、網を置きたる如くにて、遁れかねたる淀鯉

燈暗うして云々  
朗詠集の詩句  
項羽の故事

緒合一合奏の意

の、生捕られつゝありて憂き、身をうろくづの其儘に、沈みは果てずして、名をこそ流せ川越の、重房が手に渡り、心の外の都入。シテ謡「けにや世の中は、地謡「定めなきかな神無月、時雨降りおく奈良坂や、衆徒の手に渡りなば、とにもかくにも果てはせで、又鎌倉に渡さるよ。こよは何處ぞ八橋の、雲居の都いつか又、三河國や遠江、足柄箱根うち過ぎて、明けもやすらん星月夜、鎌倉山に入りしかば、憂き限ぞと思ひしに、馴るればこよも忍音に、あはれ昔を思妻の、燈暗うしては、數行虞氏が涙の、雨さへ頻る夜の空。シテ謡「四面に楚歌の聲の内、地謡「何とか返す舞の袖、思ひの色にや出でぬらん、涙を添へて廻らすも、雪の古枝の枯れてだに、花さく千手の袖ならば、重ねていざや返さん忘れめや、(序ノ舞)シテ謡「一樹の陰や一河の水、地謡「皆これ他生の縁といふ、白拍子をぞ詠ひける。ツレ謡「其時重衡興に乗じ、地謡「其時重衡興に乗じ、琵琶を引きよせ弾じ給へば、又玉琴の緒合に、シテ謡「合せて聞けば、地謡「峰の松風かよひ來にけり。琴を枕の短夜のうたとね、夢も程なく東雲もほのぐくと、明けわたる空の、シテ謡「あさまにやなりぬべき。

地謡「あさまにやなりなんと、酒宴を止め給ふ、おん心の内ぞいたはしき。  
 地謡「かくて重衡勅により、かくて重衡勅により、また都にとありしかば、武士守護し出  
 で給へば、シテ謠「千手も泣くく立ち出で、地謡「なに中々の憂き契、はやきぬぐに引き  
 離るよ、袖と袖との露涙、紗に重衡の有様、目もあてられぬ氣色かな、目もあてられぬ  
 氣色かな。」

### 卒都婆小町

梗

概

弘法大師の作とも傳へらるゝ玉造小町壯衰書といふ書に、  
 小町といふ美女の老衰の状を記したるに據り、小野小町と  
 深草少將との傳説を加味して作れり。初め小町が卒都婆  
 に腰打掛けたるより、僧と問答することあり、後少將の靈の  
 つきそひて戀物語をなす。かくて佛果を得る趣を示す。  
 老女物とて重き曲柄なり。

シテ 小野小町  
 ツレ 僧  
 ワキ 僧

ワキ二人 謠「山は浅きに隠れがの、山は浅きに隠れがの、深きや心なるらん。ワキ詞「これは  
 高野山より出でたる僧にて候。我このたび都にのほらばやと思ひ候。ヤシ謠それ前佛は既  
 に去り、後佛はいまだ世に出でず、ワキ二人 謠「夢の中間に生れ来て、何を現と思ふべき。たま  
 たま受け難き人身を受け、逢ひ難き如來の佛教に逢ひ奉る事、これぞ悟の種なると、思

高野山より出で  
 たる僧一弘法大  
 師と見るべし  
 前佛一釋迦  
 佛後一彌勒  
 中間一今生

ふ心もひとへなる、墨の衣に身をなして、上歌うまれぬさきの身を知れば、うまれぬさきの  
身を知れば、憐むべき親もなし。親のなければ我ために、心を留むる子もなし。千里を  
行くも遠からず、野に臥し山に泊る身の、これぞ誠のすみかなる。これぞ誠のすみかな  
る。

身は浮草を―  
「わびぬれば身  
を評のねをたえ  
て誘ふ水あらば  
いなん」とぞ思  
ふ―  
驕慢云々―玉造  
小町壯衰書の文  
句による

シテ次第謡「身は浮草をさそふ水、身は浮草をさそふ水、なきこそかなしかりけれ。サシあは  
れやけにいにしへは、驕慢もつとも甚しう、翡翠の簪は婀娜とたをやかにして、楊柳  
の春の風になびくが如し。また鶯舌の囀は、露を含める糸萩の、かごとばかりに散り  
そむる、花よりもなほめづらしや。今は民間賤の女にさへ穢なまれ、諸人に恥をさらし、  
嬉からぬ月日身につもつて、百年の姥となりて候。下歌都は人目つよまじや、もしもそれ  
とか夕まぐれ、上歌月もろともに出でて行く、月もろともに出でて行く、雲居百敷や、大  
内山の山守も、かよる憂き身はよも咎めじ、木がくれてよしなや。鳥羽の戀塚秋の山月  
の桂の川瀬舟、漕ぎゆく人は誰やらん。漕ぎゆく人は誰やらん。詞あまりに苦しう候程

佛體色性―佛體  
にひとしき意

金剛薩埵―金剛  
部諸尊の通號  
三摩耶形―四種  
曼荼羅の一  
地水火風空―五  
大といふ即ち人  
體の原質なりと  
いふ  
五體五輪―二肘  
二膝頭項

に、これなる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候。ワキ詞「なうはや日の暮れて候。道を急  
がうするにて候。や、これなる乞食の腰かけたたるは、正しく卒都婆にて候。教化して除  
うするにて候。いかにこれなる乞巧人、お事の腰かけたたるは、かたじけなくも佛體色性  
の卒都婆にては無きか。そこ立ち退きて餘の所に息み候へ。シテ詞「佛體色性のかたじけ  
なきとは宣へども、是ほどに文字も見えず、刻める像もなし、たど朽木とこそ見えたれ。  
ワキ謡「たとひ深山の朽木なりとも、花咲きし木はかくれもなし。詞いはんや佛體に刻める  
木、などかしるしのなかるべき。シテ謡「我も賤しき埋木なれども、心の花の未有れば、手  
向になどかならざらん。詞さて佛體たるべき謂は如何に。ワキ謡「それ卒都婆は金剛薩  
埵、假に出化して三摩耶形を行ひ給ふ。シテ詞「行ひなせる形は如何に。ワキ謡「地水火風空、  
シテ謡「五體五輪は人の體、何しに隔あるべきぞ。ワキ謡「形はそれに違はずとも、心功德は  
變るべし。シテ詞「さて卒都婆の功德は如何に。ワキ謡「一見卒都婆永離三惡道。シテ謡「一念發起  
菩提心、それも如何でか劣るべき。ワキ謡「菩提心あらばなど浮世をば厭はぬぞ。シテ謡「姿

菩提もと云々  
傳燈錄「菩提本  
非樹心鏡亦非  
臺本來無一物  
何假拂塵埃」  
の文に上る

が世をも厭はばこそ、心こそ厭へ。ワヤ謠「心なき身なればこそ、佛體をば知らざるらめ。  
シテ詞「佛體と知ればこそ卒都婆には近づきたれ。ワヤツレ謠「さらばなど禮をばなさで敷きた  
るぞ。シテ謠「とても臥したる此卒都婆、我も息むは苦いか。ワヤ謠「それは順縁にはづれた  
り。シテ詞「逆縁なりと浮むべし。ワヤツレ謠「提婆が悪も、シテ詞「觀音の慈悲、ワヤ謠「槃特が愚癡  
も、シテ詞「文殊の智慧。ワヤツレ謠「惡と云ふも、シテ謠「善なり。ワヤ謠「煩惱といふも、シテ謠「菩提  
なり。ワヤツレ謠「菩提もと、シテ謠「植木にあらず。ワヤ謠「明鏡また、シテ謠「臺に無し。上歌地謠「け  
に本來一物なき時は、佛も衆生も隔なし。もとより愚癡の凡夫を、救はん爲の方便の、深  
き誓ひの願なれば、逆縁なりと浮むべしと、ねんごろに申せば、眞に悟れる非人なりと  
て、僧は頭を地につけて、三度禮し給へば、シテ謠「我は此時力を得、なほ戯れの歌を詠  
む。極樂の内ならばこそ悪しからめ、そとは何かは苦しかるべき。地謠「むつかしの僧の  
教化や。むつかしの僧の教化や。  
ワヤ詞「さて御事は如何なる人ぞ名を御名のり候へ。シテ詞「恥しながら名を名のり候べし。

浦はしやな小町  
は云々以下又  
玉造小町壯衰書  
の文句に據る

艶々宛轉か  
百年に一年足ら  
ぬ云々伊勢物  
語の歌

これは出羽の郡司小野の良實が娘、小野の小町がなれる果にてさむらふなり。ワヤ二人謠「痛  
はしやな小町は、さもいにしへは優女にて、花の貌輝き、桂の黛青うして、白粉を絶  
さず、羅綾の衣多うして、桂殿の間に餘りしぞかし。シテ謠「歌を詠み詩を作り、地謠「醉を  
すよむる盃は、閑月袖に静なり。まこと優なる有様の、いつ其程に引きかへて、上歌「頭に  
は霜蓬をいたどき、嬋妍たりし兩鬢も、肌に悴けて墨亂れ、艶々たりし雙蛾も、遠山の色を  
失ふ。百年に一年足らぬつくも髪、斯かる思ひは有明の、影はづかしき我身かな。  
ロンギ地謠「頸に懸けたる袋には、如何なる物を入れたるぞ。シテ謠「今日も命は知らねども、  
明日の飢を助けんと、粟豆の餉を袋に入れて持ちたるよ。地謠「後に負へる袋には、  
シテ謠「垢膩の垢づける衣あり。地謠「臂にかけたる簀には、シテ謠「白黒の田烏子あり。地謠「破  
れ簀、シテ謠「破笠、地謠「面ばかりも隠さねば、シテ謠「まして霜雪雨露、地謠「涙をだにも抑  
ふべき、袂も袖もあらばこそ。今は路頭にさそらひ、往き來の人に物を乞ふ。乞ひ得ぬ  
時は悪心、また狂亂の心つきて、聲かはりけしからず。

深草の四位の少將一本居内達の  
小町考に良岑宗貞即ち僧正遍昭の事なると云へり  
曉の云々一曉の  
曉の羽がきもく  
はがきの歌句を  
言ひかふ

シテ謡「なう物給べなう御僧なう。ワヤ詞何事ぞ。シテ詞小町がもとへ通はうよなう。ワヤ詞おことこそ小町よ、何とて現なき事をば申すぞ。シテ詞「いや小町といふ人は、あまりに色が深うて、あなたの玉章こなたの文、謡かきくれて降る五月雨の、詞空言なりとも一度の返事もなうて、謡いま百年になるが報うて、あら人戀しや。あら人こひしや。ワヤ詞人こひしいとは、さてお事には如何なる者のつきそひてあるぞ。シテ詞小町に心を懸けし人は多き中にも、殊に思ひ深草の四位の少將の、地謡「恨みの数のめぐり来て、車の榻に通はん。日は何時ぞ夕暮、月こそ友よ通路の、關守はありとも留まるまじや、出で立たん。シテ謡「淨衣の袴かいとつて、地謡「淨衣の袴かいとつて、立烏帽子を風折り、狩衣の袖をうちかついで、人目忍ぶの通路の、月にも行く暗にも行く、雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪深し。シテ謡「軒の玉水とくくと、地謡「行きてはかへり、かへりては行き、一夜二夜三夜四夜、七夜八夜九夜、豊の明の節會にも、逢はでぞ通ふ庭鳥の時をもちかへず、曉の、榻のはしがき、百夜までと通ひて、九十九夜になりたり。シテ謡「あら苦し目まひや、

地謡「胸くるしやと悲しみて、一夜を待たで死したりし、深草の少將の、その怨念が附き添ひて、かやうに物には狂はするぞや。これにつけても後の世を、願ふぞ眞なりける。沙を塔と重ねて、黄金の膚こまやかに、花を佛に手向けつゝ悟の道に入らうよ。悟の道に入らうよ。

# 紅葉狩

梗

平維茂は鎮守府將軍にして、一條天皇の御宇の人なり。曾て信州戸隠山にて鬼女を退治したりとの口碑によりて、此の曲成る。紅葉の景趣を以て文飾し、末段凄にして壯なり。(五番目)

シテ 鬼女前は女 ツレ 女四人又は三人

ワキ 平維茂 トモ 従者(列卒大勢)

次第ッレ四人謡「時雨を急ぐ紅葉狩、時雨を急ぐ紅葉狩、ふかき山路を尋ねん。ツレ、サン謡」是はこのあたりに住む女にて候。けにやながらへて浮世に住むとも今ははや、たれ白雲の八重葎、茂れる宿の淋しきに、人こそ見えね秋の來て、庭の白菊移ふ色も、うき身のたくひと哀なり。シテ謡「あまり淋しき夕まぐれ、しぐるよ空をながめつよ、四方の梢もなつかしさに、ツレ下歌謡」伴ひ出づる道のべの、草葉の色も日に添ひて、上歌下紅葉、夜の間の

八重葎云々一拾遺集の歌末句秋は來にけり

谷河に云々一古今集の歌下句流れもあへぬ紅葉なりけり  
渡らば錦一同集の歌「立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中やたえなん」  
ぬれてや鹿の云云一新古今集の歌「下紅葉かつ散る山の夕時雨ぬれてや獨鹿のなくらん」

露や染めつらん、夜の間の露や染めつらん、朝の原は昨日より、色深き紅を、分け行く方の山深み、けにや谷河に、風のかけたる柵は、流れもやらぬもみぢ葉を、渡らば錦中絶えんと、まづ木の本に立ち寄りて、四方の梢を眺めて、暫く休み給へや。  
ワキ謡「面白や頃は長月廿日あまり、四方の梢もいろくに、錦を色どる夕時雨、ぬれてや鹿のひとり鳴く、聲をしるべの狩場のする、けに面白き景色かな。大勢謡「明けぬとて、野邊より山に入る鹿の、跡吹き送る風の音に、駒の足竝勇むなり。上歌大丈夫が、彌猛心の梓弓、彌猛心の梓弓、いる野の薄露分けて、行くへも遠き山陰の、鹿垣の道のさかしきに、落ちくる鹿の聲すなり。風のゆくへも心せよ。風のゆくへも心せよ。ワキ謡「如何に誰かある。トモ謡「御前に候。ワキ謡「あの山陰にあたつて人影の見え候は、如何なる者ぞ名を尋ねて來り候へ。トモ謡「畏つて候。名を尋ねて候へば、やごとなき上臈の、幕うちまはし屏風を立て、酒宴半と見えて候程に、懇にたづねて候へば、名をば申さず、只さる御方とばかり申し候。ワキ謡「あら不思議や。此あたりにてさやうの人は思ひもよら



かけぞー嶮路を  
身はどの山の  
敷ならぬ身が  
程の山奥に來て  
の義歎

岩木にあらざれ  
ば一文選に人  
非木石豈無  
感矣  
虎溪を出して古  
も一三笑の故事

す候。よし誰にてもあれ上臈の、道のほとりの紅葉狩、ことさら酒宴の半ならば、誰か  
たがた乗打叶ふまじと、上歌謡「馬よりおりて沓をぬぎ、馬よりおりて沓をぬぎ、道を隔  
て山陰の、岩のかけちを過ぎ給ふ、心づかひぞたぐひなき。心づかひぞたぐひなき。  
シテ謡「けにや敷ならぬ身ほどの山の奥に來て、人は知らじと打ち解けて、ひとり眺むるも  
みぢ葉の、色見えけるか如何にせん。ワキ謡「我は誰とも白眞弓、たゞやごとなき御事に、  
恐れて忍ぶばかりなり。シテ謡「忍ぶもぢずり誰ぞとも、知らせ給はぬ道のべの、たよりに  
立ち寄り給へかし。ワキ詞「思ひよらずの御事や。何しに我をば留め給ふべきと、誰さらぬ  
やうにて過ぎ行けば、シテ謡「あら情なの御事や。一村雨の雨宿り、ワキ謡「一樹の陰に、  
シテ謡「立ち寄りて、地謡「一河の流を酌む酒を、いかでか見捨て給ふべきと、恥しながらも  
袂にすがりとどむれば、さすが岩木にあらざれば、心よわくも立歸る、所は山路の菊の  
酒、何かは苦しかるべき。  
ワキ地謡「けにや虎溪を出でしいにしへも、心ざしをば捨てがたき 人の情の盃の、深き

林間に云々白  
樂天の詩句

竹の葉一酒のこ  
と

移り行く雲に嵐  
の云々一新古今  
集の歌末句、葛  
城の山  
堪へず青苔云々  
一白樂天の詩句

契のためしとかや。シテ謡「林間に酒を煖て紅葉を焚くとかや。地謡「けに面白や所から、  
巖の上の苔筵、片敷く袖も紅葉衣の、くれなる深き顔ばせの、ワキ謡「此世の人とも思は  
れず、地謡「胸うち騒ぐばかりなり。ワキ謡「さなきだに人心、亂るよふしは竹の葉の、露  
ばかりだに受けじとは、思ひしかども盃に、向へばかはる心かな。されば佛も戒の、  
道はさまざま多けれど、ことに飲酒を破りなば、邪淫妄語も諸共に、亂心の花かつら、  
かゝる姿はまた世にも、たぐひ嵐の山櫻、よその見る目も如何ならん。シテ謡「よしや思へば  
是ととも、地謡「前世の契淺からぬ、深き情の色見えて、かゝる折しも道のべの、草葉の露  
のかごとをも、かけてぞ頼む行末を、契るもはかな打ちつけに、人の心も白雲の、立ち  
わづらへる氣色かな。かくて時刻も移り行く、雲に嵐の聲すなり。散るか正木の葛城の、  
神の契の夜かけて、月の盃さす袖も雪を廻す袂かな。堪へず紅葉、(中ノ舞)シテ謡「堪へず  
紅葉青苔の地、地謡「堪へず紅葉青苔の地、又これ涼風暮れゆく空に、雨うち濺ぐ夜嵐の、物  
凄しき山陰に、月待つほどのうたゝ寐に、かたしく袖も露深し。夢ばし覺まし給ふなよ。

あらたなりける  
夢の告—豊胎あ  
る夢想

咸陽宮の烟—秦  
始皇帝の宮殿の  
兵火に罹れるを  
いふ  
かほく—枯木の  
訛ならん

夢ばし覺まし給ふなよ。(中入)

ヲキ謡「あらあさましや我ながら、無明の酒の酔心、まどろむ隙もなき内に、あらたなりける夢の告と、地謡「驚く枕に雷火みだれ、天地もひどき風遠近の、たづきも知らぬ山中に、覺束なしや恐しや、上歌不思議や今までありつる女、不思議や今までありつる女、とりどり化生の姿を現はし、或は巖に火焰を放ち、又は虚空に焰を降らし、咸陽宮の烟の中に、七尺の屏風の上に猶、あまりて其たけ一丈の鬼神の、角はかほく眼は日月、面を向くべきやうぞなき。

ヲキ謡「維茂すこしも騒がずして、地謡「維茂すこしも騒ぎ給はず、南無や八幡大菩薩と、心に念じ、劔を抜いて待ちかけ給へば、微塵になさんと飛んでかよるを、飛び違ひむすと組み、鬼神の真中刺し通す所を、頭をつかんであがらんとするを、斬り拂ひたまへば、劔に恐れて巖へ上るを、引きおろし刺し通し、忽ち鬼神を従へ給ふ、威勢の程こそ恐しけれ。

内三

老松

梗概

菅公の遺跡なる太宰府安樂寺にて、老松の神靈現じ、梅松のめでたき謂れを示す事を作る。祝言に用ふる重き曲なり。

(協能)

シテ 老松の靈前は翁 ツレ男

ワキ 梅津の某

ヲキ謡「けに治まれる四方の國、けに治まれる四方の國、關の戸さよで通はん。ヲキ謡「そもそも是は都の西、梅津の何某とは我事なり。われ北野を信じ、常に歩みを運び候所に、ある夜の靈夢に、我を信せば筑紫安樂寺に參詣まうせと、あらたに御靈夢を蒙りて候間、只今九州に下向仕り候。三人道行謡「何事も、心にかなふ此時の、心にかなふこ

北野—天満宮  
安樂寺—太宰府  
に在り菅公の廟  
所

梅の花笠—古今集—鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさん老かくるやと—葉守—樹木を守る神

飛梅—菅公の筑紫へ赴かるるをり—東風吹かば句ちこせ上梅の花あるじなしとて春を忘るなと名残々惜しまれし梅筑紫迄飛び行きしといふ傳説あり

のときの、ためしもありや日の本の、國豊なる秋津洲の、波も音なき四つの海、高麗唐土も残りなき、御調の道の末こよに、安樂寺にも著きにけり。安樂寺にも著きにけり。シテ二人謡「梅の花笠春も來て、縫ふてふ鳥の梢かな。ツレ謡「松の葉色も時めきて、十返り深き緑かな。シテ、サシ謡「風を逐つて密に開く、年の葉守の松の戸に、春をむかへて忽に、露ふ四方の草木まで、神の恵に靡くかと、春めきわたる盛かな。下歌歩みをはこぶ宮寺の、光のどけき春の日に、上歌松が根の、岩間をつたふ苔筵、岩間をつたふ苔筵、敷島の道までも、けに未ありや此山の、天ぎる雪の古枝をも、猶惜まるよ花盛、手折りやすると守る梅の、花垣いざや圍はん、梅の花垣をかこはん。ワキ謡「いかに是なる老人に尋ね申すべき事の候。シテ謡「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ謡「聞き及びたる飛梅とは何れの木を申し候ぞ。ツレ謡「あら事も愚や我等はたゞ、紅梅殿とこそ崇め申し候へ。ワキ謡「けにけに紅梅殿とも申すべきぞや。謡「忝くも御詠歌により、今神木となり給へば、崇めても猶飽き足らずこそ候へ。シテ謡「さて此方なる松をば、何とか御覽じ分けられて候ぞ。

翁さみしき—翁さびとかく、翁さびは翁めきたる事

末社—附屬の祠好文木—晉の起居注に「晉武好文則梅不開—

ワキ謡「けに〜是も垣結ひまはし御注連を引き、誠に妙なる神木と見えたり。謡「いかさま是は老松の、シテ謡「遅くも心得給ふ物かな。シテ、ワキ謡「紅梅殿は御覽すらん、色も若木の花守までも、華やかなるに引きかへて、下歌地謡「守る我さへに老が身の、影古びたるまつ人の、翁さみしき木のもとを、老松と御覽せぬ、神慮もいかゞ恐しや。ワキ謡「猶々當社のいはれ委しく御物語り候へ。シテ、サシ謡「先社壇の體を拜み奉れば、北に峨々たる青山あり。地謡「朧月松閣の中に映じ、南に寂々たる瓊門あり。斜日竹竿のもとに透けり。シテ謡「左に火焰の輪塔あり、地謡「翠帳紅閨の粧昔を忘れず。右に古寺の舊跡あり、晨鐘夕梵の響絶うる事なし。クセけにや心なき、草木なりと申せども、かよる浮世の理をば知るべし、知るべし。諸木の中に松梅は、殊に天神の御自愛にて、紅梅殿も、老松も皆末社と現じ給へり。されば此二つの木は、我朝よりもなほ、漢家に徳をあらはし、唐の帝の御時は、國に文學盛なれば、花の色を増し、匂ひ常より優りたり、文學廢れば匂ひもなく、其色も深からず、さてこそ文を、好む木なりけりとて、梅をば、好

秦の始皇の御狩の時云々高砂にも見ゆ、史記始皇本紀に始皇東行郡縣乃遂上泰山立石封祠祀、下風雨暴至、休於松樹下、因封其樹爲五大夫云

文木とは附けられたれ。さて松を大夫といふことは、秦の始皇の御狩の時、天俄にかき曇り、大雨頻りに降りしかば、帝雨を凌がんと、小松の陰に寄り給ふ。此松俄に大木となり、枝を垂れ葉を竝べ、木の間透間を塞ぎて、其雨を漏らさざりしかば、帝大夫といふ爵を贈り給ひしより、松を大夫と申すなり。シテ謡「かやうに名高き松梅の、地謡」花も千代までの、行末久に御垣守、守るべし守るべしや。神はこよも同じ名の、天満つ空も紅の、花も松も諸共に、萬代の春とかや。千代萬代の春とかや。(中人)  
三人上歌謡「嬉しきかなやいざさらば、嬉しきかなやいざさらば、此松陰に旅居して、風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん。神の告をも待ちて見ん。  
後シテ謡「如何に紅梅殿、今夜の客人をば、何とか慰め給ふべき。地謡」けに珍らかに春も立ち、シテ謡「梅も色そひ、地謡」松とても、シテ謡「名こそ老木の若緑、地謡」空澄渡る神神樂、シテ謡「歌をうたひ舞をまひ、地謡」舞樂を供ふる宮寺の、聲も満ちたる、有難や。(眞ノ序舞)シテ謡「さす枝の、地謡」さす枝の、梢は若木の花の袖、シテ謡「是は老木の神松の、地謡」是は老木の神

此君一梅津の某をさす、竹を此君といふ王子猷の故事により、特に此語を用ひたり

松の、千代に八千代にさざれ石の、巖となりて苔のむすまで、シテ謡「苔のむすまで松竹鶴龜の、地謡」齢を授くる此君の、行末護れと我神詫の、告を知らする松風も梅も、久しき春こそめでたけれ、

頼政

梗  
頼政は清和源氏の流、父は仲正といふ。頼政仲綱の父子、以仁王に勸め申して、平家を討たんとして軍を擧げ、宇治に戦ひて敗れ、平等院に入りて自刃す。頼政時に年七十五。頼政文武の譽あり。事平家物語に詳也。此曲は頼政の幽靈を出して、宇治橋の戦を物語らしむ。朝長、實盛と共に三修羅の稱あり。(三番目)

シテ 頼政(前は老人) ワキ 僧

ワキ 詞 是は諸國一見の僧にて候。我此程は都に候ひて、洛陽の寺社残りなく拜み廻りて候。又是より南都に參らばやと思ひ候。道行謠 天雲の、稻荷の社伏しをがみ、稻荷の社伏しをがみ、猶行末は深草や、木幡の關を今越えて、伏見野澤田見え渡る、水の上尋ねきて、宇治里にも著きにけり。宇治里にも著きにけり。狂言シカク、ワキ 謠 けにや遠國にて聞き及びにし宇治里、詞 山の姿川の流れ、遠の里、橋の氣色、見所多き名所かな。詞 あはれ里

稻荷の社一伏見にあり  
橋一宇治橋

人の來り給へかし。

シテ 詞 なうく御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ 詞 是は此所はじめて一見の者にて候。此宇治の里に於て、名所舊跡残りなく御をしへ候へ。シテ 詞 所には住み候へども、いやしき宇治の里人なれば、名所とも舊跡とも、いさ白波の宇治の川に、舟と橋とは有りながら、渡りかねたる世の中に、住むばかりなる名所舊跡、何とか答へ申すべき。ワキ 詞 いやさやうには承り候へども、勸學院の雀は蒙求を囀るといへり。所の人にてましませば、御心にくうこそ候へ。先喜撰法師が住みける庵は、いづくの程にて候ぞ。シテ 詞 さればこそ大事の事を御尋ねあれ。喜撰法師が庵は、謠 我庵は都の巽しかぞ住む、詞 世を宇治山と人はいふなり、謠 人はいふなりとこそ、主だにも申し候へ。尉は知らず候。ワキ 詞 又あれ一村の里の見えて候は、楨の島候か。シテ 詞 さん候 楨の島とも申し、又宇治の河島とも申すなり。ワキ 謠 是に見えたる小島が崎は。シテ 詞 名にたちばなの小島が崎。ワキ 詞 向ひに見えたる寺は、いかさま惠心の僧都の、御法を説きし寺候な。シテ 謠 なうく旅人あれ

勸學院云々一  
謠、勸學院は藤  
原家の學問所  
にて冬嗣弘仁十二  
年建立す。蒙求  
は書名唐李瀚の  
撰  
喜撰法師一六歌  
仙の一人  
楨の島一宇治橋  
の西北にありし  
とぞ  
小島が崎一宇治  
橋の南にあり  
向ひに見えたる  
寺一龍泉寺

朝日山一宇治川の東

御覽ぜよ。上歌名にも似ず、月こそ出づれ朝日山、地謡「月こそ出づれ朝日山、山吹の瀬に影見えて、雪さし下す島小舟、山も川もおほろく」として、是非を分ぬ氣色かな。けにや名にし負ふ、都にちかき宇治の里、聞きしにまさる名所かな。聞きしにまさる名所かな。

平等院一宇治橋の南に在り永承七年開白左大臣宇治川別業を以て寺となしたるものは是也

シテ詞「いかに申し候、此所に平等院と申す御寺の候を御覽せられて候か。ワキ詞「不知案内の事にて候程に、未だ見ず候ふ、御教へ候へ。シテ詞「此方へ御出で候へ。是こそ平等院にて候へ。又是なるは釣殿と申して、面白き所にて候。よくく御覽候へ。ワキ詞「けにけに面白き所にて候。また是なる芝を見れば、扇の如く取り残されて候は、何と申したる事にて候ぞ。シテ詞「さん候、此芝に付いて物語の候。語つて聞かせ申し候べし。昔此所に宮軍の有りしに、源三位頼政合戦に打ち負け給ひ、此所に扇を敷き自害し果て給ひぬ。されば名將の古跡なればとて、扇のなりに取り残して、今に扇の芝と申し候。ワキ詞「痛はしやさしも文武に名を得し人なれども、跡は草露の道の邊となつて、行人征馬のゆく

宮軍一高倉宮以仁王の軍し給へるをいふ

涿鹿一黄帝と蚩尤と戦ひし野伊勢武者は云々一頼政の子仲の歌平家物語に出づ

への如し。あら痛はしや候。シテ詞「けによく御弔ひ候ふものかな。しかも其宮軍の月も日も今日に當りて候は如何に。ワキ詞「何と其宮軍の月も日も今日に當りたる候や。シテ詞「かやうに申せば我ながら、よそにはあらず旅人の、草の枕の露の世に、姿見えんと來りたり。現とな思ひ給ひそとよ。上歌地謡「夢の浮世の中宿の、夢の浮世の中宿の、宇治の橋守年を経て、老の浪も打ち渡す、遠方人に物申す、我頼政が幽靈と、名のりもあへず失せにけり。名のりもあへず失せにけり。(中入)ワキ詞「さては頼政の幽靈假に現れ、我に言葉を交しけるぞや。誦「いざや御跡弔はんと、上歌思ひ寄るべの波枕、思ひ寄るべの波枕、汀も近し此庭の、扇の芝を片敷きて、夢の契を待たうよ、夢の契を待たうよ。後シテ「誦「血は涿鹿の河となつて、紅波楯を流し、白刃骨を砕く、世を宇治川の網代の波、あら閻浮戀しや。伊勢武者は皆緋威の鎧著て、宇治の網代にかよりけるかな。うたかたの、あはれはかなき世の中に、地謡「蝸牛の角の争も、シテ詞「はかなかりける心かな。

五十展轉の功力  
一經文を傳へ傳  
へて五十人目の  
人さへ福を受く  
といふ  
法の場一靈鷲山  
にて法華經を説  
きしをいふ

治承の夏一四年  
五月

詞あら尊の御事や 猶々御經讀み給へ。ワキ誦不思議やな法體の身にて甲冑を帶し、御經讀めと承るは、いかさま聞きつる源三位の、其幽靈にてましますか。シテ詞けにや紅は園生に植るても隠れなし、謠名のらぬさきに、頼政と御覽するこそ恥しけれ只々御經讀み給へ。ワキ誦御心やすく思し召せ。五十展轉の功力だに、成佛まさに疑なし。ましてやは是は直道に、シテ誦弔ひなせる法の力、ワキ誦合ひに合ひたり所の名も、シテ誦平等院の庭の面、ワキ誦思ひ出でたり。シテ誦佛在世に、上歌地誦佛の説きし法の場、佛の説きし法の場。こよぞ平等大慧の、功力に頼政が、佛果を得んぞありがたき。シテ誦今はなにをか包むべき、是は源三位頼政、執心の波に浮き沈む、因果の有様現すなり。地誦抑治承の夏のころ、よしなき御謀叛をすよめ申し、名も高倉の宮の内、雲居のよそに有明の、月の都を忍び出でて、シテ誦憂き時しもに近江路や、地誦三井寺さして落ち給ふ。ワキ誦さる程に、平家は時を廻さず、數萬騎の兵を、關の東に遣すと、聞くや音羽の山續く、山科の里近き、木幡の關をよそに見て、こよぞ憂き世の旅心、宇治の

田原又太郎一平  
家物語足利に作  
る、この一節平  
家物語参照(本  
文扉本二百頁前  
後)

河橋打ち渡り、大和路さして急ぎしに、シテ誦寺と宇治との間に、地誦關路の駒のひまもなく、宮は六度まで御落馬にて、煩はせ給ひけり。是は先の夜、御寢ならざる故なりとて、平等院にして、暫く御座を構へつと、宇治橋の中の間引き離し、下は河波上に立つも、共に白旗を靡かして、よする敵を待ち居たり。シテ詞さる程に源平の兵、宇治川の南北の岸に打ち望み、関の聲矢叫の音、波にたくへておびたよし。橋の行桁を隔てと戦ふ。謠味方には筒井の淨妙、詞一頼法師、敵味方の目を驚かす。かくて平家の大勢、橋は引いたり水は高し、謠さすが難所の大河なれば、詞左右なう渡すべきやうも無かりし處に、謠田原又太郎忠綱と名のつて、詞宇治川の先陣我なりと、謠名のりもあへず三百餘騎、地誦轡を揃へ河水に、少しもためらはず、群れる村鳥の翅を並ぶる、羽音もかくやと白波に、ざつくと打ち入れて、浮きぬ沈みぬ渡しけり。シテ誦忠綱兵を下知してはいはく、地誦水の逆巻く所をば、岩ありと知るべし、弱き馬をば下手に立てよ、強きに水を防がせよ、流れん武者には弓箭を取らせ、互に力

兄弟の者一仲綱  
兼綱

埋木の云々一頼  
政辭世の歌、下  
の句、身のなる  
はてぞ悲しかり  
ける

を合はすべしと、只一人の下知に依つて、さばかりの大河なれども、一騎も流れず此方の岸に、をめていてあがれば味方の勢は、我ながら踏みもためず、半町ばかり覺えずしさつて、切先を揃へて、こよを最期と戦うたり。さる程に入り亂れ、我もくと戦へば、シテ詞「頼政が頼みつる、地謡「兄弟の者も討たれければ、シテ謡「今は何をか期すべきと、地謡「唯一筋に老武者の、シテ謡「是までと思ひて、地謡「是までと思ひて、平等院の庭の面、是なる芝の上に、扇を打ち敷き、鎧脱ぎ捨て座を組み、刀を抜きながら、さすが名を得し其身とて、シテ謡「埋木の花咲く事もなかりしに、身のなるはては哀なりけり、地謡「跡とひ給へ御僧よ、假初ながら是ととも、他生の種の縁に今、扇の芝の草の陰に、歸るとて失せにけり。たち歸るとて失せにけり。

### 井筒

梗 概

在原業平は阿保親王の第五子なり。在五中將といひ六歌仙の一人なり。その事蹟をおぼるげに書き集めたる歌物語は名高き伊勢物語なり。その一節に、幼馴染の女と、筒井筒井筒にかけしまるが丈すぎにけらしな妹見ざるまに、比べ來し振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべきと歌詠み交して、相語らひしが、後男、河内の高安の女の許に通ひしを彼の女恨ますして、風吹けば沖つ白波龍田山夜半にや君がひとり越ゆらん」と詠めりといふ物語あり。此曲は井筒の女を紀有常の女として脚色し、昔を語らしむ。(鬘物)

シテ 有常の女(前は里女) ワキ 僧

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此程は南都七堂に参りて候。又是より初瀬に参らばやと存じ候。是なる寺を人に尋ねて候へば、在原寺とかや申し候程に、たちより一見せばやと思ひ候。誑さては此在原寺は、いにしへ業平紀の有常の息女、夫婦住み給ひし石上

南都七堂一奈良  
七堂のこと  
初瀬一尾谷觀音  
在原寺一石上在  
原山本光明寺と  
いふ



なるべし。風吹けば沖つ白波龍田山と詠じけんも、此所にての事なるべし。下歌昔がたりの跡訪へば、其業平の友とせし、紀有常の常なき世、妹脊をかけて弔はん。妹脊をかけて弔はん。

佛の御手の糸一  
佛に従て淨土へ  
導かざる縁とし  
て佛像の御手の  
糸を取ること

板井一板にて組  
み上げたる井戸

シテ次第謠「曉ごとの関伽の水、曉ごとの関伽の水、月も心や澄ますらん。昔なきだに物の淋しき秋の夜の、人目稀なる古寺の、庭の松風更け過ぎて、月も傾く軒端の草、忘れて過ぎし古を、忍ぶ顔にていつまでか、待つ事なくてながらへん。けに何事も思ひ出の、人には残る世の中かな。下歌只いつとなく一筋に、頼む佛の御手の糸、導きたまへ法の聲。上歌迷をも、照らさせ給ふ御誓、照らさせたまふ御誓、けにもと見えて有明の、行方は西の山なれど、眺めは四方の秋の空、松の聲のみ聞ゆれども、嵐はいづくとも、定めなき世の夢心、何の音にか覺めてまし。何の音にか覺めてまし。  
ワキ詞「我此寺にやすらひ、心を澄ますをりふし、いとなまめける女性、庭の板井を結び上げ花水とし、是なる塚に回向の氣色見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ詞「是は此

本願一寺を建立  
せし願主

昔男一伊勢語に  
「昔男ありけり  
云々」と書き出  
せるをさす

穂に出づる一あ  
らはる意

あたりに住む者なり。此寺の本願在原の業平は、世に名を留めし人なり。されば其跡のしるしも是なる塚の陰やらん。妾も委くは知らず候へども、花水を手向け、御跡を弔ひ参らせ候。ワキ詞「けにく業平の御事は、世に名を留めし人なりさりながら、今は遙に遠き世の、昔語の跡なるを、しかも女性の御身として、かやうに弔ひ給ふ事。其在原の業平に、諺いかさま故ある御身やらん。シテ詞「故ある身かと問はせ給ふ、其業平は其時だにも、昔男といはれし身の、ましてや今は遠き世に、故もゆかりもあるべからず。  
ワキ謠「もつとも仰せはさる事なれども、ことは昔の舊跡にて、シテ謠「主こそ遠く業平の、ワキ謠「あとは残りてさすがにいました、シテ謠「聞えは朽ちぬ世語を、ワキ謠「語れば今も、シテ謠「昔男の、上歌地謠「名ばかりは、在原寺の跡古りて、在原寺の跡古りて、松も老いたる塚の草、是こそそれよ亡き跡の、一村すすきの穂に出づるは、いつの名残なるらん。草茫茫として、露深々と古塚の、まことなるかな古の、跡なつかしき氣色かな。跡なつかしき氣色かな。

紀有常一惟奮親  
王に仕へ業平と  
親交あり

うたかたの—あ  
わの枕詞、歌に  
云ひかけ且普通  
によりあはれの  
とす  
井筒—井戸側  
うなる子—髪を  
あげざる童

まめ男—まめは  
實意ある意

ワヤ詞「猶々業平の御事委く御物語候へ。クリ地謡」むかし在原の中將、年經てこよに石上、  
ふりにし里も花の春、月の秋とて住み給ひしに、シテ、サシ謡「其頃は紀有常が娘と契り、妹  
脊の心淺からざりしに、地謡「又河内國高安里に、知る人ありて二道に、忍びて通ひ給ひ  
しに、シテ謡「風ふけば沖つ白波龍田山、地謡「夜半にや君がひとり行くらんと、おほつか  
みのよるの道、ゆくへを思ふ心遠けて、よその契はかれぐなり。シテ謡「けに情知るうた  
かたの、地謡「あはれを述べしも理なり。クセむかし此國に、住む人の有りけるが宿を  
ならべて門の前、井筒によりてうなる子の、友達語らひて、互に影を水鏡、面をならべ  
袖を懸け、心の水の底ひなく、うつる月日も重なりて、おとなしく恥ぢがはしく、互に  
今はなりにけり。其後彼まめ男、言葉の露の玉章の、心の花も色そひて、シテ謡「井筒、  
井筒に懸けしまろが丈、地謡「生ひにけらしな妹見ざる間にと、詠みておくりける程に、其  
時女もくらべこし、振分髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰かあぐべきと、互に詠みし故な  
れや。井筒の女とも、聞えしは有常が、娘の古き名なるべし。

昔を返す衣手—  
古今集の「いと  
せめて戀しき時  
はうば玉の夜の  
衣を返してぞ寐  
る」といふ歌の  
意に據る  
あだなりと云々  
—伊勢物語の歌  
片やあらぬ—業  
平の歌の句

ロンギ地謡「けにや古りにし物語、聞けば妙なる有様の、あやしや名のりおはしませ、シテ謡「誠  
は我は戀衣、紀有常が娘とも、いさ白波の龍田山、夜半にまぎれて來りたり。地謡「不思  
議やさては龍田山、色にぞ出づるもみぢ葉の、シテ謡「紀有常が娘とも、地謡「又は井筒の女  
とも、シテ謡「恥ながら我なりと、地謡「いふや注進繩の長き世を、契りし年は筒井筒、井筒  
の陰に隠れけり。井筒の陰に隠れけり。(中入)  
ワヤ詞「更けゆくや、在原寺の夜の月、在原寺の夜の月、昔を返す衣手に、夢待ちそへて假  
枕、昔の筵に臥しにけり。昔の筵に臥しにけり。  
後シテ「あだなりと名にこそ立てれ櫻花、年に稀なる人も待ちけり。かやうによみしも我  
なれば、人待つ女ともいはれしなり。我筒井筒の昔より、真弓槻弓年を経て、今は亡き  
世に業平の、形見の直衣身に觸れて、はづかしや昔男に移舞、地謡「雪を廻らす花の袖  
(序ノ舞)シテ謡「こよに來て、昔ぞかへす在原の、地謡「寺井に澄める月ぞさやけき。月ぞさやけ  
き、シテ謡「月やあらぬ、春や昔と詠めしも、いつの頃ぞや筒井筒、地謡「つよるづつ、井筒

凋める花の云々  
古今集序に葉  
平の歌を評せる  
語

にかけし、シテ謡「まろが丈、地謡「生ひにけらしな。シテ謡「老いにけるぞや。地謡「さながら  
見みえし昔男むかしをこの、冠直衣かぶりなほしは女とも見えす、男なりけり業平なりひらの面影おもかげ、シテ謡「見ればな  
つかしや。地謡「我ながらなつかしや。亡婦魄靈はうふはくれいの姿すがたは、凋める花はなの色無いろなうて、匂残りのこりて  
在原ありはらの、寺てらの鐘かねもほのくくと、明あくれば古寺ふるてらの、松風まつかぜや芭蕉葉はせをばの、夢ゆめも破やぶれて覺さめにけ  
り。夢ゆめは破やぶれ明あけにけり。

### 三井寺

梗 概

駿河國清見が關の女、一子を人買に誘拐せられ、それを慕ひ歎  
きて、物狂となりしが、靈夢の告にあづかりて、江州三井寺に  
到る。頃は仲秋三五の夜、明月湖上に浮べり。こゝに當寺  
の兒となれる我が子に廻り會ふ。鐘に關する引句を以て  
文飾したる一段頗る精彩あり。(狂女物)

シテ 狂女    ワキ 住僧    ツレ 從僧  
子方 千萬    狂言 夢卜者

シテ謡「南無なむや大慈大悲だいじだいひの觀世音くわんぜおんさしも草ぐさ、さしもかしこき誓ちかひの末すえ、一稱いっしょう一念いちねんなほ頼たのみあ  
り。ましてや此程このほど日を送おくり、夜よを重ねかさねたる頼たのみの末すえ、などか其そのかひなからんと、思おもふ心  
ぞあはれなる。下歌うた憐あはれみ給たまへ思おもひ子の、行末ゆくすえ何なにとなりぬらん。行末ゆくすえ何なにとなりぬらん。  
上歌か枯かれたる木きにだにも、枯かれたる木きにだにも、花はな咲さくべくはおのづから、いまだ若木わかきの  
みどり子こに、再またびなどか逢あはざらん。再またびなどか逢あはざらん。詞あら有あり難がたや、候さふらふすこ  
し睡する

一稱一念一度  
觀音の御名をが  
へ念ずること  
さしも草「唯  
たのめしめじが  
原のさしも草我  
世の中にあらん  
限は」の歌によ  
る

訪ひ慰むる人  
夢占の人(狂言方)

眠の内に、あらたなる靈夢を蒙りて候は如何に。妾を何時も訪ひ慰むる人の候。あはれ  
來り候へかし語らばやと思ひ候。狂言シカく。シテ詞「唯今少し睡眠の内に、あらたなる  
御靈夢を蒙りて候。我子に逢はんと思はば、三井寺へ參れとあらたに御靈夢を蒙りて候。  
狂言シカく。シテ詞「あら嬉しと御合せ候物かな。告に任せて三井寺とやらんへ參り候べ  
し。

園城寺—三井寺  
のこと

講堂—經論聖教  
の講釋論義など  
する所

雪ならば云々—  
古歌下句花の吹  
雪の志賀の山越

四人次第 謠 秋も半の暮待ちて、秋も半の暮待ちて、月に心や急ぐらん。ワキ詞「是は江州園  
城寺の住僧にて候。又是に渡り候幼き人は、愚僧を頼む由仰せ候間、力なく師弟の契約  
をなし申して候。又今夜は八月十五夜明月にて候程に、幼き人を伴なひ申し、皆々講堂  
の庭に出でて、月を詠めばやと存じ候。四人上歌 謠 類なき名を望月の今宵とて、名を望月  
の今宵とて、夕を急ぐ人心、知るも知らぬも諸共に、雲を厭ふやかねてより、月の名頼  
む日影かな。月の名頼む日影かな。  
後シテ 謠 雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪と詠じけん、志賀の山越うち過ぎて、眺の

上見ぬ鷺—謠、  
比叡を靈鷲山に  
なぞらへいふ

都の秋を捨てて  
云々—古今集の  
「春霞たつをみ  
すて行く雁は  
花なき里に住み  
やならへる」を  
序案す

花園の里—志賀  
の都の時遊覽の  
地たり  
桂生三五夜—唐  
の李暉の詩句  
三五夜中新月色  
云々—白樂天の  
詩句  
水の面に云々—  
源順の歌下句今  
宵ぞ秋のななか  
なりける、月な  
みは月次の意

末は湖の、鴉照る比叡の山高み、上見ぬ鷺の御山とやらんを、今日の前に拜む事よ。あ  
ら有難の御事や。詞かやうに心あり顔なれども、我は物に狂ふよなう。いや我ながら理  
なり。あの鳥類や畜類だにも、親子のあはれは知るぞかし。謠 ましてや人の親として、い  
とほし悲しと育てつる、一雙子の行方をも白糸の、地謠「亂れ心や狂ふらん。シテ謠「都の秋  
を捨てて行かば、地謠「月見ぬ里に住みや習へると、さこそ人の笑はめ。よし花も紅葉も、  
月も雪も故郷に、我子のあるならば、田舎も住みよかるべし、いざ故郷に歸らん。いざ故  
郷に歸らん。歸ればさよ波や、志賀辛崎の一つ松、緑子の類ならば、松風に事問はん、松  
風も、今は厭はじ櫻咲く、春ならば花園の、里をも早く杉間吹く、風冷ましき秋の水の、  
三井寺に著きにけり。三井寺に早く著きにけり。

ワキ謠「桂は實る三五の暮、名高き月にあこがれて、庭の木蔭に休へば、シテ謠「實にく今  
宵は三五夜中の新月の色、二千里の外の人故の心、水の面に照る月なみを數ふれば、秋も  
最中夜も半、所からさへ面白や。上歌地謠「月は山、風ぞ時雨に鳩の海、風ぞ時雨に鳩の海

波も粟津の森見えて、海ごしの幽に向ふ影なれど、月は眞澄の鏡山 山田矢走の渡舟の、夜は通ふ人なくとも、月の誘はどおのづから、舟もこがれて出づらん、舟人もこがれ出づらん。

さく波や三井の古寺云々新撰歌枕にある歌秀卿下野押領使田原藤太と號す  
龍女が成佛の縁一法華經にあり庚公一晉の庚亮南樓に登て月を愛す

圓々として云々一詩の前半原文と小異あり

シテ詞「面白の鐘の音やな。我が故郷にては清見寺の鐘をこそ常に聞き馴れしに、是は又ささ波や、謠三井の古寺鐘はあれど、詞昔にかへる聲は聞えず。誠や此鐘は、秀郷とやらの龍宮より、取りて歸りし鐘なれば、謠龍女が成佛の縁に任せて、妾も鐘を撞くべきなり。次第地謠「影はさながら霜夜にて、影はさながら霜夜にて、月にや鐘は牙えぬらん。ワヤ詞「やあく暫く、狂人の身にて何とて鐘をば撞くぞ、急いで退き候へ。シテ詞「夜庚公が樓に登りしも、月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ。ワヤ詞「それは心有る古人の言葉。狂人の身として鐘撞くべき事。思も寄らぬ事にて有るぞとよ。シテ詞「今宵の月に鐘撞く事、狂人とな厭ひ給ひそ。或る詩に曰く、謠團々として海嶠を離れ、詞漸々として雲衢を出づ。此後句無かりしかば、明月に向つて心を澄まいて、謠今宵一輪満てり、清光何れの所に

諸行無常云々一涅槃經の四句の偈

五障一女人は罪深くして五の障害ありと佛説にいふ  
長樂一漢高祖の宮殿この所朗詠集の詩句に據る

山寺の春の夕暮云々一新古今集能因法師の歌

か無からんと、詞此句を設けて餘りの嬉しさに心亂れ、高樓に登つて鐘を撞く。人々如何にと咎めしに、是は詩狂と答ふ。かほどの聖人なりしだに、月には亂るよ心有り。ましてや拙なき狂女なれば、地謠「許したまへや人々よ。煩惱の夢を覺ますや、法の聲も靜に、先初夜の鐘を撞く時は、シテ謠「諸行無常と響くなり。地謠「後夜の鐘を撞くときは、シテ謠「是生滅法と響くなり。地謠「晨朝の響は、シテ謠「生滅々已、地謠「入相は、シテ謠「寂滅、地謠「爲樂と響きて、菩提の道の鐘の聲、月も數添ひて、百八煩惱の眠の、驚く夢の世の迷ひも、はや盡きたりや後夜の鐘に、我も五障の雲晴れて、眞如の月の影を眺め居りて明かさん。クリ夫れ長樂の鐘のこゑは、花のほかか盡きぬ。シテ謠「また龍池の柳の色は、地謠「雨のうち深し。シテサシ謠「其外こよにも世々の人、言葉の林のかねて聞く、地謠「名も高砂の尾上の鐘、曉かけて秋の霜、曇るか月もこもりくの、初瀬も遠し難波寺、シテ謠「名所多き鐘の音、地謠「盡きぬや法の聲ならん。クセ山寺の、春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける。實に惜めども、など夢の春と暮れぬらん。其外曉の、妹脊を惜むきぬぐの、恨

待宵に云々小侍従の歌平家物語にあり

月落ち云々野の張網の楓橋夜泊の詩による古來鳥とかきてトリと詠へり

みを添ふる行方にも、枕の鐘や響くらん。又待つ宵に、更け行く鐘の聲聞けば、あかぬ別れの、鳥は物かはと詠ぜしも、戀路の便の、音信の聲と聞く物を。又は老いらくの、寢覺程ふる古へを、今思ひ寢の夢だにも、涙心のさみしさに、此鐘のつくぐくと、思ひを盡す曉を、いつの時にか比へまし。シテ謡「月落ち鳥鳴いて、地謡「霜天に満ちて冷まし、江村の漁火もほのかに、半夜の理の響きは、客の船にや通ふらん。蓬窓雨したどりで、馴れし汐路の楫枕、浮寝ぞかはる此海は、波風も靜にて、秋の夜すがら月すむ三井寺の鐘ぞさやけき。

子詞「如何に申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。子詞「是なる物狂の國里を問うて給はり候へ。ワキ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候物かな。去りながら易き間の事尋ねて參らせうするにて候。如何に是なる狂女、おことの國里は何くの者にて有るぞ。シテ謡「是は駿河國清見が關の者にて候。子謡「何なう清見が關の者と申し候ふか。シテ謡「あら不思議や、今の物仰せられつるは、正しく我子の千満殿ごさめれ。あら珍しや候。ワキ詞「暫く。是な

ごさめれ一こそあるめれの約

面伏一恥辱

羽束師一森、音通にて漏の序とナ山城にあり

る狂女は龜忽なる事を申す者かな。さればこそ物狂にて候。シテ謡「なう是は物には狂はぬものを。物に狂ふも別れ故逢ふ時は何しに狂ひ候べき。是は正しき我子にて候。ワキ詞「さればこそ我子と申すか條なき事を申し候。急いで退き候へ。子詞「あら悲しやさのみな御打ち候ひそ。ワキ詞「言語道斷はや色に出で給ひて候。此上はまつすぐに御名のり候へ。子謡「今は何をか包むべき、我は駿河國、清見が關の者なりしが、人商人の手に渡り、今此寺に在りながら、母上我を尋ね給ひて、かやうに狂ひ出で給ふとは、夢にも我は知らぬなり。シテ謡「又妾も物に狂ふ事、あの兒に別れし故なれば、たましく逢ひ見る嬉しさのまよ、やがて母よと名のる事、我子の面伏なれど、子故に迷ふ親の身は、恥も人目も思はれず、ロンギ地謡「あら痛はしの御事や、よそ目も時による物を、逢ふを悦び給ふべし。シテ謡「嬉しながらも衰ふる、姿はさすが羽束師の、漏りて餘れる涙かな。地謡「實に逢ひ難き親と子の、縁は盡させぬ契として、シテ謡「日こそ多きに今宵しも、地謡「此三井寺に廻り來て、シテ謡「親

内三 三井寺

常の契一男女の中

子に逢ふは、地謡何故ぞ。此鐘の聲立てよ。物狂の有るごとて、御咎め有りし故なれば、常の契には、別れの鐘と厭ひしに、親子のための契には、鐘故に逢ふ夜なり。嬉しき鐘の聲かな。ヤリかくて伴なひ立ち歸り、かくて伴なひ立ち歸り。親子の契盡きせずも、富貴の家となりにけり。實に有難き孝行の、威徳ぞめでたかりける。威徳ぞめでたかりける。

天鼓

梗 唐土に天鼓といふ者あり。その持てる鼓を内裏に召されんとし、勅命に背きて、非業の死を遂ぐ。然るに鼓は宮殿に据ゑられしまゝ鳴る事なし。かくて天鼓の父、召出されてこれを打つに、父子恩愛の驗あらはれて、鳴り出でければ、感ぜぬ者なし。即ち天鼓の亡靈は厚き帛を受くといふ筋なり。(四番目)

前シテ 父 後シテ 天鼓 ワキ 勅使

ワキ詞「是は唐土後漢の帝に仕へ奉る臣下なり。さてもこの國の傍に、王伯、王母とて夫婦の者あり、彼者一人の子を持つ。其名を天鼓と名づく。彼を天鼓と名づくる事は、彼が母夢中に天より一つの鼓降り下り、胎内に宿ると見て出生したる子なればとて、其名を天鼓と名づく。其後天より誠の鼓降り下り、打てば其聲妙にして、聞く人感を催せり。此由帝聞し召され、鼓を内裏に召されしに、天鼓深く惜み、鼓を抱き山中に隠れぬ。

然れどもいづくか玉地ならねば、官人を以て捜し出だし、天鼓をば瀧水の江に沈め、鼓をば内裏に召され、阿房殿雲龍閣に据ゑ置かれて候。又其後の鼓を打たせらるれども更に鳴る事なし。いかさま主の別を歎き鳴らぬと思召さるゝ間、彼者の父王伯を召して打たせよとの宣旨に任せ、只今王伯が私宅へと急ぎ候。

鯉魚―伯魚ともいふ孔子の子  
白居易―樂天といふ、金鑿子を  
哭すといふ詩に  
故衣猶架上殘藥  
尙頭邊の句あり  
いとなき―いとまなき

一覽謡「露の世になほ老の身のいつまでか、また此秋にのこるらん。〆傳へ聞く孔子は鯉魚に別れて、思の火を胸に焚き、白居易は子を先だてて、枕に残る藥を恨む。是れ皆仁義禮智信の祖師、文道の大祖たり。我等が歎くは科ならじと、思ふおもひに堪へかぬる。涙いとなき袂かな。下歌 思はじと、思ふ心のやどやらん、夢にもあらず現にも、なき世の中ぞ悲しき。なき世のなかぞ悲しき。上歌よしさらば、思ひ出でじと思寢の、おもひ出でじと思寢の、闇の現に生れ来て、忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ。只何故の憂き身の、命のみこそ恨みなれ、命のみこそ恨みなれ。

ワキ詞「如何に此屋の内に王伯があるか。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「是は帝よりの宣旨に

て有るぞ。シテ詞「宣旨とはあら思ひよらずや何事にて御座候ぞ。ワキ詞「さても天鼓が鼓内裏に召されて後、いろく打たせらるれども更に鳴る事なし。如何さま主の別を歎き鳴らぬと思召さるゝ間、王伯に参りて仕れとの宣旨にて有るぞ、急いで参内仕り候へ。シテ詞「仰せ畏つて承り候さりながら、勅命にだに鳴らぬ鼓の、老人が参りて打ちたればとて、何しに聲の出づべきぞ。いやく是も心得たり。勅命を背きし者の父なれば、誦重ねて失はれんためにぞ有らん。よし〜それも力なし。我子のために失はれんは、それこそ老の望なれ。あら歎くまじや頓てまゐり候べし。ワキ謡「いやく左様の宣旨ならず、只々鼓を打たせんと、其爲ばかりの勅説なり。急いで参り給ふべし。誦上歌「假令罪には沈むとも、地誦「假令罪には沈むとも、又は罪にも沈まずとも、憂きながら我子の形見に、帝を拜み参らせん。帝を拜み参らせん。

ワキ詞「急ぐ間、程なく内裏にて有るぞ、此方へ來り候へ。シテ詞「勅説にて候程に、是までは参りて候へども、誦「老人が事をば、御免あるべく候。ワキ謡「申す所は理なれども、まづ



鼓を仕り候へ、鳴らずは力なき事急いで仕り候へ。シテ詞「さては辭すとも叶ふまじ。勅に應じて打つ鼓の、聲もし出でばそれこそは、我子の形見と夕月の、謠上に輝く玉殿に、始めて臨む老の身の、次第地謠「生きてある身は久方の、生きてある身は久方の、天の鼓を打たうよ。

瓶其磧鏤不  
窺王淵者朱  
知龜龍之所蟠  
也一文選吳郡賦  
の文

三界一欲界色界  
色界  
草衣草にて摺  
りたる衣  
時の鼓一時刻を  
報ずる鼓

クリ地謠「その磧鏤にならつて玉淵を窺はざるは、驪龍の蟠る所を知らざるなり。シテ謠「實にや世々ごとの、假の親子に生れ来て、地謠「愛別離苦の思ひ深く、恨むまじき人を恨み、悲しむまじき身を歎きて、我と心の間深く、輪廻の波にたどよふ事、生々世々もいつまでの、シテ謠「思ひのきづな長き世の、地謠「苦の海に沈むとかや。クセ地を走る獸、空を翔る翅まで、親子の哀知らざるや。況んや佛性同體の人間、此生に此身を浮めずは、いつの時か、生死の海を渡り山を越えて、彼岸に至るべき。シテ謠「親子は三界の首枷と、地謠「聞けば誠に老心、別れの涙の雨の袖、しをれぞ増さる草衣、身を恨みても其かひの、なき世に沈む罪科は、只命なれや明暮の、時の鼓の現とも、思はれぬ身こそ恨みなれ。

ロンギ地謠「鼓の時も移るなり、涙を止めて老人よ、急いで鼓打つべし。シテ謠「實にくはは大君の、忝しや勅命の老の時も移るなり。急いで鼓打たうよ。地謠「打つや打たずや老波の、立ち寄る影も夕月の、シテ謠「雲龍閣の光さす、地謠「玉の階、シテ謠「玉の床に、地謠「老の歩みも足弱く、薄氷を踏む如くにて、心も危き此鼓、打てば不思議や其聲の、心耳を澄ます聲出でて、實にも親子の驗の聲、君も哀と思召して、龍顔に御涙を、浮め給ふぞ有難き。

ワキ詞「如何に老人、只今鼓の音の出でたる事、誠に哀と思し召さるよ間、老人には數の寶を下さるよなり。又天鼓が跡をば、管絃講にて御用ひあるべきとの勅説なり。心安く存じ、まづく老人は私宅に歸り候へ。シテ詞「あら有難や候。さらば老人は私宅に歸り候べし。(申入)

ワキ謠「さても天鼓が身を沈めし、瀧水の堤に御幸なつて、同じく天の鼓をすゑ、上歌糸竹呂律の聲々に、糸竹呂律の聲々に、法事をなして亡き跡を、御用ひぞ有難き。頃は初秋の

管絃講一音楽に  
て佛事を營むこ  
と

三伏の夏云々  
和漢朗詠集に池  
冷水無三伏夏  
松高風有一聲  
秋

けしたる一化し  
たる、化生のも  
のなどの意

月宮の昔一玄宗  
皇帝夢に天上に  
遊びし故事

空なれば、早三伏の夏たけ、風一聲の秋の空、夕月の色も照り添ひて、水滔々として波  
悠々たり。

後シテ謡「あら有難の御弔ひやな。勅を背きし天罰にて、瀧水に沈みし身にしあれば、後の  
世までも苦みの、海に沈み波に打たれて、呵責の責も隙無かりしに、思はざる外の御弔  
ひに、浮み出でたる瀧水の上、曇らぬ御代の有難さよ。

ワキ謡「不思議やな早更け過ぐる水の面に、けしたる人の見えたるは、如何なるものぞ名を  
名のれ。シテ詞「是天鼓が亡靈なるが、御弔ひの有難さに、是まで現れ参りたり。ワキ謡「さ  
ては天鼓が亡靈なるかや。詞「しからばかよる音楽の、舞樂も天鼓が手向の鼓、打ちて其  
聲出づならば、謡「實にも天鼓が驗なるべし。はやく鼓を仕れ。シテ詞「うれしやさては  
勅説「ぞと、夕月かよやく玉座のあたり、ワキ謡「玉の笛の音聲すみて、シテ詞「月宮の昔も  
かくやとばかり、ワキ謡「天人も影向、シテ謡「菩薩もことよに、シテ、ワキ謡「天くだります氣色に  
て、同じく打つなり天の鼓、上歌地謡「打ち鳴らす其聲の、打ち鳴らす其聲の、瀧水の波は

秋風樂夜半樂  
樂の名

たんだく一拱す  
ること

六つの巷一六道  
のこと、地獄餓  
鬼畜生修羅人天

滔々と、打つなり打つなり、汀の聲の、より引く糸竹の、手向の舞樂は有難や。シテ謡「面  
白や時も實に、地謡「面白や時も實に、秋風樂なれや松の聲、柳葉を拂つて月も涼しく、星  
も相逢ふ空なれや、烏鵲の橋の下に紅葉を敷き、二星の館の前に、風冷に夜も更けて、  
夜半樂にも早なりぬ。人間の水は南、星は北にたんだくの、天の海面雲の波、立ち添ふ  
や瀧水の堤の月に嘯き、水に戯むれ波を穿ち、袖を返すや、夜遊の舞樂も時去りて、五  
更の一點鐘も鳴り、鳥は八聲のほのくと、夜も明け白む時の鼓、數は六つの巷の聲に、  
又打ち寄りて現か夢か、又うち寄りて現か夢幻とこそなりにけれ。

内四

白樂天

梗

概

白樂天は唐代の文人、その白氏文集は夙に我が邦に渡來し、詩風の影響顯著なりき。この曲は住吉明神をして、我が國風たる歌道を讚歎せしめ、以て漢才の到底奈何ともし難きを諷したり。即ち歌德神德併せ現する意は末段の諸神舞樂に見ゆ。(脇能)

シテ 住吉明神(前は漁翁) ツレ 漁夫

ワキ 白樂天

太子の賓客―太子に奉仕する官

ワキ語「そもく是は唐の太子の賓客、白樂天とは我が事なり。詞擧も是より東に當つて國あり、名を日本と名づく。急ぎ彼土に渡り、日本の智恵を計れとの宣旨に任せ、只今海路に赴き候。三人次第誦舟漕ぎ出でて日の本の、舟漕ぎ出でて日の本の、其方の國を尋

内四 白樂天

ねん。道行東海の、波路遙に行く舟の、波路遙に行く舟の、跡に入日の影残る、雲の旗手の天つ空、月また出づる其方より、山見えそめて程もなく、日本の地にも著きにけり。日本ほんの地にも著つきにけり。詞海路を経て急ぎ候程に、是ははや日本の地ちに著つきて候。暫しばらくく此所このころに碇いかりをおろし、日本にっぽんのやうを詠たがめばやと存ぞんじ候。

一ヒ、ツレ聲こゑ謡うた「不知火しらぬひの、筑紫つくしの海の朝あさほらけ、月つきのみ残のこるけしきかな。シテ、ツレ謡うた「巨水こすまん漫々まんまんとして碧浪へきろう天てんを浸ひたし、シテ、ツレ謡うた「越こを辭じせし范蠡はんらいが、扁舟へんしゅうに楫さを移うつすなる、五湖ごこの煙けいりの波なみの上うへ、かくやと思おもひ知られたり、あら面白おもしろの海上かいしやうやな。下歌まつら松浦瀨まつらがた、西にしに山やまなき有明ありあけの、上歌つぎ月の入いる、雲くもも浮うかむや沖おきつ舟ふね、互たがひにかよる朝あさまだき、海うみは其方そなたか唐土もろこしの、船路ふねぢの旅たびも遠とほからで、一夜ひつよし泊まりと聞きくからに、月つきも程ほどなき名残なごりかな。月つきも程ほどなき名残なごりかな。

ワヤ謡うた「我われ萬里ばんりの波濤はたうを凌しのぎ、日本にっぽんの地ちにも著つきぬ。是これに小船いっさうかう一艘いっさう浮うかめり、見れば漁翁ぎよそうなり。如何いかにあれなるは日本にっぽんの者ものか。シテ謡うた「さん候ごころ是これは日本にっぽんの漁翁ぎよそうにて候。御身おんみは唐たうの白はく

不知火—筑紫の  
枕詞  
范蠡—越王勾踐  
の爲に吳を滅し  
て會稽の恥を報  
じ功成り名遂げ  
て後退けり  
松浦瀨—肥前

空目—見違ひ  
言さやぐ—唐の  
枕詞

天竺の靈文—經  
の陀羅尼

樂天らくてんにてましますな。ワヤ謡うた「不思議ふしぎやな。始めて此土このちに渡わたりたるを、白樂天はくらくてんと見る事は、何なにの故ゆゑにてあるやらん。ツレ謡うた「其身そのみは漢土かんしの人ひとなれども、名なは先立さきだつて日本にっぽんに聞きこゆ、隠かくれなければ申まをすなり。ワヤ謡うた「たとひ其名そのなは聞きこゆるとも、それぞとやがて見み知る事こと、あるべき事こととも思おもはれず。シテ、ツレ謡うた「日本にっぽんの智惠ちゑを計はからんとて、樂天らくてん來り給たまふべきとの、聞きこえは普あまねき日ひの本もとに、西にしを眺ながめて沖おきの方かたより、船ふねだに見みゆれば人ひと毎ごとに、すはやそれぞと心こころづくしに、上歌まつら地謡ぢうたう「今いまやくくと松浦舟まつらふね、今いまやくくと松浦舟まつらふね、沖おきより見みえて隠かくれなき、唐舟もろこしふねの唐から人ひとを、樂天らくてんと見る事は、何か空目そらめなるべき。むつかしや言ことさやぐ、唐人からびとなれば御詞おことばを、とても聞きも知らばこそ。あらよしな釣竿つりざなの暇いさまをしや、釣垂つりたれん。暇いさまをしや釣垂つりたれん。ワヤ謡うた「なほく尋たづぬべき事ことあり舟ふねを近ちかづけ候まをへ。如何いかに漁翁ぎよそう、さて此頃このころ日本にっぽんには何事なにことを翫あそぶぞ。シテ謡うた「さて唐土たうしには何事なにことを翫あそび給たまひ候まをぞ。ワヤ謡うた「唐たうには詩しを作つくつて遊あそぶよ。シテ謡うた「日本ほんには歌うたをよみて人の心こころを慰なぐさめ候まを。ワヤ謡うた「そも歌うたとは如何いかに。シテ謡うた「それ天竺てんぢくの靈文れいもんを唐たう土どの詩賦しふとし、唐土たうしの詩賦しふを以もつて我朝わがてうの歌うたとす。されば三國さんごくを和やはらに來きるを以もつて大おほき

青苔云々江談  
に後中書王文藻  
詩云白雲似帶  
團山巖青苔如  
衣負巖背云々  
又其歌に「苔衣  
きたるいはほは  
まひらけおきぬ  
きぬ山の帯する  
はなぞ」とあり

生きとし生ける  
もの云々古今  
集序に「花にな  
く鶯水にすむ蛙  
の聲をきけば生  
きとし生る物何  
れか歌を詠まざ  
りける」  
しきねん一或年  
の或を式に誤り  
て音讀せるなら  
んといふ

に和ぐと書いて大和歌と讀めり。しろし召されて候へども、翁が心を御覺せんため候  
な。ワキ詞「いや其儀にてはなし。いでさらば目前の氣色を詩に作つて聞かせう。青苔衣を  
おびて巖の肩にかより、白雲帯に似て山の腰を廻る。心得たるか漁翁。シテ詞「青苔とは青  
き苔の、巖の肩にかよれるが衣に似たるとかや。白雲帯に似て山の腰をめぐる。面白し、  
面白し。日本の歌もたゞ是候よ。苔衣著たる巖はさもなくて、衣著ぬ山の帯をするか  
な。ワキ詞「不思議やな其身は賤しき漁翁なるが、かく心ある詠歌を連ぬる、其身は如何な  
る人やらん。シテ詞「人がましやな名も無き者なり。されども歌をよむ事は、人間のみに限  
るべからず。生きとし生ける物毎に、歌をよまぬは無きものを。ワキ詞「そもや生きとし生  
ける物とは、さては鳥類畜類までも、シテ詞「和歌を詠する其ためし、ワキ詞「和國に於て、  
シテ詞「證歌多し。上歌地謡「花に鳴く鶯、水に住める蛙まで、唐土は知らず日本には、歌  
をよみ候ぞ。翁も大和歌をば、形の如くよむなり。クセそもく鶯の歌をよみたる證歌  
には、孝謙天皇の御宇かとよ、大和國高天寺に住む人の、しきねんの春の頃、軒端の梅

海青樂—樂の名

に鶯の、來りて鳴く聲を聞けば、初陽毎朝來、不遭還本栖と鳴く。文字に寫して是を  
見れば、三十一文字の、詠歌の詞なりけり。シテ詞「初春のあした毎には來れども、地謡「あ  
はでぞ歸る、もとのすみかにと聞えつる、鶯の聲を始めとして、其外鳥類畜類の、人に  
たぐへて歌をよむ、ためしは多く荒磯海の、濱の眞砂の數々に、生きとし生ける物、何  
れも歌をよむなり。

ロンギ地謡「實にや和國の風俗の、實にや和國の風俗の、心有りける海士人の、實に有難き  
習ひかな。シテ詞「とても和國の翫び、和歌を詠じて舞歌の曲、そのいろくを現さん。  
地謡「そもや舞樂の遊びとは、其役々は誰ならん。シテ詞「誰なくとても御覽せよ。我だにあ  
らば此舞樂の、地謡「鼓は波の音、笛は龍の吟ずる聲、舞人は此尉が、老の波の上に立つ  
て、青海に浮みつよ、海青樂を舞ふべしや。シテ詞「蘆原の、地謡「國も動かじ萬代までに。  
(中人)

後シテ詞「山影の、うつるか水の青き海の、地謡「波の鼓の海青樂。(眞ノ序ノ舞)シテ詞「西の海、憶

が原の波間より、地誦現れ出でし住吉の神、住吉の神住吉の、シテ誦現れ出でし住吉の、地誦住吉の、神の力のあらん程は、よも日本をば從へさせ給はじ。速に浦の波、立ち歸り給へ樂天。

石清水一男山八幡宮  
八大龍王一春日  
門神に註す  
八りんりんは  
いんの訛八音は  
金石絲竹範土革

上歌地誦住吉現じ給へば、住吉現じ給へば、伊勢石清水賀茂春日、鹿島三島諏訪熱田、安藝の嚴島の明神は、娑羯羅龍王の第三の姫宮にて、海上に浮んで、海青樂を舞ひ給へば、八大龍王は八りんの曲を奏し、空海に翔りつよ、舞ひ遊ぶ小忌衣の、手風神風に、吹きもどされて唐船は、こよより漢土に歸りけり。實に有難や神と君、實に有難や神と君が代の、動かぬ國ぞ久しき。動かぬ國ぞ久しき。

實盛

梗概 平家の侍齋藤別當實盛の亡靈、なにかし上人の回向を受け、彌陀の來迎に預るよしを作る。後半實盛が最後の合戦を物語る所は、平家物語の本文に據れり。(二番目)

シテ 實盛(前は老翁) ワキ僧  
ワキツレ僧二人

ワキ、サシ誦「それ西方は十萬億土、遠く生ると道ながら、こよも己心の彌陀の國、貴賤群集の稱名の聲、ワキ、ツレ誦「日々夜々の法の場、ワキ誦「けにも誠に攝取不捨の、ツレ誦「誓に誰か、ワキ誦「残るべき。三人上歌誦「獨なほ、佛の御名を尋ね見ん。佛の御名を尋ね見ん。おのおの歸る法の場、知るも知らぬも心ひく、誓の網に漏るべきや。知る人も、知らぬ人をも渡さばや、彼國へゆく法の船、浮むもやすき道とかや。浮むもやすき道とかや。シテ、サシ誦「笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前。あら尊や今日も又、紫雲の立つ

西方十萬億土  
攝取不捨一念佛  
する衆生を佛の  
救ひて捨て給は  
ずとの意  
笙歌遙聞孤雲上  
聖衆來迎落日  
前  
—大江定基入道  
寂照辭世の詩句

天さかる一節の  
枕詞  
盲龜の浮木一盲  
龜大海中に浮木  
を得る事  
傳臺華一三千年  
一たび現ずとい  
ふめてたき花  
前者と共に逢ふ  
事稀なる詠  
閻浮一この世界  
懺悔の廻心一罪  
を恥悔いて思ひ  
償む心

て候ぞや。詞鐘の音、念佛の聲の聞え候。さては聽聞も今なるべし。さなきだに立居苦  
しき老の波の、寄もつかずは法の場に、よそながらもや聽聞せん。詠一念稱名の聲の  
内には、攝取の光明曇らねども、老眼の通路なほ以て明かならず。よし／＼少しは遅  
くとも、こよを去る事遠かるまじや。南無阿彌陀佛。  
ワキ詞「いかに翁、さても毎日の稱名に怠る事なし。されば志の者と見る所に、おこと  
の姿餘人の見る事なし。誰に向つて何事を申すぞと皆人不審し合ひ。今日は御事の名を  
なのり候へ。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰せかな。もとより所は天さかる、鄙人なれば人が  
ましやな、名もあらばこそ名のりもせめ、只上人の御下向、偏に彌陀の來迎なれば、詠か  
しこうぞ長生して、詞此稱名の時節にあふ事、詠盲龜の浮木傳臺華の、花待ち得たる  
心地して、老の幸身に越え、悦の涙袂に餘る。されば此身ながら、安樂國に生ると  
かと、無比の歡喜をなす所に、輪廻忘執の閻浮の名を、又あらためて名のらん事、口惜  
しうこそ候へとよ。ワキ詞「けに／＼翁の申す所ことわり至極せりさりながら、一つは懺悔

長井一武藏  
藤原一加賀

深山の詞花  
集賴政の歌末句  
あらはれけり

の廻心ともなるべし。たゞ御事が名を名のり候へ。シテ詞「さては名のらでは叶ひ候ふまじ  
きか。ワキ詞「中々のこと急いで名のり候へ。シテ詞「さらば御前なる人を除けられ候へ。近  
う参りて名のり候べし。ワキ詞「もとより翁の姿餘人の見る事はなけれども、所望ならば人  
を除くべし、近う寄りて名のり候へ。シテ詞「昔長井の齋藤別當實盛は、此篠原の合戦に  
討たれぬ。聞しめし及ばれてこそ候らめ。ワキ詞「それは平家の侍、弓取つての名將、其  
軍物語は無益、唯御事の名を名のり候へ。シテ詞「いやさればこそ其實盛は、此御前なる  
池水にて鬚髪をも洗はれしとなり。されば其執心残りけるか、今も此あたりの人には、  
幻の如く見ゆると申し候。ワキ詞「さて今も人に見え候か。シテ詠「深山木の其梢とは見え  
ざりし、櫻は花に顯はれたる、老木をそれと御覽ぜよ。ワキ詠「不思議やさては實盛の、昔  
を聞つる物語、人の上ぞと思ひしに、身の上なりける不思議さよ。扱は御事は實盛の、  
其幽靈にてましますか。シテ詞「われ實盛が幽靈なるが、あは冥途にありながら、魄は此世  
にとどまりて、ワキ詠「なほ執心の閻浮の世に、シテ詞「二百餘歳の程は経れども、ワキ詠「浮み

翁さび云々伊勢物語の歌詞

別時の稱名一臨時の念佛

不退一退轉せざる事即ち衰へざる事となり南無といつは云云一善導玄義といふ書の語

もやらで篠原の、シテ謡「池のあだ波よるとなく、ワキ謡「晝とも分かで心の闇の、シテ謡「夢ともなく、ワキ謡「現ともなき、シテ謡「思ひをのみ、上歌篠原の、草葉の霜の翁さび、地謡「草葉の霜の翁さび、人な咎めそ假初に、あらはれ出でたる實盛が、名を洩し給ふなよ、なき世語も、恥とて、御前を立ち去りて、行くかと思れば篠原の、池の邊にて、姿は幻となりて、失せにけり、幻となりて、失せにけり。(中入)

ワキ謡「いざや別時の稱名にて、彼幽霊を弔はんと、三人上歌謡「篠原の、池のほとりの法の水、池のほとりの法の水、深くぞ頼む稱名の、聲すみわたる弔ひの、初夜より後夜に至るまで、心も西へ行く月の、光と共に曇無き、鉦を鳴らして夜もすがら、ワキ謡「南無阿彌陀佛、南無彌陀佛。

後シテ謡「極樂世界に行きぬれば、長く苦界を越え過ぎて、輪廻の故郷隔たりぬ、歡喜の心いくばくぞや。所は不退の所、命は無量壽佛となう、頼もしや念々相續する人は、地謡「念毎に往生す。シテ謡「南無と言つば、地謡「即ち是歸命、シテ謡「阿彌陀と言つば、地謡「其行

修羅一六道の一

夜の錦一末段「故郷へは錦を著て」云々の伏脈也、其條(一三頁)の頭註參照

一念彌陀佛即滅無量罪一寶王論の語

此義を以ての故に、シテ謡「必ず往生を得べしとなり。地謡「ありがたや。

ワキ謡「不思議やな白みあひたる池の面に、幽に浮み寄る者を、見ればありつる翁なるか、甲冑を帶する不思議さよ。シテ謡「埋木の人知れぬ身と沈めども、心の池の言ひがたき、修羅の苦患の數々を、浮めてたばせ給へとよ。ワキ謡「是ほどにまのあたりなる姿言葉を、餘人は更に見も聞きもせで、シテ謡「只上人のみ、明に、ワキ謡「見るや姿も残の雪の、シテ謡「鬢鬚白き老武者なれども、ワキ謡「其出立は花やかなる、シテ謡「粧殊に曇無き、ワキ謡「月の光、シテ謡「燈火の影、上歌地謡「闇からぬ、夜の錦の直垂に、夜の錦の直垂に、萌黄匂の鎧著て、黄金作のたち刀、今の身にてはそれとても、何か寶の、池の蓮の臺こそ寶なるべけれ、けにや疑はぬ、法の教は朽ちもせぬ、黄金の言葉多くせば、などかは至らざるべき。などかは至らざるべき。

シテ、グリ謡「それ一念彌陀佛即滅無量罪、地謡「即ち廻向發願心、心を残す事勿れ。シテ、サン謡「時到つて今宵逢ひ難き御法を受け、地謡「慚愧懺悔の物語、猶も昔を忘れかねて、忍ぶに似



坂東聲一東國訛

樋口の次郎一兼光

氣響風梳新柳髮  
氷消浪洗舊苔髮  
一都良香の詩句  
朗詠集に出づ

たる篠原の、草の陰野の露と消えし、有様語り申すべし。シテ詞「さても篠原の合戦破れしかば、源氏の方の手塚太郎光盛、木曾殿の御前に参りて申すやう、光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ、大將かと思へばつどく勢もなし、又侍かと思へば錦の直垂を著たり、名のれくと責むれども終に名のらず、聲は坂東聲にて候と申す。木曾殿、あつぱれ長井の齋藤別當實盛にてやあるらん、然らば鬚鬚の白髪たるべきが、黒きこそ不審なれ、樋口次郎は見知りたるらんとて召されしかば、樋口参り只一目見て、涙をばらはらと流いて誦あなむざんやな、齋藤別當にて候ひけるぞや、實盛常に申しよは、六十に餘りて軍をせば、若殿原と争ひて、先をかけんも大人氣なし、又老武者とて人々にあなづられんも口惜かるべし、鬚鬚を墨に染め、若やぎ討死すべきよし常々申し候ひしが、誠に染めて候、洗はせて御覽候へと、申しもあへず首を持ち、地誦「御前を立つてあたりなる、此池波の岸に臨みて、水の緑も影うつる、柳の糸の枝たれて、上歌氣響はれて風新柳の髪を梳り、氷消えては浪舊苔の鬚を洗ひて見れば、墨は流れ落ちて、もとの

故郷へは云々一  
史記項羽本紀に  
富貴不歸故郷  
如衣繡夜行

もみぢ葉を―後  
撰集の歌

朱買臣―前漢の  
人家貧なりしが  
後會稽の太守と  
なる

白髪となりにけり。けに名を惜む弓取は、誰もかくこそ有るべけれや。あらやさしやとて、皆感涙をぞ流しける。又實盛が、錦の直垂を著る事、私ならぬ望なり。實盛都を出でし時、宗盛公に申すやう、故郷へは錦を著て、歸るといへる本文あり。實盛國は、越前の者にて候ひしが、近年御領に附けられて、武藏の長井に、居住仕り候ひき、此度北國に、罷り下りて候はど、定めて討死仕るべし、老後の思出これに過ぎじ、御免あれと望みしかば、赤地の錦の、直垂を下し賜はりぬ。シテ誦「然れば古歌にももみぢ葉を、地誦「分けつと行けば錦著て、家に歸ると、人や見るらんと詠みしも、此本文の心なり。されば古への、朱買臣は、錦の袂を會稽山に翻へし、今の實盛は名を北國の巷に揚げ、隠れ無かりし弓取の、名は末代に有明の、月の夜すがら、懺悔物語まうさん。ロンギけにや懺悔の物語、心の水の底清く、濁を残し給ふなよ。シテ誦「其執心の修羅の道廻りくつて又ことに、木曾と組まんとたくみしを、手塚めに隔てられし、無念は今にあり。地誦「つどく兵誰々と、名のる中にも先進む、シテ誦「手塚太郎光盛、地誦「郎等は主を

ぐんでうずよ！  
組んで失すよ  
草摺一鏡の名ど  
こそ、腰の周に  
垂れたり

討たせじと、シテ謡「かけ隔たりて實盛と、地謡「押し並べて組む所を、シテ謡「あつばれおの  
れは、日本一の剛の者と、ぐんでうずよとて、鞍の前輪に押しつけて、首かき切つて捨  
てよけり。地謡「其後手塚太郎、實盛が弓手にまはりて、草摺を疊みあけて、二刀さす所  
を、むすと組んで二疋が間に、どうと落ちけるが、シテ謡「老武者の悲しさは、地謡「軍には  
爲疲れたり、風にちどめる枯木の力も折れて、手塚が下になる所を、郎等は落ち合ひて、  
終に首をば掻き落されて、篠原の土となつて、影も形もなき跡の、影も形も南無阿彌陀  
佛、弔ひてたび給へ。跡弔ひてたび給へ。

### 楊貴妃

梗概

白氏文集に、長恨歌とて唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵幸せし  
事を作れる長編の詩あり。其中に方士が貴妃の魂を仙島  
に求むる條あり。此れを材料として脚色せるものこの  
なり。詩中の語句を點綴して文飾とす。(三番目)

シテ 楊貴妃の靈 ワキ 方士

ワキ次第謡「わが未知らぬ東雲の、わが未知らぬ東雲の、道を何處と尋ねん。詞「定は唐土玄  
宗皇帝に仕へ申す方士にて候。扱も我君政正しく座す中に、色を重んじ艶を専とし給  
ふにより、容色無雙の美人を得給ふ、楊家の娘たるに因て其名を楊貴妃と號す。然れど  
も去子細あつて、馬鬼原にて失ひ申して候。餘に帝歎かせ給ひ、急ぎ魂魄の在所を尋ね  
て參れとの宣旨に任せ、上碧落下黄泉まで尋ね申せども、更に魂魄の在所を知らず候。茲  
に未だ蓬萊宮に至らず候程に、此度蓬萊宮にと急ぎ候。道行謡「尋ね行く幻もがなつてにて

玄宗—明皇帝睿  
宗第三子  
方士—仙術を行  
ふ人  
楊家の娘—楊玄  
琰の女  
上碧落下黄泉—  
天地のこと此語  
長恨歌に據る  
蓬萊宮—東海に  
ありといふ仙島  
太乙真人此に居  
る  
尋ねゆく—源氏  
物語桐壺巻の歌  
下句魂のありか  
をそことしるべ  
く

七寶—諸説あり  
普通には金銀瑠  
璃珊瑚碎瑠璃  
琥珀をいふ  
長生驪山—宮殿  
の名  
太眞殿—楊貴妃  
の魂の住む所

も、幻もがなつてにても、魂の在所は其處としも、波路を分けて行く舟の、仄に見えし島山の、草の假寝の枕ゆふ、常世の國に著きにけり。常世の國に著きにけり。詞急ぎ候程に、蓬萊宮に著きて候。此所にて委く尋ねばやと存じ候。狂言シカク  
ワキ謡「有りし教に随つて蓬萊宮に來て見れば、宮殿盤々として更に邊際もなく、莊嚴巍々としてさながら七寶をちりばめたり。漢宮萬里の粧ひ、長生驪山の有様も、是には更になぞらふべからず。あら美しの所やな。詞又教の如く宮中を見れば、太眞殿と額の打たれたる宮あり。まづ此所に徘徊し、事の由をも伺はばやと存じ候。  
シテ謡「昔は驪山の春の園に、共に詠めし花の色、移れば變るならひとて、今は蓬萊の秋の洞に、ひとり詠むる月影も、濡るゝ顔なる袂かな。あら戀しの古へやな。  
ワキ謡「唐の天子の勅の使、方士是まで参りたり、玉妃は内にましますか。シテ謡「何唐帝の使とは、何しにことに來れるぞと。九華の帳を押し除けて、玉の簾を撥けつよ、ワキ謡「立ち出で給ふ御姿、シテ謡「雲の鬢づら、ワキ謡「花の顔ばせ、シテ、ワキ謡「寂寞たる御眼のうち、

梨花一枝云々—  
このあたり長恨  
歌の語を用ふる  
太液—池の名  
未央—宮殿の名  
六宮—後宮

涙を浮めさせたまへば、上歌地謡「梨花一枝、雨を帯びたる粧の、雨を帯びたる粧の、太液の芙蓉の紅、未央の柳の緑も、是にはいかでか優るべき。實にや六宮の粉黛の、顔色の無きも理や。顔色の無きも理や。  
ワキ謡「如何に申し上げ候、さても后宮世にましくし時だにも、朝政は怠り給ひぬ。況やかくならせ給ひて後、只ひたすらの御歎に、今は御命も危く見えさせ給ひて候。然れば宣旨に任せ是まで尋ね参り、御姿を見奉る事、詔只是君の御志、淺からざりし故と思へば、いよく御痛はしうこそ候へ。シテ謡「けにく、汝が申す如く、今はかひなき身の露の、有るにもあらぬ魂のありかを、是まで尋ね給ふ事、御情には似たれども、謡訪ふにつらさのまさり草、かれぐならば中々の、便の風は恨めしや。又今更の戀慕の涙、舊里を思ふ魂を消す。  
ワキ謡「さてしも有るべき事ならねば、急ぎ歸りて奏聞せん。詞さりながら、御形見の物をたび給へ。シテ謡「是こそありし形見よとて、玉の釵とり出でて、謡方士に與へたびけれ

まさり草—菊の  
異名、掛詞とし  
て用ひ次にかれ  
がれの縁語を違  
く

二星一牽牛織女  
天に在らば云々  
一之れ亦長恨歌  
の語  
比翼の鳥は二  
鳥片羽宛ありて  
一體となる  
連理の枝一木  
相接して一樹と  
なれる也、夫婦  
の契を譬ふ

ば、ワキ詞「いやとよ是は世の中に、類有るべき物なれば、いかでか信じ給ふべき。御身と君と人知れず、契り給ひし言の葉あらば、謠それをしるしに申すべし。シテ詞「實にくは是も理なり。思ひぞ出づる我も又、謠其初秋の七日の夜、二星に誓ひし言の葉にも、地謡「天に在らば願はくは、比翼の鳥とならん、地に在らば願はくは、連理の枝とならんと、誓ひし言を密に傳へよや。私語なれども、今洩れ初むる涙かな、上歌されども世の中の、されども世の中の、流轉生死の習とて、其身は馬鬼に留まり、魂は仙宮に至りつよ、比翼も友を戀ひ、獨翅を片敷き、連理も枝朽ち、忽ち色を變ずとも、同じ心の行方ならば、終の逢ふ瀬を頼むごと語り給へや。

ワキ「謠」さらばといひて出舟の、伴ひ申し歸るさと、思はどりれしさの、猶如何ならん其心。シテ謠「我は又なに中々に三重の帯、廻り逢はんも知らぬ身に、よしさらば暫し待て、有りし夜遊をなすべし。地謡「實にや驪山の宮の内、月の夜遊の羽衣の曲、シテ謠「其かざしにて舞ひしとて、地謡「又取りかざし。シテ謠「さす袖の、地謡「驚破霓裳羽衣の曲、驚破霓裳

胡蝶の舞一舞樂  
の名、莊子の胡  
蝶の夢の故事を  
含めたり

羽衣の曲、そとろに濡るゝ袂かな。シテ謠「何事も夢幻の戯れや。地謡「あはれ、胡蝶の舞ならん。

二十五有二十  
五所の世界死後  
もこゝを廻りて  
生死盡きずと也  
五衰一天人命終  
の時に現るゝ衰  
滅の相諸説あり  
四州一四大部洲  
ともいふ東弗于  
速西瞿耶南閼浮  
提北鬱單越  
北州一四州の一

世の中にさらぬ  
別の一伊勢物語  
の歌末句、なく  
もがな千代もと  
祈る人の子のた  
め

シテ、グリ謠「それ過去遠々の昔を思へば、いつを衆生の始と知らず。地謡「未來永々の流轉、更に生死の終もなし、シテ、サシ謠「しかるに二十五有の内、何か生者必滅の理に洩れん。地謡「先天上の五衰より、須彌の四州のさまぐくに、北州の千年終に朽ちぬ。シテ謠「況や老少不定の境、地謡「歎きの中の歎きとかや。シテ、グセ謠「我も其かみは、上界の諸仙たるが、往昔の因ありて、假に人界に生れ来て、楊家の深窓に養はれ、いまだ知る人なかりしに、君聞き召されつよ、急ぎ召し出だし、后宫に定め置き給ひ、偕老同穴のかたらひも、縁盡きぬれば、徒に、又此鳥にたゞ獨、歸り來りてすむ水の、あはれはかなき身の露の、たまさかに逢ひ見たり。靜に語れ憂き昔。シテ謠「さるにても、思ひ出づれば恨ある、地謡「其文月の七日の夜、君とかはせし睦言の、比翼連理の言の葉も、かれぐになる私語の、笹の一夜の契だに、名残は思ふならひなるに、ましてや年月、馴れて程經る世の中に、さ

蓬が島一蓬來のこと  
島つ鳥一鶴の枕  
詞、浮世のうに  
係る

らぬ別のなかりせば、千代も人には添ひてまし。よしそれとても遁れ得ぬ、會者定離ぞ  
と聞く時は、逢ふこそ別なりけれ。羽衣の曲、(序ノ舞)シテ謡「羽衣の曲、稀にぞ返す少女子  
が、地謡「袖打ち振れる心しるや。心しるや。シテ謡「戀しき昔の物語、地謡「戀しき昔の物語、  
盡さば月日も移り舞の、しるしの釵又賜はりて、暇申してさらばとて、勅使は都に歸  
りければ、シテ謡「さるにてもさるにても、地謡「君には此世逢ひ見ん事も、蓬が島つ鳥  
浮世なれども戀しや昔、はかなや別の、常世の臺に、伏し沈みてぞ留まりける。

玉葛

梗 概

これは源氏物語に基ける作なり。玉葛内侍は夕顔の上の子なるが、四歳の折乳母の夫太宰少貳に伴はれて筑紫に下りしが、年経て後少貳死したれば乳母は玉葛を伴ひて都に上り、初瀬の觀音に詣づ。たま／＼夕顔の侍女たりし右近とめぐり會ふ。かくて玉葛は源氏の君に迎へ取られ、六條院に住む。後内侍となり、又髭黒大將の妻となる。この曲は玉葛の幽霊現れて昔語をなし、行脚僧の巾ひを受けて成佛するよしに作る。(四番目)

シテ 玉葛内侍(前は女舟人) ワキ 僧

「是は諸國一見の僧にて候。我此程は南都に候ひて、靈佛靈社残りなく拜みめぐりて候。又是より初瀬詣と志して候。道行詣の葉の、名におふ宮の古ことを、名におふ宮の古ことを、思ひつゞけて行末は、石上寺ふし拜み、法のしるしや三輪の杉、山本ゆけば程もなく、初瀬河にも著きにけり。初瀬河にも著きにけり。詞 急ぎ候程に、初瀬川に著

初瀬一長谷の觀音  
檜の葉の一古今  
集文屋有季の歌  
初句神無月時雨  
ふりおける末句  
古ことぞこれ萬  
葉集の事をいふ  
三輪の杉一古今  
集に「我宿は三  
輪の山本隠しく  
はとむらひきま  
せ杉たてる門」  
とあり、しるし  
つといふ

舟人も一玉葛の  
歸京する折少貳  
の頃の上める歌  
末句聲のきこゆ  
る

海士小舟一初瀬  
の枕詞

きて候。心靜に参詣申さうするにて候。

一聲誦程もなき、舟の泊や初瀬川、のほりかねたる氣色かな。舟人も誰を戀ふとか大島の、うらかなしげに聲たてよ、こがれ來にける古の、果しもしさや白波の、よるべいづくぞ心の月の、御舟はそこ果しもなし。下歌只われひとり水刷棹、しづくも袖のいろにのみ、上歌暮れてゆく、秋の涙か村時雨、秋の涙か村時雨、古河野邊のさみしくも、人や見らん身の程も、なほ浮舟の楫を絶え、綱手かなしき類かな。綱手かなしき類かな。

ワキ詞「不思議やな此河は山川の、さも浅くしてしかも漲る岩間づたひを、小さき舟に棹さす人を見れば女なり。そも御身は如何なる人にてましますぞ。シテ詞「是は此初瀬寺に詣で來る者なり。又此川は所から、誦名に流れたる海士小舟、初瀬の川とよみおける、其河の邊のえにしあるに、不審はなさせ給ひそとよ。ワキ詞「あら面白の言葉やな、けに海士小舟初瀬とは、古き詠めの言葉なるべしさりながら、又其類も浪小舟、誦さして謂のあるやらん。シテ誦「いや何事のそれよりも、先御覽せよ折柄に、上歌地誦「ほの見えて、色づく木

二本杉一古今集  
の旋頭歌に「初  
瀬川古河野邊に  
二本ある杉年を  
経て又も逢見ん  
二本ある杉」

木の初瀬山、色づく木々の初瀬山、風もうつろふ薄雲に、日影も匂ふ一しほの、さぞな氣色もかく河の、浦わの眺めまで、けに類なや面白や。川音聞えて里つとき、奥もの深き谷の戸に、つらなる軒を絶々の、霧間に残す夕かな。霧間に残す夕かな。かくて御堂に参りつよ、かくて御堂に参りつよ、補陀洛山も目のあたり、四方のながめも妙なるや、紅葉のいろに常磐木の、二本の杉に著きにけり。二本の杉に著きにけり。

シテ詞「是こそ二本の杉にて候へ能々御らん候へ。ワキ詞「さては二本の杉にて候ひけるぞや。誦「二本の杉の立所を尋ねずは、古河のべに君を見ましやとは、何とよまれたる古歌にて候ぞ。シテ詞「是は光源氏のいにしへ、玉葛の内侍此初瀬に詣で給ひしを、右近とかや見奉りて詠みし歌なり。誦「共にあはれと思召して御跡を、よく弔ひ給ひ候へ。

クリ地誦「けにや有りし世を、猶夕顔の露の身の、消えにしあとはなかくに、何なでしこの形見も憂し。シテサシ誦「あはれ思ひの玉葛、かけてもいさや知らざりし、地誦「心盡しの木の間の月、雲居のよそにいつしかと、鄙の住居の憂きのみか、さてしも堪へてあるべき身

松浦瀨云々一佐  
用姫の故事  
浮島を此歌玉  
葛の伴へる兵部  
の君といふ女の  
詠めるなり末句  
知らずもあるか  
な  
響の灘一筑前の  
海  
年も經ぬ一新古  
今集の歌末句よ  
その夕暮

早くも知るや！  
右近の歌の返し  
に玉葛の詠める  
瀬川早くの事は  
知らねども今日  
のあふせにみさ  
へ流れぬとあり

を、シテ謡「猶しをりつる人心の、地謡」あらし浪風立ちへだて、タタよりとなれば早舟に、  
乗り後れじと松浦瀨、唐船を慕ひしに、心ぞかはる我はたど、浮島を、漕ぎ離れても  
行く方や、いづく泊と白波に、響の灘も過ぎ、思に障る方も無し。かくて都の内とても、  
われは浮きたる舟のうち、なほや憂き目を水鳥の、路にまどへる心地して、たづきも知  
らぬ身の程を、思ひ歎きて行き悩む、足曳の大和路や、唐までも聞ゆなる、初瀬の寺に  
詣でつよ、シテ謡「年も經ぬ、祈る契は初瀬山、地謡」尾上の鐘のよそにのみ、思ひ絶えにし  
いにしへ、古の、人に二度ふた本の、杉のたちどを尋ねずは、古川のべと詠めける、今日の逢ふ  
瀬も同じ身を、思へば法の衣の、玉ならば玉葛、迷ひを照し給へや。  
ロンギ地謡「けに古き世の物語り、聞けば涙もこもり江に、こもれる水のおはれかな。シテ謡「あ  
はれとも、思ひは初めよ初瀬川、早くも知るや浅からぬ、地謡」縁にひかるよ、シテ謡「心と  
て、地謡」たど頼むぞよ法の人、弔ひ給へ我こそは、涙の露の玉の名と、名のりもやらず  
なりにけり。名のりもやらずなりにけり。(中入)

戀ひわたる一源  
氏の君の歌二句  
それなれど  
つくも髪一老人  
の乱れたる髪を  
いふ、伊勢物語  
の歌に「もくと  
せに一とせ足ら  
ぬつくも髪我を  
戀ふらし面影に  
見ゆ」

ワキ詞「さては玉葛の内侍假に現れ給ひけるぞや。謡「たとひ業因おもくとも、上歌「照らさざ  
らめや日の光、照らさざらめや日の光、大慈大悲の誓ある、法の燈明かに、亡き影い  
ざや弔はん。亡き影いざや弔はん。  
後シテ謡「戀ひわたる、身はそれならで玉葛、いかなるすぢを尋ね來ぬらん。尋ねても、法  
の教に逢はんと、心ひかるよ一筋に、其まよならで玉葛の、亂るよ色は恥かしや。つ  
くも髪、つくも髪、我や戀ふらし面影に、地謡「立つやあだなる塵の身は、シテ謡「拂へど拂  
へど執心の、地謡「ながき闇路や、シテ謡「黒髪の、地謡「飽かぬやいつの寢亂髪、シテ謡「むす  
ほほれゆく思ひかな。  
地謡「けに妄執の雲霧の、けに妄執の雲霧の、迷ひもよしや憂かりける、人を初瀬の山嵐、  
はけしく落ちて、露も涙もちりぐくに秋の葉の身も、朽ち果てぬ恨めしや。シテ謡「恨は人  
をも世をも、地謡「恨は人をも世をも、思ひ思はじ唯身ひとつの、報いの罪やかすくの、  
憂き名に立ちしも懺悔の有様、あるひは湧き返り、岩もる水の思ひに咽び、あるひは焦

螢に亂れつる影  
一兵部卿宮玉葛  
に通ひし折源氏  
の君螢を玉葛の  
前に放ちしこと  
螢の巻にあり

るよや身より出る、玉と見るまで包めども、螢に亂れつる、影もよしなや恥かしやと、此  
妄執をひるがへす、心は眞如の玉葛、心は眞如の玉葛、長き夢路は覺めにけり

融とほ

梗 源融は嵯峨天皇の御子にして、貞觀の頃左大臣たり。館を  
河原院といへり。傳ふらく、池をほり水を湛へて、陸奥の鹽  
釜の浦を模し、而も海水を難波より運ばせ、鹽焼くさま迄も  
なしたりといふ。後大臣の靈、この院に住みしともいふこ  
と今昔物語に見ゆ。この曲は即ち融の幽靈を出してあり  
し昔を物語らしめたるなり。(五番目)

シテ 融(前は鹽波の尉) ワキ 僧

ワキ詞「是は東國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に、此度思ひ立ち都に上  
り候。下歌思ひ立つ心ぞしるべ雲を分け、舟路を渡り山を越え、千里も同じ一足に、千  
里も同じ一足に、上歌夕を重ね朝毎の、夕を重ね朝毎の、宿の名残も重なりて、都に早く  
著きにけり。都に早く著きにけり。詞 急ぎ候程に、是は早都に著きて候。此あたりをば  
六條河原院とやらん申し候。暫く休らひ一見せばやと思ひ候。

六條河原院一拾  
茶抄に六條坊門  
南萬里小路東



陸奥はいづくは  
あれど古今集  
歌下句浦こ舟  
の綱手かなしも  
水の面に古今  
集の句末句最  
中なりける  
諸白髮一友白髮  
に同じ夫婦老體  
となること

一、鹽竈の、恨みて渡る老が身の、よるべもいさや定めなき、心も澄める水の面に、照る月  
なみを數ふれば、今宵ぞ秋の最中なる、實にや移せば鹽竈の、月も都の最中かな。下歌秋  
は半身は既に、老い重なりて諸白髮、上歌、雪とのみ積りぞ來ぬる年月の、積りぞ來ぬる  
年月の、春を迎へ秋を添へ、時雨ると松の風までも、我が身の上と汲みて知る、汐馴衣  
袖寒き、浦わの秋の夕かな。浦わの秋の夕かな。

ワキ詞「如何にこれなる尉殿、御身は此あたりの人か。シテ詞「さん候此所の汐汲にて候。  
ワキ詞「不思議やことは海邊にてもなきに、汐汲とは誤りたるか尉殿。シテ詞「あら何ともな  
や。さてことをば何處と知し召されて候ぞ。ワキ詞「此所をば六條河原院とこそ承りて候へ。  
シテ詞「河原院こそ鹽竈の浦候よ。融の大臣陸奥の千賀の鹽竈を、都の内に移されたる  
海邊なれば、謠名に流れたる河原院の、河水をも汲め池水をも汲め、こと鹽竈の浦人な  
れば、汐汲などおほさぬぞや。ワキ詞「實にく陸奥の千賀の鹽竈を、都の内に移された

籬が島一鹽竈の  
浦の沖にあり

孤舟に歸る一三  
體詩に五湖歸去  
孤舟月  
賈島一唐代の詩  
人  
推すも敵くも！  
賈島が僧敵月下  
門の敵を始め推  
とし後敵と改む  
るにつきて苦心  
せること

る事承り及びて候。さてはあれなるは籬が島候か。シテ詞「さん候あれこそ籬が島候  
よ。融の大臣常に御舟を寄せられ、御酒宴の遊舞さまぐなりし所ぞかし。や、月こそ出  
でて候へ。ワキ詞「實にく月の出でて候ぞや。あの籬が島の森の梢に、鳥の宿し囀りて、  
詩文に移る月影までも、謠、孤舟に歸る身の上かと、思ひ出でられて候。シテ詞「何と只今の  
面前の景色が、御僧の御身に知らるよとは、若も賈島が言葉やらん。謠、鳥は宿す池中の  
樹、ワキ詞「僧は敲く月下の門、シテ詞「推すも、ワキ詞「敲くも、シテ詞「古人の心、シテワキ詞「今  
目前の秋暮にあり。上歌地謠「實にや古へも、月には千賀の鹽竈の、月には千賀の鹽竈の、  
浦わの秋も半にて、松風も立つなりや。霧の籬の島隠れ、いざ我も立ち渡り、昔の跡を  
陸奥の、千賀の浦わを詠めんや。千賀の浦わを詠めん。ワキ詞「鹽竈の浦を都の内に移され  
たる謂御物語り候へ。シテ詞「嵯峨天皇の御宇に、融の大臣陸奥の千賀の鹽竈の眺望を聞  
し召し及ばせ給ひ、此所に鹽竈を移し、あの難波の御津の浦よりも、日毎に潮を汲ませ、  
ことにて鹽を焼かせつよ、一生御遊の便とし給ふ。然れども其後は相續して甞ぶ人も

君まさて古今集の歌

しほじみ永く辛苦すること

音羽山清水寺の山  
音羽山云々古  
今集在原元方の  
歌末句年をよる  
かな

無ければ、浦は其まよ干汐となつて、諸池邊に淀む溜水は、雨の残りの古き江に、落葉散り浮く松陰の、月だに澄まで秋風の、音のみ残るばかりなり。されば歌にも、君まさで煙絶えにし鹽竈の、うらさみしくも見え渡るかなと、貫之も詠めて候。地謡「實にや眺むれば、月のみ満てる鹽竈の、浦寂しくも荒れはつる、跡の世までもしほじみて、老の波も歸るやらん。あら昔戀しや。上歌戀しや戀しやと、慕へども歎けども、かひもなきさの浦千鳥、音をのみ鳴くばかりなり。音をのみ鳴くばかりなり。

ワキ詞「如何に尉殿 見え渡りたる山々は皆名所にてぞ候らん御教へ候へ。シテ詞「さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし。ワキ詞「先あれに見えたるは音羽山候か。シテ詞「さん候 あれこそ音羽山候よ。ワキ詞「音羽山音に聞きつと逢坂の、關のこなたにとよみたれば、逢坂山も程近うこそ候らめ。シテ詞「仰せのごとく關のこなたにとは詠みたれども、あなたにあたれば逢坂の、山は音羽の峯に隠れて、此邊よりは見えぬなり。ワキ詞「さてさて音羽の嶺つとき、次第々々の山竝の、名所々々を語り給へ。シテ詞「語りも盡さじ言

歌の中山清閑寺  
清水寺の南  
今熊野同観音  
あり

藤の森伏見の  
北  
夕されば千載  
集俊成卿の歌末  
句深草の里

大原や一葉平の  
歌下句神代の事  
も思ひ出づらめ

田子桶なり駿  
河の地名に言掛  
く  
東からげ一橋を  
からぐるこ

の葉の歌の中山清閑寺、諸今熊野とはあれぞかし。ワキ詞「さて其末につどきたる、里一村の森の木立、シテ詞「それをしるべに御覽せよ。まだき時雨の秋なれば、紅葉も青き稻荷山、ワキ詞「風も暮れ行く雲の端の、梢も青き秋の色。シテ詞「今こそ秋よ名にしおふ、春は花見し藤の森、ワキ詞「緑の空も影青き、野山につどく里は如何に。シテ詞「あれこそ夕されば、ワキ詞「野邊の秋風、シテ詞「身にしみて、ワキ詞「鶉鳴くなる、シテ詞「深草山よ。地謡「木幡山、伏見野、竹田、淀鳥羽も見えたりや。ロンギ詠めやる、其方の空は白雲の、はや暮れ初むる遠山の、嶺も木深く見えたるは、如何なる所なるらん。シテ詞「あれこそ大原や、小鹽の山も今日こそは、御覽じ初めつらめ。猶々問はせ給へや。地謡「聞くにつけても秋の風、吹く方なれや峰つとき、西に見ゆるは何處ぞ。シテ詞「秋も早、秋も早、半更け行く松の尾の、嵐山も見えたり。地謡「嵐史け行く秋の夜の、空澄み上る月影に、シテ詞「さす汐時もはや過ぎて、地謡「隙もおし照る月にめで、シテ詞「興に乗じて、地謡「身をば實に、忘れたり秋の夜の、長物語よしなや、まづいざや汐を汲まんとて、持つや田子の浦、東からけの汐

望汐一十五夜の満潮

衣、汲めば月をも、袖に望汐の、汀に歸る波のよるの、老人と見えつるが、汐雲にかき紛れて、跡も見えずなりにけり。跡をも見えすなりにけり。(中入) ヲヤ上歌謡「磯枕、苔の衣を片敷て、苔の衣を片敷て、岩根の床に夜もすがら、猶も奇特を見るやとて、夢待ちがほの旅寝かな。夢待ちがほの旅寝かな。

白衣の袖一天人のこゝと雪を廻らす一廻雪といふ舞曲  
曲水一三月上巳の宴

後シテ謡「忘れて年を経しものを、又いにしへに歸る波の、満つ鹽竈の浦人の、今宵の月を陸奥の、千賀の浦わも遠き世に、其名を残す大臣、融の大臣とは我が事なり。われ鹽竈の浦に心を寄せ、あの籬が島の松陰に、明月に舟を浮め、月宮殿の白衣の袖も、三五夜中の新月の色、千重ふるや、雪を廻らす雲の袖、地謡「さすや桂の枝々に、シテ謡「光を花と散らす粧ひ、地謡「こゝにも名に立つ白河の波の、シテ謡「あら面白や曲水の盃、地謡「浮けたり浮けたり遊舞の袖。(草舞)ロンギあら面白の遊樂や。そも明月の其中に、まだ初月の宵々に、影も姿も少なきは、如何なる謂なるらん。シテ謡「それは西岫に、入日のいまだ近ければ、其影に隠さると、たとへば月の有る夜は、星の薄きが如くなり。地謡「青陽の春の始には、

一輪一月のこゝ

シテ謡「霞む夕の遠山、地謡「黛の色に三日月の、シテ謡「影を舟にも譬へたり。地謡「又水中の遊魚は、シテ謡「釣と疑ふ、地謡「雲上の飛鳥は、シテ謡「弓の影とも驚く。地謡「一輪も降らず、シテ謡「萬水も昇らず、地謡「鳥は地邊の樹に宿し、シテ謡「魚は月下の波に伏す。地謡「聞くとも飽かじ秋の夜の、シテ謡「鳥も鳴き、地謡「鐘も聞えて、シテ謡「月もはや、地謡「影傾きて明方の、雲となり雨となる、此光陰に誘はれて、月の都に入り給ふ粧、あら名残惜しの面影や、名残惜しの面影。

内五

養老

梗

概

美濃國當耆郡多度山美泉の事、續日本紀元正天皇の詔に見え、孝子養老の事、十訓抄などに記す。この曲は勅使養老の瀧に向はれしに、山神出現して、薬の水を捧ぐる事を作る。酒及び菊水の話事を以て文飾とす。時代を雄略天皇の御代とし、靈泉を本巢郡とせるは肯ひ難し。(脇能)

シテ 山神の靈(前は父) ツレ子

ワキ 勅使

三人次第謠「風も靜に榎の葉の、ワキ次第謠風も靜に榎の葉の、ワキ詞抑是は雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。さても濃州本巢郡に、不思議なる泉出でくる由を奏聞す、急ぎ見て参れとの宣旨に任せ、ワキ道行謠只今濃州本巢郡へと急ぎ候。三人道行謠「治まるや、國

四方に道ある一  
交通の開けたる  
ことにて君徳の  
治きを併せ云ふ

富み民も豊にて、國富み民も豊にて、四方に道ある關の戸の、秋津島根やあまざかる、鄙の境に名を聞きし、美濃の中道ほどなく、養老の瀧に著きにけり、養老の瀧に著きにけり。

茅店の云々一三  
體詩に鶏聲茅店  
月人迹板橋霜  
與山の深谷の下  
のためし一南陽  
縣縣の菊水延齡  
の故事  
長生の家一和漢  
朗詠集に長生殿  
裏春秋富不老門  
外日月運

一聲「謠」年を経し、美濃の御山の松陰に、猶澄む水の緑かな。ツレ謠「通ひなれたる老の坂、シテ、ツレ謠」行く事易き心かな。シテ、サシ謠「故人眠早く覺めて、夢は六十の花に過ぎ、シテ、ツレ謠」心は茅店の月に嘯き、身は板橋の霜に漂ひ、白頭の雪は積れども、老を養ふ瀧川の、水や心を清むらん。下歌「奥山の、深谷の下のためしかや、流を汲むとよも絶えじ、流を汲むとよも絶えじ。上歌「長生の家にごそ、長生の家にごそ、老せぬ門はあるなるに、是も年ふる山住の、千世のためしを松陰の、岩井の水は薬にて、老を延べたる心こそ、猶行く末も久しけれ、猶行く末も久しけれ。」  
ワキ詞「いかに是なる老人に尋ねべき事の候。シテ詞「こなたのことにて候か何事にて候ぞ。ワキ詞」お事は聞き及びたる親子の者か。シテ詞「さん候是こそ親子の者にて候へ。ワキ詞」是

忘れ水一攝津ワ  
大和播磨の名所  
こゝは唯老を忘  
るといふ意

は帝よりの勅使にてあるぞとよ。シテ詞「ありがたや雲居遙かに見そなはず、我大君の詔を、賤き身として今承ることのありがたさよ。是こそ親子の民にて候へ。ワキ詞」さて此本巢郡に、不思議なる泉出でくる由を奏聞す、急ぎ見て参れとの宣旨に任せ、是まで勅使を下さるとなり。先々養老と名づけ初めし、謂を委しく申すべし。シテ詞「さん候是に候は此尉が子にて候が、朝夕は山に入り薪を採り、我らを育み候ふ處に、ある時山路の疲れにや、此水を何となく掬びて呑めば、世の常ならず心も涼しく疲れも助かり、ツレ謠「さながら仙家の薬の水も、かくやと思ひ知られつよ、やがて家路に汲み運び、父母に是を與ふれば、シテ詞「呑む心よりいつしかに、やがて老をも忘れ水の、ツレ謠「朝寢の床も起き憂からず、シテ、ツレ謠「夜の寢覺も淋しからで、勇む心は眞清水の、絶えずも老を養ふ故に、養老の瀧とは申すなり。ワキ謠「けに〜聞けばありがたや。さて〜今の薬の水、此瀧川の内にても、とりわき在所のあるやらん。シテ詞「御覽候へ此瀧壺の、少し此方の岩間より、出でくる水の泉なり。ワキ謠「さては是かと立ちより見れば、實に潔き山の

玉水一瀧をほめていふ  
水上すめる一君の明かなること

生薬一不死の薬  
夫れ行く川の云云一鴨長明の方丈記の文句を引く

養の竹葉一白氏文集に養頭竹葉經春熟とあり、竹葉は酒の異名、晉の七賢一嵇康阮籍阮咸、向秀劉伶王戎、山濤を竹林七賢といふ、鸚鵡一孟の名

井の、シテ謠「底澄み渡るさどれ石の、巖となりて苔のむす、ワキ謠「千代に八千代のためしまでも、シテ謠「まのあたりなる薬の水、ワキ謠「真に老を、シテ謠「養ふなり。上歌地謠「老をだに養はど、まして盛の人の身に、薬とならばいつまでも、御壽命も盡きまじき、泉ぞめでたかりける。實にや玉水の水上すめる御代ぞとて、流れの末の我らまで、豊にすめる嬉さよ。豊にすめる嬉さよ。

クリ地謠「實にや尋ねても、蓬が島の遠き世に、今のためしも生薬、水また水はよも盡きじ。シテサシ謠「夫れ行く川の流れば絶えずして、しかも本の水にはあらず、地謠「流れに浮む泡沫は、かつ消えかつ結んで、久しく澄める色とかや。シテ謠「殊にけに是はためしも夏山の、地謠「下行く水の薬となる、奇瑞を誰か習ひ見し。下歌いざや水を掬ばん。いざく水を掬ばん。上歌「養の竹葉は、養の竹葉は、陰や緑を重ぬらん。其外籬の荻花は、林葉の秋を汲むなりや。晉の七賢が樂み、劉伯倫が翫び、只此水に残れり。汲めや汲め御薬を、君の爲に捧げん。曲水に浮ぶ鸚鵡は、石にさはりて遅くとも、手にまづ取りて夜

彭祖一列仙傳萬世統譜等に、陸終氏の子孫より夏を経て殷末に及び、壽八百歳なる事見ゆ其養ひの露のまに一古今集にぬれては山路の菊の露のまにいつか千年を我は經にけん

もすがら、馴れて月を汲まうよや。馴れて月を汲まうよ。

ロンギ地謠「山路の奥の水にては、何れの人か養ひし。シテ謠「彭祖が菊の水、滴る露の養ひに、仙徳を受けしより、七百歳を経る事も、薬の水と聞く物を、地謠「けにや薬と菊の水、其養ひの露のまに、シテ謠「千年を経るや天地の、地謠「開けし種の草木まで、シテ謠「花咲き實なることわり、地謠「其折々といひながら、シテ謠「只これ雨露の恵にて、地謠「養ひ得ては、花の父母たる雨露の、翁も養はれて、此水に馴衣の、袖ひぢて掬ふ手の、影さへ見ゆる山の井の、實にも薬と思ふより、老の姿も若水と、見るこそ嬉しかりけれ。

ワキ詞「實にありがたき薬の水、急ぎ歸りて我君に、奏聞せんこそ嬉しけれ。シテ詞「翁もかかる御惠廣き御影を尊めば、ワキ謠「勅使も重ねて感涙して、かよる奇特に逢ふことよと、上歌地謠「云もあへねば不思議やな、云もあへねば不思議やな、天より光かよやきて、瀧の響も聲すみて、音楽聞え花降りぬ、是只事と思はれず。これ只事と思はれず。(中入)後シテ謠「ありがたや治まる御代の習ひとて、山河草木おだやかに、五日の風や十日の、天

楊柳觀音一養老寺の本尊

影向一神の示現すること

君は船云々一荀子の語

上澄む時は一荀子に君子養源清則流清矣

が下照る日の光、曇はあらし玉水の、薬の泉はよも盡きじ、あらありがたの奇瑞やな。  
 地謡「是とても誓は同じ法の水、盡せぬ御代を守るなる、シテ謡「我は此山山神の宮居、地謡「又  
 は楊柳觀音菩薩、シテ謡「神といひ、地謡「佛といひ、シテ謡「只是水波の隔てにて、地謡「衆生  
 濟度の方便の聲、シテ謡「峯の嵐や、谷の水音滔々と、地謡「拍子を揃へて音楽の響、瀧つ心  
 を澄ましつよ、諸天來去の影向かな。(神舞)  
 シテ謡「松陰に千代をうつせる緑かな。地謡「さも潔き山の井の水、山の井の水。山の井  
 の、シテ謡「水滔々として浪悠々たり。治る御代の君は船、地謡「君は船、臣は水、水よく  
 船を浮め浮めて、臣よく君を仰ぐ御代とて、幾久しさも盡きせじや盡きせじ。君に引か  
 るよ玉水の、上澄む時は下も濁らぬ瀧つ水の、浮き立つ浪の返すくも、よき御代な  
 れや、よき御代なれや、萬歳の道に歸りなん、萬歳の道に歸りなん。

清經

梗 梗

平清經は重盛の三男にて左近衛中將たりし人なり。壽永二年豊前柳が浦にて入水す。初め深く契りし女房あり、都落のをりこれを伴はんとしたれども得ず、遂より鬢髪を切りて形見としたるを、其後女房今は形見もよしなしとてそを返して歌を添へて曰く、見るからに心づくしの髪なればうさにぞ返すもとの社にと。此曲平家物語に據り、清經の靈の女房の許に現れて物語る様を作る。この種の曲を公達物と云ふ。(二番目)

シテ 清經の靈 ツレ 女 ワキ 淡津三郎

ワキ次第謡「八重の汐路の浦の波、八重の汐路の浦の波、九重にいざや歸らん。詞「是は左中將清經の御内に仕へ申す、淡津三郎と申す者にて候。さても頼み奉り候、清經は、過ぎにし筑紫の軍に打負け給ひ、都へはとて歸らぬ道芝の、雑兵の手にかゝらんよりはと思召しけるが、豊前國柳が浦の沖にして、更け行く月の夜船より、身を投げ空しく爲

過ぎにし筑紫の軍一平家物語に平家は緒方三郎惟義が三萬餘騎の勢にて既に寄すと聞えしかば取る物も取取へず太宰府をこそ落ち給へとある時の事  
 更け行く月の一同書に清經は或る月の夜船ばたに立出て横笛音取朗詠して遊ばされけるが、ながらへはつべき身にも非ずとて靜に經讀み念佛して海にぞ沈み給ひけるとあり

り給ひて候。又船中を見奉れば、御形見に鬢の髪を残し置かれて候間、かひなき命助かり、御形見を持ち、只今都へ上り候。道行謠此程は、鄙の住居に馴れく、鄙の住居に馴れく、たましく歸る故郷の、昔の春に引きかへて、今は物憂き秋暮れて、はや時雨ふる旅衣、しをると袖の身のはてを、忍びくりに上りけり。忍びくりに上りけり。詞急ぎ候程に、是は早都に著きて候。如何に案内申し候、筑紫より淡津三郎が参りて候それく御申し候へ。ツレ詞「何淡津三郎と申すか。人までもなし此方へ來り候へ。さて只今は何の爲の御使にてあるぞ。ワキ詞「さん候。面目もなき御使に参りて候。ツレ詞「面目もなき御使とは、若し御遁世にてあるか。ワキ詞「いや御遁世にても御座なく候。ツレ詞「過ぎにし筑紫の軍にも、御恙なきとこそ聞きつるに。ワキ詞「さん候。過ぎにし筑紫の軍にも、御恙御座なく候ひしが、清經心に思召すやうは、都へはととも歸らぬ道芝の、雑兵の手にかよらんよりはと思召されけるが、豊前國柳が浦の沖にして、更け行く月の夜舟より、身を投げ空しくなり給ひて候。ツレ謠「なに身をなけ空しくなり給ひたるとや。恨めし

や。せめては討たれ若は又、病の床の露とも消えなば、力無しとも思ふべきに、我と身を投げ給ふ事、儂りなりつるかねことかな。實に怨みても其かひの、なき世となるこそ悲けれ。下歌地謠「何事もはかなかりける世の中の、上歌此程は、人目をつよむ我が宿の、人目をつよむ我が宿の、垣ほの薄吹く風の、聲をも立てず忍音に、泣くのみなりし身なれども、今は誰をか憚りの、有明月の夜たどとも、何か忍ばん時鳥、なをも隠さで鳴く音かな。名をも隠さで鳴く音かな。ワキ詞「又船中を見奉れば、御形見に鬢の髪を残し置かれて候。是を御覽じて御心を慰められ候へ。ツレ謠「是は中將殿の黒髪かや。見れば目もくれ心消え、猶も思のまさるぞや。見る度に心盡しの髪なれば、うさにぞかへす本の社にと、地謠「手向けかへして夜もすがら、涙と共に思寝の、夢になりとも見え給へと、寝られぬに傾くる、枕や戀を知らすらん。枕や戀を知らすらん。ツレ謠「聖人に夢なし誰あつて現と見る、眼裡に塵有つて三界窄く、心頭無事にして一



閨浮一現世  
轉寢に古今集  
小町の歌  
いにしへ一人女  
を指す  
くねる恨みす  
ぬること

生廣し。實にや憂しと見し世も夢、辛しと思ふも幻の、いづれ跡ある雲水の、往くも  
歸るも閨浮の故郷に、たどる心のはかなさよ。轉寢に戀しき人を見てしより、夢てふも  
のは頼み初めてき。如何にいにしへ人、清經こそ参りて候へ。ツレ謡「不思議やなまどろむ  
枕に見え給ふは、實に清經にてましませども、正しく身を投げ給へるが、夢ならで如何  
で見ゆべきぞ。よし夢なりとも御姿を、見みえ給ふぞ有難き。さりながら命を待たで我  
と身を、捨てさせ給ふ御事は、偽りなりけるかねことなれば、只恨めしう候。ツレ謡「さや  
うに人をも恨み給はど、我も恨みは有明の、詞見よとて贈りし形見をば、何しに返させ  
給ふらん。ツレ謡「いやとよ形見を返すとは、思ひあまりし言の葉の、見る度に心づくし  
の髪なれば、ツレ謡「うさにぞかへすもとの社にと、さしも贈りし黒髪を、あかすは留むべ  
き形見ぞかし。ツレ謡「愚と心得給へるや。慰めとての形見なれども、見れば思の亂髪、  
ツレ謡「分きて贈りしかひもなく、形見を返すは此方の恨み、ツレ謡「我は捨てにし命の恨み、  
ツレ謡「互にかこち、ツレ謡「かこたるよ、ツレ謡「形見ぞつらき、ツレ謡「黒髪の、上歌地謡「恨みを

げにや形見こそ  
一伊勢物語に  
「形見こそ今は  
あだなれこれな  
くば忘るゝひま  
もあまましもの  
を」  
山鹿の城一平家  
物語に新羅百濟  
高麗契丹雲のは  
てまでも落ちゆ  
かばやと思はれ  
けれど波風向  
ひて叶はねば力  
及ばず山鹿の  
城にぞ籠り給ふ  
とあり

さへに言ひそへて、うらみをさへに言ひそへて、くねる涙の手枕を、ならべて二人か逢  
ふ夜なれど、恨むれば獨寢の、ふしぐなるぞ悲しき。實にや形見こそ、なか／＼憂け  
れ、是なくは、忘るゝ事もありなんと、思ふも濡らす袂かな。思ふも濡らす袂かな。  
ツレ謡「古への事も語つて聞かせ申し候べし、今は恨みを御晴れ候へ。詠さても九州山鹿  
の城へも、敵寄せ來ると聞きし程に、取る物も取りあへず夜もすがら、高瀬舟に取り乗  
つて、豊前國柳といふ所に著く。地謡「實にや所も名を得たる、浦は竝木の柳蔭、いと  
假初の皇居を定む。ツレ謡「それより宇佐八幡に御参詣あるべしとて、地謡「神馬七疋、其外  
金銀種々の捧物、即ち奉幣の爲なるべし。  
ツレ謡「かやうに申せば猶も身の、恨に似たる事なれども、さすがに未だ君まします、御代  
の境や一門の、果をも見ずして、徒に、御身一人を捨てし事、誠に由なき事ならずや。  
ツレ謡「實にくは是は御理、さりながら、頼みなき世のしるしの告、語り申さん聞き給へ。  
地謡「そもく宇佐八幡に参籠し、さまざま祈誓怠らず、數の頼みをかけまくも、忝くも

まりとも云々  
一千載集俊成の  
歌  
三寶一佛法僧の  
三つ

みとしろの、錦の内よりあらたなる、御聲を出だしてかくばかり、シテ謠世の中のうさに  
は神もなき物を、何祈るらん心づくしに。地謠「さりともと思ふ心も蟲の音も、弱りはて  
ぬる秋の暮かな。シテ謠「さては佛神三寶も、地謠「捨てはて給ふと心細くて、一門は、氣を  
失ひ力をおとして、足弱車のすくくと、還幸なし奉る、哀なりし有様。クセかよりけ  
る處に、長門國へも、敵向ふと聞きしかば、又船に取り乗りて、いづくともなくおし出  
だす、心の内ぞ哀なる。實にや世の中の、うつる夢こそ誠なれ。保元の春の花、壽永の  
秋の紅葉とて、散々になり浮む、一葉の船なれや、柳が浦の秋風の、追手顔なる跡の波、  
白鷺の群れ居る松見れば、源氏の旗をなびかす、多勢かと肝を消す、こよに清經は、心  
にこめて思ふやう、さるにても八幡の、御託宣あらたに、心魂に残ることわり、誠正  
直の、頭にやどり給ふかと、只一筋に思ひ取り、シテ謠「あぢきなや、とても消ゆべき露の  
身を、地謠「猶置き顔に浮草の、波に誘はれ、船に漂ひていつまでか、憂き目を水鳥の、沈  
みはてんと思ひ切り、人には言はで岩代の、待つ事ありや、曉の、月に嘯く氣色にて、船

みるめをかりの  
夜一見る目に海  
松を掛けそれを  
刈る意より假に  
掛く

那落一地獄

遠近の古今集  
に「遠近のたづ  
きも知らぬ山中  
にもぼつかなく  
も呼子鳥かな」

十念一念佛十返  
のこと

の舳板に立ちあがり、腰より横笛抜き出だし、音もすみやかに吹き鳴らし、今様を歌ひ  
朗詠し、來し方行く末をかどみて、終にはいつかあだ波の、歸らぬは古へ、とまらぬは  
心づくしよ、此世とても旅ぞかし、あら思ひ残さずやと、よそ目には、ひたふる狂人と  
人や見るらん。よし人は何ともみるめをかりの夜の空、西にかたむく月を見れば、いざ  
や我も伴んと、南無阿彌陀佛彌陀如來、迎へさせ給へと、只一聲を最期にて、舟よりか  
つばと落汐の、底の水屑と沈みゆく、うき身の果ぞ悲しき。ツレ謠「聞くに心もくれはと  
り、憂き音に沈む涙の雨の、怨めしかりける契かな。  
シテ謠「いふならく、那落も同じうたかたの、あはれは誰もかはらざりけり。さて修羅道に  
遠近の、地謠「さて修羅道に遠近の、たづきは敵、雨は矢先、土は清劍山は鐵城、雲の旗  
手をついて、橋慢の劔をそろへ、邪見の眼の光、愛欲貪恚痴痛患道場、無明も法性も、  
亂るよ敵、打つは波、引くは潮、西海四海の因果を見せて、是までなりや、誠は最期の、  
十念みだれぬ御法の舟に、頼みしまよに疑ひもなく、實にも心は清經が、實にも心は清

經が、佛果を得しこそ有難けれ。

采女

梗概

奈良の帝に仕へたる采女が寵なくなりて、猿澤の池に身を投げし事、大和物語に見ゆ。これはこの歌文を材とし、采女に關する故事を交へて作る。その靈を出し、旅僧の回向を受けしむるは幽靈能共通の作意也。(三番目)

シテ 采女(前ば里女) ワキ僧

ワキ僧「是は諸國一見の僧にて候。我此程は都に候ひて、洛陽の寺社残りなく拜み廻りて候。又是より南都に參らばやと思ひ候。ヤシ誦 頃は彌生の十日餘り、花の都を旅立ちて、まだ夜をこめて東雲の、上歌影ともに、我も都を下り月、我も都を下り月、残る朝の朝霞、深草山の末つどく、木幡の關を今朝越えて、宇治の中宿井手の里、過ぐれば是ぞ奈良坂や、春日の里に著きにけり。春日の里に著きにけり。詞 急ぎ候程に、春日の里に著きて候。心靜に社參申さばやと思ひ候。

宇治の中宿一京都より奈良に行くとに宇治を中宿にするなり

西所明神—春日  
神社は武甕命、  
齋主命、天津兒  
屋根命、姫大神  
の四所の祭神あり

藤の門—藤氏一  
門のこと春日は  
其の氏神なり

平岡—枚岡とも  
かく

シテ次第詠「宮路正しき春日野の、宮路正しき春日野の、寺にもいざや参らん。サン更閑け夜  
静にして、四所明神の寶前に、歌々たる燈火も、世を背けたる影かとして、共に憐む深夜  
の月、朧々と杉の木の間を洩りくれば、神の御心にも、若く物なくや思すらん。下歌月に  
散る、花の陰行く宮めぐり、上歌はこぶ歩みの數よりも、はこぶ歩みの數よりも、積る  
櫻の雪の庭、又色添へて紫の、花を垂れたる藤の門、明くるを春の景色かな。明くる  
を春の景色かな。

ワキ詞「如何に是なる女性に尋ね申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ、  
ワキ詞「見申せば是程茂りたる森林に、重ねて木を植ゑ給ふ事不審にこそ候へ、シテ詞「さて  
は當社始て御參詣の人にて御入り候か。ワキ詞「さん候始て此所に参りて候。當社のい  
はれ委しく御物語り候へ。シテ詞「そもく當社と申すは、神護景雲二年に、河内國平岡よ  
り、此春日山本宮の峰に影向ならせ給ふ。されば此山、もとは端山の陰淺く、木陰一つ  
もなかりしを、陰頼まんと藤原や、氏人よりて植ゑし木の、もとより恵み深き故、程な

慈懸萬行—春日  
明神の菩薩號  
五重唯識—遺虛  
存實論拾遺留純  
識攝末歸本識隱  
劣願勝論遺相攝  
性識の五つその  
曇無き法心を月  
に喩ふ  
あめはとこぎ—  
雨は母子は木の  
意  
昔は云々—釋尊  
説法のご事

くかやうに深山となる。然れば當社の御誓にも、人の參詣は嬉けれど、木の葉の一葉  
も震裾に著きてや去りぬべきと、惜み給ふも何故ぞ。人の煩ひ茂き木の、陰深かれと今  
も皆、諸願成就を植ゑ置くなり。謠されば慈懸萬行の日の影は、三笠の山に長閑にて、  
五重唯識の月の光は、春日の里に隈もなし。下歌地詠「陰頼みおはしませ、只かりそめに植  
うるとも、草木國土成佛の、神木と思召し、あだにな思ひたまひそ。上歌あらかねの其始  
め、あらかねの其始め、治まる國は久方の、あめはとこぎの縁より、花開け香残りて、佛  
法流布の種久し、昔は靈鷲山にして、妙法華經を説き給ふ、今は衆生を度せんとて、大  
明神と現れ、此山に住み給へば、鷲の高嶺とも、三笠の山を御覽せよ。さて菩提樹の木  
陰とも、盛なる藤咲きて、松にも花を春日山、長閑けき陰は靈山の、淨土の春におとら  
めや。淨土の春におとらめや。

シテ詞「如何に申し候。猿澤の池とて隠れなき名池の候を御覽せられて候か。ワキ詞「承り  
及びたる名池にて候ふ御教へ候へ。シテ詞「此方へ御出で候へ。是こそ猿澤の池にて候へ。

吾妹子が云々  
拾遺集大和物語  
に見ゆ

又思ふ仔細の候へば、此池の邊にて、御經を讀み佛事をなして賜はり候へ。ワキ詞「やすき  
間の事佛事をばなし申すべし。さて誰と志して回向申し候べき。シテ詞「是は昔采女と申  
しよ人、此池に身を投げ空しくなりしなり。されば天の帝の御歌に、吾妹子が寝ぐた  
れ髪を猿澤の、詞池の玉藻と見るぞ悲しきと、よめる歌の心をば、しろし召され候はず  
や。ワキ詞「實にく此歌は承り及びたるやうに候。委しく御物語り候へ。シテ詞「昔天の  
帝の御時に、一人の采女有りしが、采女とは君に仕へし上童なり、始めは叡慮淺からざ  
りしが、程なく御心變りしを、及ばすながら君を怨み參らせて、此池に身を投げ空しく  
なりしなり。ワキ詞「實にく我も聞き及びしは、帝あはれと思召し、此猿澤に御幸なつて、  
シテ詞「采女が死骸を叡覽あれば、ワキ詞「さしもさばかり美しかりし、シテ詞「翡翠の簪、嬋娟  
の鬢、ワキ詞「桂の黛、シテ詞「丹花の唇、ワキ詞「柔和の姿引きかへて、シテ、ワキ詞「池の藻屑に  
亂れ浮くを、君もあはれと思召して、上歌地謡「わぎもこが、寝ぐたれ髪を猿澤の、寝ぐた  
れ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しきと、叡慮に懸けし御情、かたじけなやな下とし

水の月とる一猿  
が水中の月を捉  
へんとして溺る  
る事より猿澤と  
言掛く

龍女一八歳龍女  
の男子と化して  
成佛せる佛説  
補陀洛の南の  
岸に堂立て今  
ぞ采えん北の藤  
なみ、新古今集  
に春日の神詠と  
いふ

て、君を怨みしはかなさは、たとへば及びなき水の月取る猿澤の、生ける身と思すかや、  
我は采女の幽霊とて、池水に入りけり。池水の底に入りけり。(申入)  
ワキ上歌謡「池の浪、夜の汀に座をなして、寄るの汀に座をなして、假に見えつる幻の、采  
女の衣の色々に、弔ふ法ぞまことなる。弔ふ法ぞまことなる。  
一壁謡「有難や妙なる法を得るなるも、心の水と聞くものを、騒がしくとも教へあらば、浮  
む心の猿澤の、池の蓮の臺に座せん、よくく弔ひ給へとよ。ワキ謡「不思議や池の汀  
に現れ給ふは、采女と聞きつる人やらん。シテ詞「恥かしながらいにしへの、采女が姿を  
現すなり。佛果を得しめおはしませ。ワキ謡「もとよりも人々同じ佛性なり、なに疑ひも  
波の上、シテ謡「水の底なる鱗や、ワキ謡「乃至草木國土まで、シテ謡「悉皆成佛、ワキ謡「疑ひ  
なし。上歌地謡「ましてや人間に於てをや。龍女が如く我もはや、變成男子なり。采女とな  
思ひ給ひそ。しかも所は補陀洛の、南の岸に至りたり。これぞ南方無垢世界、生れん事  
もたのもしや。生れん事もたのもしや。

葛城王―橋諸兄公

淺香山云々下句淺き心は我思はなくに

夕リ地謡「實にやいにしへに、奈良の都の代々を経て、神と君との道すぐに、國家を守る誓  
 とかや。シテ、サテ誦しかれば君に仕へ人、その品々の多き中に、地謡「分きて采女の花衣の、  
 裏紫の心を碎き、君邊に仕へ奉る。シテ誦「されば世上に其名を弘め、地謡「情内にこ  
 もり、言葉外に現るよためし、世以て類多かりけり。クモ葛城王、勅に従ひ陸奥の、忍  
 ぶもぢずり誰も皆、こともおろそかなりとて、設けなどしたりけれど、猶しもなどやら  
 ん、王の心解けざりしに、采女なりける女の、土器取りし言の葉の、露の情に心解け、  
 歡感以て甚し。されば淺香山、影さへ見ゆる山の井の、淺くは人を思ふかの、心の花  
 開け、風もをさまり雲靜かに、安全をなすとかや。シテ誦「然れば采女の戯れの、地謡「色音  
 に移る花鳥の、とぶさに及ぶ雲の袖、影も廻るや盃の、御遊の御酒の折々も、采女の  
 衣の色添へて、大宮人の小忌衣、櫻をかざす朝より、今日も吳織、聲の綾をなす舞歌の  
 曲、拍子を揃へ袂を翻して、遊樂快然たる、采女の衣ぞ妙なる。取り分き忘れめや、  
 曲水の宴の有りし時、御土器たびく廻り、有明の月更けて、山時鳥誘ひ顔なるに、歡

月になけ―古歌  
 か未詳  
 撫つとも盡きぬ  
 拾遺集に「君  
 が代は天の羽衣  
 まれにきて撫つ  
 ともつきぬ巖な  
 ららん  
 松の葉の云々―  
 古今集序の詞

慮を受けて遊樂の月に鳴け、(序ノ舞)シテ誦「月に鳴け、同じ「の時鳥、地謡「天つ空音の  
 萬代までに。シテ誦「萬代と、限らじ物を天衣、撫つとも盡きぬ巖ならなん。松の葉の、  
 地謡「松の葉の、散り失せずして、正木のかづら長く傳はり、鳥の跡絶えず、天地おだや  
 かに、國土安穩に、四海波靜なり。シテ誦「猿澤の池の面、地謡「猿澤の池の面に、水滔々と  
 して、波又悠々たりとかや。石根に雲起つて、雨は草葉を打つなり。遊樂の夜すがら  
 れ、采女の戯れと思すなよ、讚佛乘の因縁なるものを、よく弔はせ給へやとて、又波に  
 入りにけり、又波の底に入りけり。

### 通小町

古今集の歌に「曉の鳴の羽れがきもと羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數かく」とあるに基きて、女の許へ百夜通はんとせる男の九十九夜になり、残る一夜は障る事ありし話あり。それが更に小町と深草少將との話となりしならむ。この曲は少將小町二人の靈を出して、往昔を語らしめ、法師の回向を受くるに終る。(四番目)

シテ 深草少將 ツレ 小野小町(前は里女)  
ワキ 僧

八瀬一比叡山の西麓  
市原野一鞍馬路なり

ワキ詞「是は八瀬の山里に一夏を送る僧にて候。こよに何處とも知らず女性一人、毎日果實爪木を持ちて來り候。今日も來りて候はど、いかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。ツレ次第誦拾ふ爪木も焼物の、拾ふ爪木も焼物の、匂はぬ袖ぞ悲しき。是は市原野のあたりに住む女にて候。詞さても八瀬の山里に、貴き人の御入り候程に、いつも果爪木を持

古へ見馴れし  
云々木材なれば  
作の實につきて  
椎の少將を思ふ  
也  
人丸の垣穂の柿  
石見の人丸社  
にありといふ筆  
山邊の笹栗の  
上總なる赤人の  
廟所ありとい  
ふ  
櫻麻の云々新  
古今集の成り  
に浦波立返り  
れどもあかぬ山  
梨の花  
小野とはいはは  
十島に宿せし夜  
野中毎に秋風の吹  
く度毎にあり見  
れば脱體ありて  
これ小野と依り  
果なりといは業  
平野と依りといは  
和生と依りといは  
語に披るといふ物  
方は所を異にし

ちて参り候。今日もまた参らばやと思ひ候。如何に申し候。又こそ参りて候へ。ワキ詞「い  
つも來れる人か。今日は果の數々御物語り候へ。ツレ誦拾ふ果は何々ぞ。地誦拾ふ果は  
何々ぞ。ツレ誦古へ見馴し車に似たるは、嵐にもろき落椎。地誦歌人の家の果には、  
ツレ誦「人丸の垣穂の柿、山の邊の笹栗、地誦窓の梅、ツレ誦園の桃、地誦花の名にある櫻  
麻の、苧生の浦梨猶もあり。櫛香椎眞手葉椎、大小柑子金柑、あはれ昔の戀しきは、花  
橘の一枝、花橘の一枝。  
ワキ詞「果の數々は承りぬ。さてく御身は如何なる人ぞ、名を御名のり候へ。ツレ誦恥  
かしや己が名を、地誦「小野とはいはは薄生ひたる、市原野邊に住む姥ぞ、跡とひ給へ御  
僧とて、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。  
ワキ詞「かよる不思議なる事こそ候はね。只今の女性の名を委しく尋ねて候へば、小野とは  
いはは薄生ひたる、市原野に住む姥と申し、かき消すやうに失せて候。こよに思ひ合は  
する事の候。或人市原野を通りしに、薄一村生ひたる蔭よりも、誦秋風の吹くに付けて

座具一敷物  
南無幽靈一回向  
の文

重きが上の一新  
古今集の歌「さ  
らぬだに重きが  
上の小夜衣わが  
妻ならぬ妻を重  
ねそ」  
三瀬川一冥途の  
三途の川

もあなめあなめ、詞小野とはいはじ薄生ひけりとあり。是れ小野の小町の歌なり。さて  
は疑ふ所もなく、只今の女性は小野の小町の幽霊と思ひ候程に、彼市原野に行き、小町  
の跡を弔はばやと思ひ候。上歌謡此草菴を立ち出でて、此草菴を立ち出でて、猶草深く露  
しけき、市原野邊に尋ね行き、座具を展べ香を焼き、南無幽霊成等正覺、出離生死頓  
生菩提。

ッレ一聲謡「うれしのお僧の弔ひやな、同じくは戒授け給へお僧。シテ謡「いや叶ふまじ戒授け  
給はど、恨み申すべし。早歸り給へお僧。ッレ謡「こは如何に、たまくかよる法に逢へば、  
猶其苦患を見せんとや。シテ謡「二人見るだに悲きに、おん身一人佛道ならば我思ひ、重き  
が上の小夜衣、重ねて憂き目を三瀬川に、沈みはてなばお僧の、授け給へるかひも有る  
まじ。早歸り給へやお僧達。  
上歌謡「猶も其身は迷ふとも、猶も其身は迷ふとも、戒力に引かれれば、などか佛道ならざ  
らん。只共に戒を受け給へ。ッレ謡「人の心は白雲の、我は曇らじ心の月、出でてお僧に弔

深草少將一卒都  
邊小町に注す  
櫛一轆を載する  
臺

山城の云々一萬  
葉遺集の歌「山  
城の木幡の里に  
馬はあれどかち  
よりぞ行く君を  
思ひかねて」

はれんと、薄おし分け出でければ、シテ謡「包めど我も穂に出でて、包めど我も穂に出で  
て、尾花招かばとまれかし。ッレ謡「思ひは山の鹿にて、招くと更にとまるまじ。シテ謡「さ  
らば煩惱の犬となつて、打たると離れじ。ッレ謡「恐ろしの姿や。シテ謡「袂を取つて引き  
とむる、ッレ謡「引かる袖も、シテ謡「控ふる、地謡「我が袂も、共に涙の露、深草の少將。  
ワキ詞「さては小野の小町四位の小將にてましますかや。とてもものに車に車の榻に、百夜通ひ  
し所をまなうで御見せ候へ。ッレ謡「もとより我は白雲の、かよる迷ひの有りけるとは、  
シテ謡「思ひもよらぬ車の榻に、百夜通へと偽りしを、諸真と思ひ、詞曉毎に忍び車の榻  
に行けば、ッレ謡「車の物見らつとまじや。姿を變へよといひしかば、シテ謡「輿車はいふに  
及ばず、ッレ謡「いつか思ひは、地謡「山城の、木幡の里に馬はあれども、シテ謡「君を思へ  
ば徒歩跣足。ッレ謡「さてその姿は、シテ謡「笠に簔、ッレ謡「身のうきよとや竹の杖、シテ謡「月  
には行くも暗からず。シテ謡「さて雪には、シテ謡「袖を打ち拂ひ、ッレ謡「さて雨の夜は、シテ謡「目  
に見えぬ、詞「鬼一口も恐ろしや。ッレ謡「たまく曇らぬ時だにも、シテ謡「身獨に降る涙の雨



只一念一飲酒戒を保たんとする一念にて成佛するなり

か、あら暗の夜や。ツレ謡「夕暮は、一方ならぬ思ひかな。シテ謡「夕暮は何と、地謡「一方ならぬ思ひかな。シテ謡「月は待つらん月をば待つらん。我をば待たじ空言や。地謡「曉は、曉は、數々多き思ひかな。シテ謡「我爲ならば、地謡「鳥もよし鳴け、鐘も只鳴れ、夜も明けよ、たゞ獨寝ならばつらからじ。シテ謡「かやうに心を盡し盡して、地謡「かやうに心を盡し盡して、榻の數々よみて見たれば、九十九夜なり。今は一夜よ嬉しやとて、待つ日になりぬ、急ぎて行かん、姿は如何に、シテ謡「笠も見苦し、地謡「風折烏帽子、シテ謡「蓑をも脱ぎ捨て、地謡「花摺衣の、シテ謡「色重ね、地謡「うら紫の、シテ謡「藤袴、地謡「待つらんものを、シテ謡「あら急がしや、すは早今日も、地謡「紅の狩衣の、衣紋けたかく引き繕ひ、飲酒は如何に、月の盃なりとて、戒めならば保たんと、只一念の悟にて、多くの罪を滅して、小野の小町も少將も、共に佛道成りにけり。共に佛道成りにけり。

### 小袖曾我

十郎祐成(幼名一萬)五郎時致(幼名箱王)は河津三郎祐泰の遺孤也。其母曾我祐信に再縁す。故に曾我兄弟と名乗る事人の知る所也。富士の牧狩を好機として、兄弟父の仇を報ぜんとし、母の許へ暇乞に出づ。時致は勘當せられ居れども此時許さるゝなり。曲名を小袖と題せるは母の形見の小袖を受けて別るゝ事曾我物語にあればなり。(四番目)

シテ 祐成 ツレ 時致 ツレ 團三郎  
ツレ 鬼王 ツレ 母 狂言 春日局

をしか一惜しと 牡鹿とにかく

シテ、ツレ「命をしかの隠れ里、命をしかの隠れ里、富士の裾野を狩らうよ。シテ謡「是は曾我の十郎祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候ふ間、我等も罷り出で候。また是なる時致は、母にて候者の勘當にて候程に、申し直し連れて御狩に罷り出でばやと存じ候。四人サシ謡「時しも頃は建久四年、五月半の富士の雪、五月雨雲に降り交せて、鹿の子

星月夜―鎌倉の  
枕詞鹿の星毛と  
言掛く  
鎌倉殿―頼朝  
祐經―工藤正實  
我兄弟が父の仇  
人知れぬ―頼政  
の歌の句  
名を富士の嶺に  
―名を高く揚げ  
んとの意

斑や群山の、裾野の鹿の星月夜、鎌倉殿の御狩の御遊、けにたくひなき御事かな。シテ謠「東八箇國の兵ども、皆御供に参るなれば、四人、シテ、ツレ、謠、定めて敵の祐經も、御供申さぬ事あらじ。たとひ討つまでの、事は夏野の鹿なりとも、ねらひて見ばやと大丈夫の、狩人にまぎれ打ち出づる。下歌人知れぬ大内山の山守も、上歌木隠れて、それとは見えじ梓弓、それとは見えじ梓弓、矢頃にならば鹿よりも、祐經を射とどめて、名を富士の嶺に揚げばやと、思ひ立ちぬる狩衣、たとへば君の御咎め、よしそれとても數ならぬ、身にはなかく、恐れなし、身にはなかく、恐れなし。

シテ詞「是に暫く御待ち候へ。某参りて案内を申さうするにて候。如何に案内申し候。春日詞「誰にて御座候ふぞ。や、祐成の御参りにて候。シテ詞「さん候某が参りたる由申し候へ。春日詞「畏つて候。大方殿よりの御説には、祐成の御参りならば申せ、時致の御参りならばな申しそと仰せ出だされて候。シテ詞「只某が参りたるに申し候へ。

春日詞「いかに申し上げ候。祐成の御参りにて候。母詞「此方へと申し候へ。あら珍しや十郎

向顔―對面

不興の身―母より勸當せられたる身  
高間の山の―新古今集の歌に、「よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の峯の白雲」はくそのもり！作に母、森に守を掛く  
御もぼえ―寵愛  
春日野の―古今集の歌末句、出てみよ今幾日ありて若菜つみてん、春日の局を掛く

殿、いづくへの序ぞや、母がために態とはよも。シテ詞「さん候久しく参らず候程に向顔のため、又は富士の御狩と申し候程に。母謠「さればこそ思ひし事よ君がため、御狩に出づる序ぞや。シテ謠「いつしか親子の御戯れ、珍し顔に羨しやと、時致謠「思ひながらも時致は、不興の身なれば物の隙より、地謠「高間の山の峰の雲、よそにのみ見てや止みなん。同じ子に、同じはよそのもり乳母、同じはよそのもり乳母、隔なくこそ育てしに、さも引きかへて祐成には、いろくの御もてなし、御祝言の御盃、たとへば時致は、後に生れしばかりなり。正しく同じ子の身にて、御おほえ葦垣の、隔てあるこそ悲しけれ。シテ詞「日本一の御機嫌にて候。あれへ御参りあつて、春日局をもつて申され候へ。時致詞「某が事は御機嫌いかど計りがたく候間、先々まゐり候まじ。シテ詞「只某に御任せあつて、急いで御参り候へ。時致詞「如何に春日の局、時致が参りたる由それく申し候へ。謠「いつしか守乳母まで、心變りし春日野の、飛火の野守、出でてだに見候はぬぞや。詞「時致が参りたる由それく申し候へ。

九上の禪師一是も兄弟の一人越後の九上に出家してあり

御簾一見ずに掛

かせぎ一鹿、時致を喚へたる事元より也

母詞「あら不思議や 祐成は只今來りぬ、九上の禪師は寺にあり、それならで子はなきに時致といふは誰そや。今思ひ出だしたり、箱根の寺に有りし箱王と云ひしえせ者か。それならば母が出家になれと申しよを聴かざりしほどに勘當せしに、押して是まで來れるは、猶重ての勘當とや。伊豆箱根富士権現も御覽ぜよ、ほな此後も勘當と、時致誦「御誓言に部遣戸を、地誦」立て添へられて茫然と、やるかたもなき此身かな。うたてやせめて今一目、御簾几帳も下りたり、あら情なの御事や。」

シテ誦「祐成は、かくとも知らで時致が、時移りたり事よきかと、中門を見やりつと、早此方へと招けば、時致誦「招かれて山のかせぎ、地誦」泣くく來りたり。打たれても親の杖、なつかしければ去りやらず、なつかしければ去りやらず。シテ詞「さて御機嫌は何と御座候ぞ。時致詞「以ての外御機嫌にて、猶かさねての御勘當と仰せ出だされて候。」

母詞「如何に誰かある。春日詞「御前に候。母詞「時致が事を申さば、祐成共に勘當と申し候へ。春日詞「畏つて候。いかに申し候。時致の御事を御申しあらば、祐成ともに御勘當と仰せ出

同宿一同寺の僧墨衣一墨染の衣即ち法衣浦島が子一箱根といはん序にて箱より明けと續く俗一僧ならぬ人

だされて候。シテ詞「まづ畏つたと申し候へ。某存する子細の候間、此度は同心にて申さうするにて候。時致詞「いやく、某はまわり候まじ。シテ詞「只御参り候へ。いかに申し候。我等が親の敵の事、世に隠れなく候處に、餘りに使なく候間、時致が事を申し直し、連れて御狩に出づべき所に、時致が事を申さば、祐成共に御勘當と候や。よくよくこれを案じ見るに、クリ誦「惣じて祐成をも誠は思ひ給はぬぞや。地誦「たとひ時致出家の暇を申すとも、兄祐成に郎等もなし、しかも身に思ひあり、おのれらさへに見捨つるか、却つて御叱り候ひてこそ、慈悲の母とも申すべけれ。シテ、サシ誦「それに時致を法師にならぬとの御勘當、たとひ仰せに従ひ、出家仕り候とも、地誦「我等が事は世に隠れなし。あれ見よ河津が子供こそ、敵を遁れんとの家、正しく弘法のためならずと、同宿も思ひ卑しまば、心も染まぬ墨衣の、浦島が子の箱根寺にて、明暮くやしと思ふならば、中々俗には劣るべし。クセ時致は、箱根に有りししるしに、法華經一部讀み覺え、常は讀誦し母上の、現世安穩、後世善所と祈念する。又は毎日に、六萬遍の念佛、父河津殿に

かりくち―狩場

廻向する。かほどに他念なき身を、此三年不興蒙る。恩顔を拜せねば、御戀しさも一つ、  
 又は狩場への門出、御暇ごひしさ、一方ならぬ望なり。大かた治まる御代なれども、狩  
 場や漁に、不慮の争ひあるものを、シテ謡、其上我等は、狩場において例悪しと。地謡「昔  
 を思ひ伊豆の奥の、赤澤山のかりくらにて、父も失せさせ給はずや。今とても、狩場と  
 あらばなどしも、御心にも懸げざると、恨み顔にも兄弟は、泣くく立つて出でければ、  
 母謡「母は聲をあけ、あれとめ給へ人々よ。地謡「不興をも勘當をも、許すぞ許すぞ時致と  
 て、泣くく出でさせ給へば、二人謡「兄弟は嬉し泣きに、伏しまるべばや、地謡「見る人も  
 思ひやりて、泣き居たりや。  
 母謡「祐成申すによつて、時致が勘當許すにてあるぞ。近う來りて、狩場への門出祝ひて  
 御入り候へ。シテ謡「如何に時致近う参りて、この年月の御物語申し候へ。さるにても地謡「此  
 ほど時致が、盡す心に引き替へて、いまはいつしか思ひ子の、母の情有難や。あまりの  
 嬉さに、祐成御酌に立ちて、とりぐ、時致と共に祝言の、地謡「謠ふ聲、シテ、ツレ謡「高き

雪を廻らす―廻  
雪といふ樂の名

名を、雲居にあけて富士の嶺の、地謡「雪を廻らす舞のかざし、(男舞)地謡「舞のかざしの其  
 ひまに、舞のかざしの其ひまに、兄弟目をひき、これや限の親子の契と、思へば涙もつ  
 きせぬ名残、牡鹿の狩場に遅参やあらんと、暇申してかへる山の、富士野の御狩の折  
 をえて、年來の敵、本望を遂げんと、たがひに思ふ噴毒の煙、胸の烟を富士嵐に、晴ら  
 して月を清見が關に、終にはその名をとめなば兄弟、親孝行の、ためしにならん嬉しさ  
 よ。

内六

竹生島

梗

概

竹生島は琵琶湖上に浮べり。祭神は宇賀魂命と稱す。傳  
ふらく行基菩薩此島に來りしに、神女示現あり、依て寺を立  
て、辨才天女像を置くと。此曲は神徳を讚歎する意に出で、  
天女龍神形を現して、天下泰平、國土安穩を誓ひ給ふ、めでた  
き作なり（鴈能）

シテ 龍神（前は漁翁） ツレ 天女（前は女）

ワキ 臣下

ワキ 次第誦「竹に生ると、鶯の、竹に生ると、鶯の、竹生島詣いそがん。ワキ詞「そもく、これ  
は延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。さても江州竹生島の明神は、靈神にて御座候間、此  
度君に御暇を申し、只今竹生島に參詣仕り候。道行「四の宮や、河原の宮居末はやき、

竹に生ると鶯  
といはん序にて  
竹生島の名を含  
めたり

走井一逢坂の閑  
にあり  
鳩の浦一琵琶湖  
を鳩のうかとい  
み

鱗一魚類  
わび人一貧しき  
人

船呼はひ一船を  
呼ぶこと

河原の宮居末はやき、名も走井の水の月、くもらぬ御代に逢坂の、關の宮居を伏し拜み  
山越近き志賀の里、鳩の浦にも著きにけり。鳩の浦にも著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、  
鳩の浦に著きて候。あれを見れば釣舟の來り候。暫く相待ち便船を乞はばやと存じ候。  
シテ、サシ謡「おもしろや頃は彌生の半なれば、波もうらよに海の面、ツレ謡「霞み渡れる朝ほら  
け、一聲謡「のどかに通ふ船の道、シテ、ツレ謡「憂きわざとなき心かな。シテ、サシ謡「これはこの浦  
里に住みなれて、明け暮運ぶ鱗の、數をつくして身ひとつを、助けやせんとわび人の、  
隙も波間に明け暮れて、世を渡るこそ物うけれ。下歌よし、同じ業ながら、世にこえた  
りなこの海の、上歌名所多き數々に、名所多き數々に、浦山かけて眺むれば、志賀の  
都花園 昔ながらの山櫻、眞野の入江の船呼ひ、いざさしよせて言問はん。いざさしよ  
せて言問はん。  
ワキ詞「いかに是なる船に便船申さうなう。シテ詞「これは渡し船にてもなし。御覽候へ釣船  
にて候よ。ワキ詞「こなたも釣船と見て候へばこそ便船とは申せ。これは竹生島に始めて參

誓の船一佛の衆  
生濟度を願ふ

都の富士一比叡  
山のこと

綠樹影沈魚上  
木清波月落兔奔  
浪一建長寺の  
自休藏主竹生島  
に詣てたる時の  
句  
辨財天一大辨天  
又妙音天女とも  
いふ多く山巖深  
險、窟樹林の處  
に居す

詣の者なり。誓の船に乗るべきなり。シテ詞「けに此所は靈地にて、歩み運び給ふ人  
を、とかく申さば御心にも違ひ、又は神慮も計りがたし。ツレ謡「さらばお船を參らせん。  
ワキ謡「嬉しやさては迎への舟、法の力とおほえたり。シテ詞「けふは殊更のどかにて、心に  
かよ 風もなし。地謡「名こそさよ波や、志賀の浦にお立ちあるは、都人がいたはしや。お  
舟に召されて浦々を眺め給へや。地謡「所は海の上、所は海の上、國は近江の江に近き山  
山の春なれや。花はさながら白雪の、降るか残るか時知らぬ、山は都の富士なれや、猶さ  
えかへる春の日に、比良の嶺おろし吹くとも、沖漕ぐ船はよも盡きじ。旅のならひの  
思はずも、雲居のよそに見し人も、同じ舟に馴衣、浦を隔てと行くほどに、竹生島も見  
えたりや。シテ謡「綠樹影沈んで、地謡「魚木に上る氣色あり。月海上に浮んでは、兔も浪を  
奔るか。面白の島のけしきや。  
シテ詞「舟が著いて候御上り候へ。ワキ詞「あら嬉しや頼て神前へ參り候べし。シテ詞「この尉が  
御道しるべ申さうするにて候。これこそ辨財天にて候へ、よくく御祈念候へ。ワキ詞「承

九生如來—大日如來の事

利生—利益

此湖の主—龍神

り及びたるよりもいやまさりて有りがたう候。不思議やな此島は、女人禁制とこそ承りて候に、あれなる女人は何とて参られて候ぞ。シテ調「それは知らぬ人の申し事にて候忝くも此島は、九生如來の御再誕なれば、殊に女人こそ参るべけれ。シテ謠「なうそれまでもなきものを、地謠「辨財天は女體にて、辨財天は女體にて、その神徳もあらたなる、天女と現じ在しませば、女人とて隔なし。只知らぬ人の言葉なり。クセかよる悲願を起して、正覺年ひさし。獅子通王のいにしへより、利生さらに怠らず。シテ謠「けにくくかほど疑ひも、地謠「荒磯島の松陰を、便に寄する海人小舟、われは人間にあらずとて、社壇の扉をおし開き、御殿に入らせ給ひければ、翁も水中に、入るかと思しが白波の、立ち返り、われは此湖の主ぞと言ひすてよ、また波に入らせ給ひけり。(中入)

地謠「御殿頻に鳴動して、日光輝きて、山の端出づる如くにて、現れ給ふぞかたじけなき。天女謠「そもくこれは、此島に住んで神を敬ひ國を守る、辨財天とはわが事なり。地謠「その時虚空に音楽聞え、その時虚空に音楽聞え、花ふりくだる春の夜の、月にかよ

下界—こゝは龍宮の意  
まれびと—賓客  
稀人の義

有縁の衆生—佛の信徒

やく少女の袂、かへすぐも面白や。(天女舞)

地謠「夜遊の舞樂も時すぎて、夜遊の舞樂も時すぎて、月澄みわたる海づらに、浪風頻に鳴動して、下界の龍神あらはれたり。

地謠「龍神湖上に出現して、龍神湖上に出現して、光もかよやく金銀珠玉を、彼のまれびとに、捧ぐるけしき、ありがたかりける奇特かな。シテ謠「もとより衆生濟度の誓、地謠「もとより衆生濟度の誓、様々なれば、或は天女の形を現じ、有縁の衆生の諸願をかなへ、又は下界の龍神となつて、國土を静め誓を現し、天女は宮中に入らせ給へば、龍神はすなはち湖水に飛行して、浪を蹴立て水を返して、天地に群がる大蛇のかたち、天地に群がる大蛇のかたちは、龍宮に飛でぞ入りにける。

# 朝長

梗概

源朝長は義朝の二男なり。平治の戦に打負けて、父子共に青墓の宿まで落ちしが、朝長はこゝにて自刃して死せり。此曲はその有様を半ば女に語らせ、半ば幽霊に語らす。旅僧の観音懺法の一段有名なり。(二番目)

シテ女 ツレ 從者 後シテ 朝長  
ワキ僧 ワキツレ僧

清涼寺—釋迦堂あり  
御開き—落つるを思ひていふ語  
大夫進—大夫は五位進は中宮少進の略

ワキ詞「是は嵯峨清涼寺より出でたる僧にて候。さても此度平治の亂れに、義朝都を御開き候。中にも大夫進朝長は、美濃國青墓の宿にて自害し果て給ひたる由承り候。我等も朝長の御ゆかりの者にて候程に、急ぎ彼所に下り、御跡をも弔ひ申さんと思ひ立ちて候。三人道行誦、近江路や、瀬田の長橋うちわたり、瀬田の長橋うちわたり、猶行く末は鏡山、老會の森を打ち過ぎて、末に伊吹の山風の、不破の關路を過ぎ行き、青墓の宿に著

きにけり。青墓の宿に著きにけり。

三人次第誦「花の跡訪ふ松風や、花の跡訪ふ松風や、雪にも恨みなるらん。シテ誦「是は青墓の長者にて候。ツレ三人誦「それ草の露水の泡、はかなき心のたぐひにも、哀をしるは習な

るに、是は殊更思はずも、人のなけきを身のうへに、かよる涙の雨とのみ、しをるよ袖の花薄、穂にいだすべき言の葉も、泣くばかりなる有様かな。下歌光の陰を惜めども、

月日の數は程ふりて、上歌雪の内、春は來にけり鶯の、春は來にけり鶯の、凍れる涙今は早、解けても寝ざれば夢にだに、御面影の見えもせで、痛はもかりし有様を、思ひ出づるもあさましや。思ひ出づるもあさましや。

シテ詞「不思議や。此御墓所へ我ならでは、七日々々に参り、御跡弔ふ者もなきに、旅人と見えさせ給ふ御僧の、涙を流し懇に弔ひ給ふは、如何なる人にてましますぞ。ワキ詞「さん候。是は朝長の御ゆかりの者にて候が、御跡弔ひ申さんため是まで参りて候。シテ詞「御ゆかりとは懐かしや、さて朝長の御ため如何なる人にてましますぞ。ワキ詞「是は朝長の御

雪の内—古今集の歌未句今や解くらん



かやうの姿一僧

抖擻一梵語。頭陀の漢譯、佛道修行のこと  
行脚一所不住の僧を云ふ

三世一過去、現在、未來  
二世一現在、未來

北邙一唐土の火葬場、轉じて一般に火葬の義に云ふ

傳何某と申す者にて候ひしが、さる事有りて御暇賜はり、はや十ヶ年に餘り、かやうの姿となりて候。とくにも罷り下り、御跡弔ひ申したくは候ひつれども、怨敵のゆかりをば出家の身をも許さねば、抖擻行脚に身をやつし、忍びて下向仕りて候。シテ詞「さては取り分きたる御なじみ、さこそは思召すらめ。わらはも一夜の御宿に、あへなく自害し果て給へば、たゞ身のなげきの如くにて、かやうに弔ひ参らせ候。ワキ謠「けに痛はしや我とても、もと主従の御契、是も三世の御知遇、シテ詞「わらはも一樹の蔭のやどり、他生の縁と聞く時は、實に是とても二世の契の、ワキ謠「今日しも互にことに来て、シテ謠「弔ふ我も、ワキ謠「朝長も、上歌地謠「死の縁の、所も逢ひに青墓の、所も逢ひに青墓の、跡のしるしか草の蔭の、青野が原は名のみして、古葉のみの春草は、さながら秋の淺茅原、荻の焼原の跡までも、けに北邙の夕煙、一片の雲となり、消えし空は色も形も、なき跡ぞあはれなりける。なき跡ぞあはれなりける。

ワキ詞「如何に申し候。朝長の御最期の有様くはしく語つて御聞かせ候へ。シテ詞「申すにつ

鎌田殿一正清といふ義朝の從者野間の内海一尾張國大崩一地名

けて痛はしや。暮れし年の八日の夜に入りて、門を荒けなく敲く音す。誰なるらんと尋ねしに、鎌田殿と仰せられし程に門を開かすれば、武具したる人四五人内に入り給ふ。義朝御親子、鎌田金丸とやらん、わらはを頼みおほしめす。明けなば河船に召され、野間の内海へ御落あるべきとなり。又朝長は、都大崩にて膝の口を射させ、とかく煩ひ給ひしが、夜更け人靜つてのち、朝長の御聲にて、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と二聲宣ふ。鎌田殿参り、こはいかに朝長の御自害候と申させ給へば、義朝驚き御覽すれば、はや御肌衣も紅に染みて、目もあてられぬ有様なり。其時義朝、何とて自害しけるぞと仰せられしかば、朝長息の下より、謠さん候都大崩にて膝の口を射させ、既に難儀に候しを、馬にかより是までは参り候へども、今は一足も引かれ候はず、路次にて捨てられ申すならば、犬死すべく候、只返すく御前途をも見届け申さで、かやうになり行き候事、さこそ云ひがひなき者と、思召され候はんすれども、道にて敵に逢ふならば、雑兵の手にかよらん事、あまりに口惜しう候へば、是にて御暇賜はらんと、地謠「是を最

三世十方三世は前に注す、十方は四方四隅天地の聖衆一諸佛菩薩

観音懺は一經文の名、鉦鼓一讀經と共に鳴らす器

期のお言葉にて、事切れさせ給へば、義朝正清とりのつきて、歎かせ給ふ御有様は、よその見る目も、哀さをいつか忘れん。上歌 悲しきかなや、形を求むれば、苔庭が朽骨、見ゆるもの今は更になし。さて其聲を尋ねれば、草徑が亡骨となつて答ふる者も更になし。三世十方の佛陀の聖衆も、あはれむ心あるならば、亡魄幽霊も、さこそ嬉しとおもふべき。下歌 かくて夕陽影うつる、かくて夕陽影うつる、雲たえん／＼に行く空の、青野原の露分けて、彼の旅人を伴ひ、青墓の宿に歸りけり。青墓の宿に歸りけり。

シテ詞「御僧に申し候。見苦しく候へども、暫く是に御逗留候ひて、朝長の御あとを御心靜かに弔ひ參らせられ候へ。ワキ詞「眞に御志有難う候、暫くこれに候べし。シテ詞「誰かある罷り出でて、御僧に宮仕へ申し候へ。(中人)

ワキ謡「さても幽靈朝長の、佛事はさま／＼多けれども、ワキツレ謡「とりわき亡者の貴み給ひし、ワキ謡「観音懺法讀みたてまつり、上歌謡「聲滿つや、法の山風月更けて、法の山風月更けて、光和らぐ春の夜の、眠を覺ます鉦鼓、時もうつるや後夜の鐘、音澄み渡る折

玉文一經文

思ひの玉一念殊、珠をらよ

からの、御法の夜聲感涙も、浮むばかりの氣色かな。浮むばかりの氣色かな。

後シテ謡「あらありがたの懺法やな。昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益同一體。眞なるかな眞なるかな、頼もしや、聞けば妙なる法の御聲、地謡「吾今三點、シテ謡「揚枝淨水唯願薩埵と、地謡「心耳を澄ませる玉文の瑞諷、感應肝に銘する折から、シテ謡「あら尊の弔ひやな。

ワキ謡「不思議やな観音懺法聲すみて、燈の影幽なるに、まさしく見れば朝長の、影の如くに見え給ふは、若々夢か幻か。シテ謡「もとよりも夢まほろしの假の世なり、其疑ひを止め給ひて、猶々御法を講じ給へ。ワキ謡「けに／＼かやうにまみえ給ふも、偏に法の方ぞと、思ひの玉の數くりて、シテ謡「聲を力にたよりくるは、ワキ謡「眞の姿か、シテ謡「幻かと、ワキ謡「見えつ、シテ「隠れつ、ワキ謡「面影の、上歌地謡「あれはとも、いはど形や消えなまし、いはど形や消えなまし。消えずはいかで燈火を、背くなよ朝長を、共にあはれみて深夜の、月も影添ひて、光陰を惜み給へや。けにや時人を、待たぬ浮世の習ひなり。只何事もう

朝有紅顔詩世  
路暮爲白骨  
朽郊原一朗詠  
集の詩句

ち捨てよ、御法を説かせ給へや。御法を説かせ給へや。

シテ、グリ謡「それ朝に紅顔あつて、世路に誇るといへども、地謡「夕には白骨となつて、郊原に朽ちぬ。シテ、サシ謡「昔は源平左右にして、朝家を守護し奉り、地謡「御代を治め國家を鎮めて、萬機の政すなほなりしに、保元平治の世の亂れ、いかなる時か來りけん、シテ謡「思はざりにし弓馬のさわぎ、地謡「ひとへに時節到來なり。クセさるほどに、嫡子惡源太義平

彌平兵衛一宗清

長田一平忠致

一切の男子云々  
一經文の語

は、石山寺に籠りしを、多勢に無勢かなはねば、力なく生捕られて、終に誅せられにけり。三男兵衛の佐をば、彌平兵衛が手にわたり、是も都へぞ捕られける。父義朝は是よりも、野間の内海に落ちゆき、長田をたのみ給へども、頼む木のもとに雨漏りて、やみやみ討たれ給ひぬ。いかなれば長田は、云ひかひなくて主君をば、討ち奉るぞや。如何なれば此宿の、あるじはしかも女人の、かひなくしくも頼まれて、一夜の情のみか、かやうに跡までも、御弔ひになる事は、シテ謡「そもくいつの世の契ぞや。地謡「一切の男子をば、生々の父と頼み、萬の女人を、生々の母と思へとは、今身の上知られたり。さ

一乗一法華經の  
こと

善所一極樂

白雲紅葉一源平  
の旗色を咏ふ

乗替一用意の習  
馬

ながら親子の如くに、御歎きあれば弔ひも、誠に深き心ざし、請け悦び申すなり。朝長が後生をも、御心易く思召せ。

ロンギ地謡「けに頼むべき一乗の、功力ながらになどされば、未だ暎志の甲冑の、御有様ぞ、いたはしき。シテ謡「梓弓、もとの身ながら玉きはる、魂は善所に赴けども、魄は修羅道に残つて、しばし苦しみを受くるなり。地謡「そもく修羅の苦患とは、いかなる敵にあひ竹の、シテ謡「此世にて見し有様の、地謡「源平兩家、シテ謡「入り亂るよ、地謡「旗は白雲紅葉の、散りまじり戦ふに、運の極の悲さは、大崩にて朝長が、膝の口を篋深に射させて、馬の太腹に射つけらるれば、馬は頻に跳ねあがれば、鎧を越して下り立たとすれども、難儀の手なれば、一足もひかれざりしを、乗替にかきのせられて、憂き近江路をしのぎ來て、此青墓に下りしが、雑兵の手にかよらんよりはと思ひ定めて、腹一文字にかき切つて、其まゝに修羅道に遠近の、土となりぬる青野が原の、亡き跡とひてたびたまへ。亡き跡を訪ひてたび給へ。

姨捨

梗 大和物語に、或る男老いたる叔母を養ひしが、妻姑を憎しみて、そを山に捨てよと勸めければ、男老女を山に捨てしに、後悲しさに堪へず、山上の月を見て、わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見てと詠み、又行きて老女を迎へ來れりとの話あり。そを脚色して、老女に昔語をなさしめたるもの即ちこれなり。重き能とす。

シテ 姨(前は里女) ワキ 旅僧

月の名近き一月の縁近き秋  
 中宿—途中の旅宿

ワキ次第謠「月の名近き秋なれや、月の名近き秋なれや、姨捨山を尋ねん。詞かやうに候者は、都方に住居仕る者にて候。我未だ更科の月を見ず候程に、この秋思ひ立ち姨捨山へと急ぎ候。道行謠 此程の、しばし旅居の假枕、しばし旅居の假枕、また立ち出る中宿の、明かし暮らして行く程に、こよぞ名におふ更科や、姨捨山に著きにけり。姨捨山に著きにけり。詞さても我姨捨山に來て見れば、嶺平かにして萬里の空もへだてなく、千

里に隈なき月の夜、さこそと思ひやられて候。いかさま此所に休らひ、今宵の月を詠めばやと思ひ候。

シテ詞「なうくあれなる旅人は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候 是は都の者にて候が、はじめてこの所に來りて候。さてく御身はいづくに住む人ぞ。シテ詞「是は此更科の里に住む者にて候。今日は名におふ秋の半、暮るよを急ぐ月の名の、殊に照り添ふ天の原、隈なき四方の氣色かな。いかに今宵の月の面白からんすらん。ワキ謠「さては更科の人にてましますかや。さてく古へ姨捨の、在所はいづくの程にて候ぞ。シテ詞「姨捨山のなき跡と、問はせ給ふは心得ぬ。謠 我が心慰めかねつ更科や、姨捨山に照る月を見てと、詠ぜし人の跡ならば、是に小高き桂の木、陰こそ昔の姨捨の、其なき跡にて候へとよ。ワキ謠「さては此木の陰にして、捨て置かれにし人の跡の、シテ詞「其まよ土中に埋れ草、かりなる世とて今は早、ワキ謠「昔語りになりし人の、猶執心や残りけん。シテ謠「なき跡までも何とやらん、ワキ謠「物凄しき此原の、シテ謠「風も身にしむ、ワキ謠「秋の心。上歌地謠「今と

桂の木一月中に桂樹ありといふより月の縁とす